763-161
1200501597514
63
161

7

青月窩集

春日政治著

岩波書店刊

かうした小集に名づける爲に、私は少からず困まつた。たま〳〵華甲帖を取つて見ると、長壽吉博士が敍してくれた文の中に、「春山藹々」といふ語を得たので、姑らくこの字や音でも借りておかうかと、「春靄集」にして見た。ところがその「春」の字が、あやにく自分の姓に差合ふので、據なく「青」の字に代へて見たのがこの名である。別に私自身が飛切りだとも思はないし、まして人の心を引く字づらだなどとも思はない。無論、生まれた時節に因んだ子供の名に、「春吉」とか「お秋」とかいふ場合の外の何ものでもない。

763
161

はしがき

昨春教職から退く際、舊く書棄てたものを集めて見てはどうかと勸めてくれる人があつて、「研究」といふものの圈外で、多少安易に讀まれる若干篇を拔いて見たのがこの集である。家の子どもは、常に私の書くものを、どことなくペダゴーギッシュだと戯評してゐる。或友だちは、嘗て私の發表したものを、あまりに啓蒙的だと注意してくれた。生來小さく理わることのみ知つて、感ずることの至つて鈍い男の、而も歷て來た路を振返れば、むしろさうあるのが自然であらうと、文を拔いて見て、今更ながら子どもや友だちの言葉に自ら頷くものがある。しかしそれが眞の私なのだ、私が私ならぬものを作るより、せめても好くはないだらうか。是がこの集を世に送るべく、私に與へた唯一の自己肯定なのである。

文はたゞ書いた年月に隨つて竝べて見たが、中に番を狂はせた個處の生じたのは、類を以て一しよに置いた方がよいと思はれる二三があつたからである。初に出た奈良在住の頃の數篇は、主として家庭の女性の爲に書いたものであり、つゞく福岡時代のものは國語・國文の學生

の爲に書いたものが多い。さて最後に附加することにした兩三篇は、放送のノートから拔いて來たものである。

こゝにこの集を上版するに當つて、少からず受けた畏友小牧健夫君の高配と、上版を引受けてくれた岩波書店主の厚意とに對して深く謝するものである。

昭和十四年三月

春日政治

目次

徒然草と衣食住……一
言語から觀た婦人……二三
螢狩の童謠……三三
「榊の薫」を讀んで……四六
「永代藏」と「胸算用」……六二
久保田さんの事ども……七七
海の哀話……八八
銷夏漫筆……九七
　鐘の岬を訪ねて
　古京幻想

谷の家に歸つて
歳次聯想……一一三
亥の年を迎へて
牛よせ
青柳種信の事ども……一三八
種麿と海量……一五七
柳園資料――種麿宛宣長の書簡……一七〇
短歌に比較した俳句……一七七
春野集を見る……一九二
言道と方言……一九八
撫子にそゝぐ涙……二〇七
山居小話……二一三
小閑徜徉……二二〇

陳列餘談――九州の假名資料……二三七
庶谿偶語……二三六
梅霖隨想……二四四
灌佛の思出……二五一
九州と文學……二五八
萬葉集の筑紫歌……二七〇
夏から秋へ……二八四
菊について……二九七
草木欣々――跋に代へて……三一〇

徒然草と衣食住

徒然草を通讀した誰もが、第一に感ずることは、この書が一方に超俗な精神生活を教へてゐると共に、他方に極めて卑近な實際生活に說き及んでゐる一事である。卽ち著者兼好を佛者として考へた時、解脫した悟りの一面があると共に、なほ執着した迷ひの一面の見える一事である。それ故世には、との兩方面の懸隔、否むしろ矛盾と見える此の點を捉へて、彼をこの上もない俗僧であると非難する者さへある。それはとにかくとして、凡そ國文學の中で、この作物ほど、衣食住其の他家事に關する事柄を見ることの出來るものは、他に比類が少いやうに思ふ。

飜つて思ふに、凡そ普通人の生活には、常に矛盾らしい二方面、少くも異なる二方面を有するものであつて、たとひ如何ほど高尙な精神生活に這入つたとて、肉體生活を全く離れることは不可能である。蜀山人が

世を捨てて山に入るとも味噌醬油酒のかよひ路なくてかなはじ

といつたのは、冗談のやうで決して冗談ではない。殊に世を捨てて比較的孤獨な生活を營む僧侶の身には、俗に居て家庭とか社會とかいふ集團生活をするものよりも、家事に關する問題が、一層直接し、一層緊急を感じて來る筈である。一般僧侶が男子でありながら、割烹時には裁縫の事にまで通じて、之を自ら辨ずるのを見ても知れることである。果して兼好自身も其の事を明かにいつてゐる。

其の器もの昔の人に及ばず、山林に入りても飢を助け、嵐を防ぐよすがなくてはあられぬ業なれば、自ら世を貪るに似たることも、便に觸ればなどか無からん。さればとて「背ける甲斐なし。さばかりならばなじかは捨てし。」などいはんは無下のことなり。

卽ち隱遯しても衣食住を離れることは出來ない。衣食住にかゝづらふからといつて、隱遯する甲斐がないと直ちに非難するのは、一向わからない人だといつてゐる。かゝる點から觀察すれば、徒然草に衣食住に關する事柄の多いのも意義のあることであると思ふ。

二

一面悟りの境界から人生を觀た兼好は、

一日のうちに、飲食・便利(大小便)・睡眠・言語・行步、やむことを得ずして多くの時を失ふ。

といひ、

生活・人事・伎能・學問等の諸緣をやめよ。

といつて、實際生活を甚だしく嫌忌してゐるが、一面身を凡俗の世界に置いた彼は、先づ實際生活について、

人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり。

と、衣・食・住の三大綱を揭げてゐるのみならず、亦隨時・隨處にこれ等に關する方法を敎へてゐる。

更に彼の社會政策觀としては、

世を棄てたる人の、萬にするすみ(無一物)なるが、なべてほだし多かる人の、萬に詔ひ望深きを見てむげに思ひくたすは僻事なり。其の人の心になりて思へば、まことに悲しからん(可愛い)親のため、妻子の爲には恥をも忘れ、盜をもしつべき事なり。されば盜を警め僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の產なき時は恒

の心なし。人窮まりて盗す。世治まらずして凍餒の苦あらば、科の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはんこと不便の業なり。さていかゞして人を惠むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で農を勸めば、下に利あらんこと疑あるべからず。

衣食世の常なる上に僻事せん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

と、孟子流ではあるが、極めて人情に本づいた説をさへなしてゐる。

さて、兼好の衣食住について説いてゐることは、宗教上・修身上・故實上若しくは單なる趣味上から來てゐるもの數多いのは勿論であるが、其等の直接實際生活に關係しない事柄は成るべく省いて、玆には主として、通俗人としての彼が家事的に述べてゐる事柄のみを拾はうと思ふ。

三

一口に衣食住といつて來たものの、實は徒然草には衣服の事についての記事は極めて少いのみならず、あつても修身上・故實上・單なる趣味上から説いたもののみで、殆ど生活上の問題として説かれてはゐない。只、前にも揭げたやうに「第二に着る物」と其の大綱をあげてゐる位に止まるから、玆に多く述ぶべき材料がない。

之に反して飲食物に關係した條は隨分澤山ある。兼好は先づ實際生活上食物を第一において人の身にやむことを得ずして營む所、第一に食物。

といひ、

樂欲する所、一には名なり、（中略）二には色欲、三には味なり。よろづの願この三つには若かず。

とさへいつて、人の慾望中、食慾を最も強いものの一つとしてゐる。大根を藥として常用した筑紫の押領使、栗ばかり食つて米を食はなかつた因幡國某入道の女、芋頭を好いた盛親僧都の逸事や、藤原光親の供御を食はせられた事、四條大納言隆親卿の干鮭を供御に差上げた事、足利義氏が北條時頼を接待した事などの故實に關する話柄は姑らく措いて、吾々の第一に感ずるのは、兼好自身の、飲食物に對する趣味を有してゐたことである。

鯉のあつもの食ひたる日は、鬢そゝけずとなん。膠にもつくる物なれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなればやんごとなき魚なり。鳥には雉子さうなきものなり・・・・。

鎌倉の海に、鰹魚といふ魚は、かの境にはさうなきものにて、この頃もてなすものなり・・・・。

などの段は隨分面白く讀まれる。從つて彼は調味の事をばなか〳〵重く見てゐた。

人の才能は書明かにして聖の教を知れるを第一とす。（中略）次に食は人の天なり。よく味を調へ知る人大なる德とすべし。

といつてゐる。この方面の兼好は隨分食道樂であつたやうにも見えるが、又甚だしく質素な淡白な粗食で甘んずべきといふ一面も見える。道心者の生活には、

紙のふすま、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつ物いくばくか人の費えをなさん。

といひ、最明寺時頼が平宣時と味噌の餘りで酒を飲んだ話――勿論修身上のことではあるが――を賞讃してゐるのを見ても知れる。

以上のやうな事は、無論只漫然言つてあるには相違ないが、亦我々の現代生活に對する教訓にならない事もない。現代に於て節米とか代用食とか、原料の改善も必要ではあらうが、それよりも今少し割烹の知識を一般に普及させることの方が、先だつて、より急務ではなからうか。更にそれを飲食する人も亦相當食物に對する趣味、むしろ理解を以て味はつてやるべきであると思ふ。そして單に榮養といふ點から割出した食品のみでなく、日本在來の質素な淡白なのも、經濟上・嗜好上・趣味上永久に廢することは出來ないと思ふ。かゝるものをも相當に食はせることについ

ては、尙更割烹の研究が必要であるし、從つて日本固有の趣味なる侘（わび）とか寂（さび）とかいふことも、飲食の上に顧みなければならない一事になると思ふ。

序であるが、兼好は酒の事に就いて屢〻述べてゐる。

下部に酒のまする事は心すべきことなり。

の一段といひ、

世には心得ぬ事の多きなり。ともある毎には、先づ酒を勸めて强ひ飲ませたるを興とすること、如何なる故とも心えず。

といふ一段の如きは、具體的に飲酒の害毒を述べて、しかも巧みに描出してゐる。これらを讀むと、酒宴の狼藉、醉客の狂態は古今を通じて變らざるを思はしめるものがあつて、近頃の禁酒運動のビラにでも印刷してやりたいやうな感がある。又「友とするにわろきもの七つあり」の段にも、

四には酒を好む人。

と極力酒を嫌つてゐる。

しかし、飲酒についても、彼一流の兩面があつて、

いたましうするものから、下戸ならぬこそをのことはよけれ。

といひ、前掲飲酒の戒の段の終にも、

かくうとましく思ふものなれど、自ら捨て難き折もあるべし。

と、社交上・趣味上、酒も時と場合とに由つては必要であることを附け足してある。この點に於て、彼は全然禁酒論者ではなかつた、節酒論者とでもいはうか。酒の害毒を認めないものはない今日、禁酒の實行出來ないのは、やはり神ならぬ人間の弱味で、嗜好上・習慣上不徹底な所を歩んでゐることは、兼好のこの論に思ひ合せられて、亦興味深いことである。

四

次は住居である。先づ

家居のつきづきしく、あらまほしきこと、假の宿りとは思へど、興あるものなれ。

といつて、住宅の工合よく出來てゐるのがよいといつてゐる。しかし、そこにも僧侶だけに流石「假の宿りとは思へど」と斷つてゐる所が面白い。さて

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらきらかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心ある樣に、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

といふ自己の趣味を述べて、更に

多くの匠の心を盡して磨き立て、唐の大和の珍しくえならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しくいとわびし。さてもやはゝ永らへ住むべき。

又時の間の煙ともなりなんとぞ、打見るより思はるゝ。

と、餘りに凝り過ぎたものを卑んで、やはり佛教の無常觀から觀ることを忘れなかつた。最後に大かたは家居にこそ、ことざまは推量らるれ。

と、住居の樣子が住居主の人格を示すものであるといつてゐる。

これらは住居の趣味から來てゐる點が多いけれども、彼は又實用的に其の建築法に種々の注文を持つてゐた。

家の造り樣は、夏をむねとすべし。冬は如何なる所にも住まる。暑き頃、わろき住居は堪へ難きことなり。深き水は涼しげなし。淺くて流れたる遙かに涼し。細かなる物を見るに、遣戸は蔀の間よりも明し。天井の高きは冬寒く燈火暗し。造作は用なき所を作りたる、見るも

面白く、萬の用にも立ちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

暫く科學的に見ての當否は措いて、室の冷溫・採光・通氣等に關しての設計が、なか〳〵注意深いものであつたことを感ずる。

因みに、彼は家財・道具のことに就いても述べてゐる。

屏風・障子（今の衝立）（襖など）などの繪も文字も、かたくななる筆樣して書きたるが、醜きよりも宿の主人の拙く覺ゆるなり。大方持てる調度にても心劣りせらるゝことはありぬべし。

と、例の趣味方面から說いて、さて

さのみ良き物を持つべしとにもあらず。損ぜざらん爲とて、品なく醜き樣にしなし、珍しからんとて、用なき事共し添へ、煩はしく好みなせるをいふなり。ふるめかしき樣にて、痛くことぐ〵しからず、費えも無くて、物柄の好きがよきなり。

とあるなどは、吾等の參考すべき事であると思ふ。住居は殊に體裁を必要とするものであるから、實用一偏で品位を缺いたり、裝飾に凝り過ぎて、却つて下劣になるのなどは何れもわるい。その中庸を得ることの難しいことは「費えもなくて、物柄の好きがよきなり。」といふ注文のむづかしいのが、最もよく之を表してゐる。

彼は又「いやしげなるもの」の內に

居たるあたりに調度の多き。

ことを擧げて、道具立の多いのを嫌つてゐるのは、勿論趣味上からも來てゐるが、世の實際に疎い主婦が徒らに備はらんことを求めて、道具立のみ多くし、却つて實用に遠いことをしてゐる箴にはなる。自分等も道具は極めて便利なものを、極めて數少く備へることを望む一人である。

五

こゝに注意すべき一つは、生活物資に就いて、兼好は國產使用論者であつた事である。卽ち彼は極力舶來品を排斥したのであつた。前述、住居の段に「唐の日本の珍しく、えならぬ調度ども並べ置き云々」とあつたのなどにも、甚だしく譏つた口吻が見えるが、明かに外來品を排斥したのは

唐のものは、藥の外はなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きも寫してん。唐土船のたやすからぬ道に、無用の物どものみ取積みて、所狹く渡しもて來る、いと愚かなり。「遠きものを寶とせず。」とも、又「得難き貨を貴まず。」とも、ふみにも侍

るとかや。

とある一段である。支那文化のやはり日本よりも遙かに高かつた當時にありながら、かゝる事をいふのは、單に經濟上の考に基いたといふよりも、國粹保存的・自己尊大的といふやうな一種の愛國精神から出てゐるものが多いやうに思ふ。しかし、生命に關する醫藥の道だけは膝を支那に屈したのが面白い。この事は改めて衞生の事の條にいはうと思ふ。

この國產使用といふことも、やはり社會の一問題である。生活物資のすべてが國內で產出して、之を他國に仰がないといふ事は、極めて望ましいことである。しかしなか〳〵さうはいかない。國內に產しながら價と質との上で、外國品と拮抗出來ないものがある。或は廉く出來ても品質が粗惡で、結局高い外來品の方が利である場合もあり、或は質は良くても價が高くて使用出來ない場合もあらう。時に或は和製より價が廉くて質の良い洋品さへある。元來原料の產出しないものは、其の原料なり製品なりを、是非とも外國に仰がなくてはならないのは勿論であるが、原料を產しながら尙其の製品を外國から逆輸入しなくてはならないのもある有樣である。是等の遺憾を濟ふ道は、もとより產業の發達に待たなくてはならない事であるが、かゝる時代の消費者の立場になると、個人の經濟上、國家の利益上、隨分矛盾も衝突もあつて、一口に國產使用などといつ

ても、なか〳〵苦心を要することが多いと思ふ。

六

徒然草に目立つて表れる一つは、醫藥の事である。それ故、兼好自身が病弱の人であつたらうといはれてゐる位である。「友とするにわろきもの七つあり。」の段に、「三には病なく身强き人」とあるのは、無病息災な人は他人の病苦に同情が無いからと云ふのだらう。之に對して「善き友三つあり。」の中には「二にはくすし」といつてゐる。

先づ「人の才能は文明かにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手かくこと、むねとすることは無くとも、之を習ふべし。學問に便りあらん爲なり。」の次に

つぎに醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝の務も醫にあらずばあるべからず。

と、醫療の道に通ずべきこと、衞生の事の大切なることを述べてゐる。從つて彼自身

めなもみ（稀莢草）といふ草あり。くちばみ（しまむ）に刺されたる人、かの草をもみてつけぬれば、即ち癒ゆとなん。見知りて置くべし。

四十以後の人、身に灸を加へて三里をやかざれば上氣のことあり。必ず灸すべし。

鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず。小さき蟲ありて鼻より入りて、腦を食むといへり。

少しの地をも、徒らに置かんことは益なきことなり。食物・藥種など栽ゑおくべし。

などと、家庭的に簡單な療法や藥品について、或知識を持つてゐたことは注意すべきである。のみならず、漢土の醫書とか本草とかいふものにも一わたり目を曝してゐたやうである。

「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚かなる人なり。」と、醫書にいへるがごとし。

この引用文は本草の序にある語である。そこで、前にも述べたやうに、極力支那將來の品を排斥した彼が、

唐のものは、藥の外は無くとも事缺くまじ。

と醫藥だけ除外例としたことも、理由の解せられることである。

序に育兒の事であるが、元來佛者たる兼好は、

我が身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふものなくてありなん。

と、子どもを嫌つた一面も見えるが、亦

心なしと見ゆるものも、佳き一言はいふものなり。ある荒夷の恐ろしげなるが、かたへに逢

ひて「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人ももち侍らず。」と答へしかば、「さては、物の哀れは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんと、いと恐ろし。子故にこそ萬の哀れは思ひ知らるれ。」といひたりし、さもありぬべき事なり。

とやうに、子を持たなければ、完全に人情を解し得ないと考へた一面が見える。又

いとけなき子を賺し威し、言ひ辱かしめて興ずることあり。大人しき人は、眞ならねば事にもあらず思へど、幼き心には身にしみて恐ろしく恥かしくあさましき思、誠に切なるべし。

など、幼兒に對する大人の非教育的取扱を觀察してゐるのなどは、坊さんに似ないともいはれようが、むしろ坊さんだから考へ得た點である。

七

兼好は又園藝についても述べてゐる。

家にありたき木は、松・櫻、松は五葉もよし。花は一重なるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻皆一重にてこそあれ、八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなん。遲櫻又すさま

じ。蟲のつきたるもむづかし。梅は白き、薄紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅のにほひめでたきも、皆をかし。おそき梅は、櫻に咲きあひて、覺え劣りけおされて、枝に萎みつきたる心うし。（中略）柳又をかし。卯月ばかりの若楓、すべてよろづの花紅葉にも勝りてめでたきものなり。橘・桂いづれも木はもの舊り大きなるよし。

草は山吹・藤・杜若・撫子、池には蓮、秋の草は荻・薄・桔梗・萩・女郎花・藤袴・紫苑・吾木香・苅萱・龍膽・菊、黄菊も。蔦・葛・朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に、繁からぬよし。

といふ趣味園藝に就いての長い一段がある。尙實用園藝に就いては、鎌倉から出京して、兼好の家を訪ねて來た陰陽師安部有宗が「この庭の無暗に廣いのは無駄な事だ。道を知つてゐる人は、なるべく物を植ゑるやうにする。細道を一つ殘して、全部畠になさい。」と忠告したといふ話を擧げて、

誠に少しの地をも徒らに置かんことは、益なき事なり。食物・藥種などを栽ゑおくべし。

と說いてゐる。

園藝は殊に趣味を主とするものであるから、兼好は之にも、自己の趣味をいふことを忘れなか

つた。前揭の「家にありたき木云々」は、彼のこの方面に於ける趣味を見るに足るものであるが、其の後に附加へて、

この外の、世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくく花も見慣れぬなど、いと懷かしからず。大方何も珍しくあり難きものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうのもの無くてありなん。

と言つてゐる。庭園については殊更に注意したものであつて、

今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心ある樣に、簀子・透垣のたよりをかしく、……深き水は涼しげなし。淺くて流れたる遙かにすゞし。

と望み、

前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは見る目も苦しく……。

と嫌ひ、更に「賤しげなるもの」の中に、

前栽に石・草・木の多き。

を數へ、日野資朝が東寺の門に雨宿りをした時、多くの不具者を見て、家に歸つた後のことを、

この間植木を好みて、ことやうに曲折あるを求めて、目を悅ばしめつるは、彼の片端を愛す

るなりけりと、興なく覺えければ、鉢に栽ゑられける木ども、皆掘棄てられにけり。さもありぬべき事なり。

と記してゐる。

以上で兼好の此の方面に於ける趣味は大概窺はれると思ふが、物の自然を尙び、しかも淡白の中に趣致ある處を好んだことが知られる。是等も或程度までは日本人の傳統的趣味であつて、時勢と共に大分新しくなつて來た現代の所謂園藝といふものに於ても、眞の日本的新園藝を建設するには、決して閑却すべからざる、否大いに省みなくてはならない點かと思ふ。

八

兼好の女性觀は隨分極端であつた。勿論日本固有若しくは外來儒佛の思想に起因してはゐるが、

女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪慾甚だしく、物の理を知らず。（中略）すなほならずして拙きものは女なり。

と非難し、從つて松下禪尼の如き賢女の行を賞めるにさへ、

女性なれども、聖人の心にかなへり。

といつてゐる。更に

もし賢女あらば、それも物疎く、すさまじかりなん。

と、學問あり、才藝ある女を嫌ひ、

妻といふものこそ男の持つまじきものなれ。（中略）まして家の内を行ひ治めたる女、いと口惜し。

と、其の妻を嫌つたことはとにかくとして、よく家庭の仕事をしてゆく女などはいやだと言つてゐる。

この女性觀の僻してゐるものであることは勿論であるが、それと同時に、男子が家事に通ずべきことを述べてゐるやうに見える一點は注意すべき事である。勿論、明かに女性の仕事として記したものもなければ、男子の仕事として記したものもないが、前に掲げた

次に食は人の命なり、よく味を調へ知れる人、大いなる德とすべし。

などは、明かに一般男子の爲に言つた個條である。兼好自身が、住居や食物についての嗜みのあつたことも已に述べた如くであるが、尙食物に就いては、「園別當入道はさらなき庖丁者なり。」とか、最明寺入道時頼を饗應した足利義氏の話とか、男子に關したものを掲げてある。

凡そ現代に在つては衣食住の事は、多く女子の仕事のやうに考へられてゐるが、全然さうは限られないかも知れない。女子の職業といふことが社會問題となるやうになると、少くも其の社會では衣食住は必ずしも女子の仕事でなくなるのは勿論である。よしそれ等は或社會に限られたこととして、普通の家庭に於て、生活の事を全然女子にのみ打任せて、男子が少しも關しないとか、顧みないとか、或は全く其の知識を缺いてゐるとか、其の趣味を有たないとかいふことは、家庭其の物を健全にする所以でなく、和樂にする所以でないと思ふ。自分は男半分女半分で家庭を作つてゐる以上、少くとも半分は男子のそれに關與する權利があるし、それを顧慮する義務があると思ふ。——たとひ實行の大部分は女子の事にあるとしても——自分は女子を見ること決して兼好のそれのやうではなく、女子に十分の敬意を拂つた上に斯く感ずるのである。

九

以上隨分長々しく書いて來たが、要するに一種の閑話に過ぎないのであつて、只兼好といふ人は、精神生活と共に、よく實際生活に留意したといふ紹介に止まるであらう。勿論之を以て直ちに新時代の生活改善に資しようなどといふことは、そこに少からず無理が生ずるかも知れない。

しかし人間の生活には何といつても精神と物質との二方面がある。とかく物質的に世智辛い時勢になると、生活がどうしても物質方面にのみ流れ易く、從つて生活改善といふことが、主として物質的に傾き勝ちである。されど、物質のみから見た生活改善は無論不具なものであつて、或種の人々には滿足出來ようけれども、少くとも或種の人々には滿足し難い。此の點からいふと、兼好が一方に佛教的の深い悟脫を要求しながら、日常の實際生活に於ける瑣末な事項に說き及んでゐることが、頗る意義をなすのであつて、改造を叫び改善を號ぶ現代に、必ずしも參考にならない事のみではない。

第一改造・改善といつた處で、すべての生活が單に實用的標準にのみ據ることの出來ないのは勿論であつて、一方に簡易生活とかが唱へられながら、他方に生活の藝術化などいふことの言はれる今日には、徒然草一篇が亦何物かを暗示してゐるやうな氣がする。更に、すべての生活方法の改善が科學的の一面にのみ進むことは出來ず、常識的の或物を加へなくてはならない事についても、亦一問題を與へるかも知れない。更に〳〵、外來の事にのみ囚はれて、固有の物を善惡となく排斥し盡し、改造改造にのみ泥んで、因襲を一も二もなく破壞し去ることの不可能なる所に、識者の苦心の存する今日、我が祖先の傳統的生活とか、歷史的生活とかいふものを顧みる點に於

て、自分ながらこの文字の強ち無用でない事を思ふ。

（大正九年七・八・九月、家事研究）

言語から觀た婦人

一

論題がやゝ漠然としてゐるが、元來かゝる題目の下には、一國語の音聲・語彙若しくは語法等の構成に自ら隱れてゐる婦人の特性又は社會的地位といふやうなものを觀察してゆくことが出來るかも知れない。しかし、自分の玆に說かうと思ふのは、主として女子所用の言語を男子のそれに比して、その差異の由つて來る所を考へ、以て女子の特性又は社會的地位などを想像して見ることに在る。言ひ換へれば、「女言葉から觀た女」とでもすることが出來るであらう。

言語は言ふまでもなく、思想感情の音聲的表現である。今少し廣くいへば、精神生活の聽覺的形態であるとして差支ない。それ故其の言語を觀察すれば、思想感情の知られるのは勿論、更に深く言語に潛んでゐる其の人の個性はもとより、教育・職業・地位等の如何までも洞察することの出來る筈である。元來、一國語といつても、其の民族の階級の上下、教育の有無、職業の種類

等によつて、所用の言語が多少異なるのであつて、或は語彙がちがつたり、或は語法がちがつたり、或は同じ語彙・語法であつても、發表の調子がちがつたりする。更にその差異は男女性によつてもある。我が國語の歴史を見ると古くから男女の用語が異なつてゐた。しかも歐米などのそれに比して懸隔が甚だしい。特に男性の普通語から別れて、女子專用の言語の發達して所謂、「女房詞」といふものが生じたのなどは、國語史上の興味ある一現象である。それ故、これらの言語事實を歴史的に回顧し、又現代の實際を觀察するといふことは、女性そのものを知る上にも、强ち役立たないことはない。

二

女子は元來男子よりも言語の流滑なものが多い。殊に、發聲器官の主要部たる聲帶の長短・厚薄等が男子のそれと生來違つてゐて、音聲の高調であるのみならず、極めて淸爽である。加ふるに脣舌等の筋肉も多くは男子よりも發達してゐて、婦人は生來言語生活には極めて適當した素質を備へてゐるといひ得る。

然るに、我が國に於て、躾ある婦人としての言語は、古來如何なるものを理想としてゐたかと

見るに、先づ支那流に、

辭ヲ擇ビテ而シテ說キ、惡語ヲ道ハズ、時ニシテ然ル後ニ言ヒ、人ニ厭ハレズ、是ヲ婦言ト謂フ。（女誡）

とか、又は

言葉を愼みて多くすべからず。（女大學）

女は會釋にあまれ。（俚諺）

とかいつて、力めて言語の自由發表を制限し抑止したものである。それで、能辯とか、巧言とかいふ語は、婦人の爲には常に惡い意味にのみ取られてゐた。なるほど能辯・巧言は一方に弊害をも伴ひ易いことながら、婦人の素質から觀察すると、一概に能辯・巧言を戒めるといふことは、やゝ不自然の感があると思ふ。

女は口さがなし。（和諺）

二女は一舌にして足る。（西諺）

などいふ語は、女子を謗つたのには相違ないが、又女子の本來雄辯である事をも物語つてゐるのではないだらうか。

それで、舊時代でも、新時代でも、比較的解放された女子の言語表現は、なか〳〵滔々として而も巧みであると思はれるものが多いやうに思ふ。之はたしかに婦人の長所であるといはなければならない。

三

そこで、現代に於て比較的解放された婦人の言語を見ると、

甲、語彙に感動詞の多いこと。

乙、抑揚の表情的であること。

の二點に於て、男子のそれよりも著しく發達してゐる。發達といふ語は、玆には無論善意に解して用ゐたのである。男子の言語は其の語彙に於てやはり知的であつて、抑揚も平靜である。之に反して、婦人の言語はどうしても情に訴へる傾を免れない。從つて、溫かみがあり、柔かみがあり、優しさがあり、美しさがある。之が婦人の言語の長所である。しかも、情的であることには、亦短所が伴ひ易い。婦人の言語はたしかに（一）不正確であり、（二）獨斷的であり、（三）無責任であるといふ弊に陷り易い。情的に美しからんことを求むるものには、論理上の正確をば要し

ないし、情的の判斷標準は多く個人の好惡であつて、隨つて獨斷になり易い。更に情的に動くものは、一時を糊塗する傾向に流れ易く、責任觀念を持つ遑がないのである。

婦人のこの言語上の特徴は、自然に婦人の職業的地位を暗示してゐるやうにも思はれる。元來生活の美化といふ事に、大切な一つは言語であつて、（この事に就いては、他日機を見て、改めて述べたいと思ふが）其の家庭若しくは社會に用ゐられる言語が、卑俗であり、醜惡であるといふことは、如何に其の生活を低下させるか知れない。實に生活の程度を知るには、其の社會の言語を觀るに若くはない。そして其の生活を愉快ならしめ、優美ならしめるものは、たしかに婦人の言語であると思ふ。子女に對する溫かみ、柔かみのある言語、夫や舅姑に對する優しく美しき言語、更に社交上に於ける婉に巧みなる言語といふものは、婦人が天から授けられた特有のものであつて、男子の眞似て及ぶべからざるものである。

しかし、一旦正確を要し、判斷を要し、更に責任を要する點になると、男子の素朴な平靜な言語の方が却つて適當してゐるやうに思ふ。夏目漱石は隨分皮肉をいふ作者であるが、例の「虞美人草」の中に、

二十世紀の禁物は疾言と遽色である。（中略）疾言と遽色は尤も法律に觸れ易いからである。

謎の女（藤尾の母）の鄭重なのは尤も法律に觸れ悪い。

とか、又

女は肯定の辭に否定の調子を寓する靈腕を有してゐる。

とか、しきりに婦人が言語の巧みさを悪用するのを譏つて、更に

あの女（藤尾の母）の云ふ事は非常に能辯な代りに、能く意味が通じないので困る。滔々と述べるが、遂に要點が分らない。要するに不經濟な女だ。

といつてゐる。これらは婦人の言語の長所と短所とを遺憾なく抉り出してゐるやうに思ふ。

此の點から觀れば、言語生活そのものは措いて、婦人の他の職業も自然男子のそれよりは別途であつてよいやうに思ふ。それはとにかくとして、婦人の言語の情的であつて知的でないといふことは、天から與へられたものが多くて、一朝に變易することの出來ないのは、丁度女子の容姿の、男子と全然同一になることの出來ないのと同じである。自分は女性の容姿と言語とは、剛健で索寞な男性社會の調和劑であつて、永久に社會生活に缺くことの出來ないものであると思ふ。そしてそれが男子の爲といふやうな從屬的のものでなくて、立派に男子のそれと並立的のものであると思ふ。

四

自分はかつて日本古來の女言葉について調べて見たことがあつたが、女言葉は大體に於て

甲、敬讓語の多いこと。

乙、間接・迂曲の表現を尙ぶこと。

丙、字音語を避けること。

の三點に於て、男子のそれよりも高度に若しくは別途に發達を遂げて來たやうである。之に就いての委しい敍述はこゝには避けようと思ふが、第一の敬讓語の多いといふことは、元來女子の社會的地位から、自然に生じ來つた現象であつて、男女尊卑の權力問題に關係してゐる。現代の女言葉を見ても、男のそれより敬讓語の多いことはたしかである。しかし、敬讓語といふものは、貴い對者を敬ひ、卑しい自己を謙ることに起源してゐるものの、之も時代と共に變遷して、只社交的禮節の上に止まつて、語の敬讓の度が必ずしも對者・自己の眞地位を表してゐないものがある。自己と同位若しくは下位のものに對してさへ、敬讓語の盛に用ゐられるのを見ても知れる。加之、敬讓語は更に退化して、只優美にいふとか、上品にいふとかの爲に用ゐられて、全く敬讓

の意の失はれて了つた語さへある。女言葉には、殊にこの種類が多い。それ故、現代の女子に敬讓語が多く用ゐられるのは、古代の女子の地位の名殘を表現してはゐるものの、今日女子の眞地位を物語るには用をなさない。寧ろ女子の、それだけ禮節的であるとか、優美上品であるとかを表すに役立つて、決して女子が男子に屈從してゐるからとは速斷せられないのである。

次に間接・迂曲の發表を尙ぶことは、大きく見ると婦人の情的であるといふ根本義に歸するのであつて、婦人の本來特性に起因する所が多く、從つて比較的恆久性を有してゐる。それ故、現代に於ても、女子はやはり男子の如き直接・露骨な發表は力めて避けるやうである。この事も亦敬讓語のやうに優美とか上品とかいふ意義を交へて行はれることは勿論である。

終に字音語卽ち漢語を避けるといふことであるが、之は主として古來の女子教育に起因してゐることであつて、婦人問題上亦興味のある一事實である。古代の我が國は、學問するといへば、漢學が主となつてゐ、從つて漢語は教育ある人士の言語とせられた。學問すべからざるものと定められ、かつ男らしくあるべからざるものと教へられた女子が、漢語を多く用ゐ得なかつたらうし、又力めてそれを使ふことを避けたのは自然であつた。しかし、時代はかゝる情態の永續を許さなかつた。教育が女子に開放せられた現代に於ては、此の點だけはたしかに舊時代と全く觀を

異にして來た。二葉亭四迷の「浮雲」（明治二十年作）は內容・形式ともに、明治新文學の魁といはれるものであるが、その中の主人公於勢が

「アノなんですつて、私の言葉には漢語が雜ざるから、全然何を言つたのだか解りませんて……眞個に教育のないといふ者は、仕樣のないものですネー。」

と言つてゐるなどは、輕々に看過すれば何の意味も持たないが、明治初年から女子に教育の開放されたこと、從つて其の用語の著しく變化して來たことを示すものとしては、大きな意義の籠つた言葉である。もはや、今日に於ては、婦人の言語が多少かど〳〵しくても、漢語が多く這入つてゐても、それを氣障だなどといふ野暮漢はなくなつたではないか。

五

斯樣な事を考へて、こゝまで來て、更に今日の婦人問題といふものを顧みる時、自分は思ふ、女言葉に敬讓語の多いといふことの、決して婦人の社會的地位の（古代の名殘を止めてはゐようけれど）今日の實際を示してゐるものでないやうに、さして虐げられてもゐない女子の權力を、只外形にのみ拘泥して議論してゐる矛盾がないであらうか、女言葉の情的表現とか、間接迂曲の

表現とかが、女子の特性であり、かつ長所であつて、亦容易に變易すべからざるやうに、本來の特性とか長所とかに從ふべき女子の職業を、只暗雲男子のそれに近づかしめようとする危險がないであらうか。女言葉が漢語使用に向つて自然に解放せられたやうに、許される限り決して拒みはしない女子の教育に向つて、無駄な力瘤を入れてゐる滑稽はないであらうかと。とかく新しい思想の輸入される時、新しい運動の起つて來る時は、得てそれが誇張的になり易い、過激的になり易い。かゝる者に對する自分等は、其の要求を一も二もなく首肯するほど、しかく甘くてはゐられない、しかくお芽出たくてはゐられない。

元來、人間はしかあるべく天から與へられたものと、世から餘儀なくせしめられたものとを有つてゐる。しかあるべく與へられたものにも一長一短があり、餘儀なくせしめられたものにも、一利一害がある。しかあるべく與へられたものの長所を助長して、餘儀なくせしめられたものの弊害を除く所に、穩健な婦人問題の解決も存することと思ふ。しかあるべく與へられた長所をも、それが男子と等しくないといふ點を以てのみ、屈辱のやうに感じ、餘儀なくせしめられた利得をも、男子に異なるといふ點を以てのみ、不當であると叫ぶのは、婦人躬ら自らを卑しめるものだと思ふ。

（大正九年十一月、家事研究）

螢狩の童謡

一

螢が飛びはじめて、子供等のそれを呼ぶ謡が、郊外の夕闇に聞え出した。この螢を呼ぶ童謡は、全國何れの地方にも大抵はあるやうであつて、凡そ子供として其の地方地方のものを知らない者はないであらう。

さてこれら童謡の起源に就いては、一々考へられないけれども、少くも德川期をば經て來たものであつて、言はば前代の遺物でありながら、子供等の社會に尙生命をもつてゐるのは面白いことである。其の或ものは意味が全くわからない——殊に幼い彼等にはとても解せられない——ながら、其の或ものは取材が已に過去の世界に屬して、極めて非現代式でありながら、兒童は尙之に慣らされ之を謡つて、却つて現代的で意味のわかり易いもの——例へば幼稚園や小學校で授けられた螢狩の唱歌など——をば省みないのを見ると、今更ながら傳統の力强さや、因襲の根深さ

を思はざるを得ない。

自分は去る大正七年の夏、或動機から自分の學校の生徒について、各地に行はれる螢狩の童謠を集めて見たことがあつた。それから以後年々二三の新しいものを得、尙「日本歌謠類聚」（續帝國文庫）から二三、「俚謠集拾遺」（高野大竹兩氏共編）からも、四五の異なつたものを附加へることが出來た。勿論まだ總べての種類を網羅したものとは言はれないが、其の主なものだけは略〻集め盡したやうに思ふからこゝに紹介して見ようと思ふのである。

集まつたものを、歌詞の內容から大別すると、略〻十二三種の系統にすることが出來るが、たとひ內容は同じであつても、地方に由つて必ず言表しが多少ちがひ、更に甲と乙と合はさつたり離れたり、又は短くなつたり長くなつたり、其の細かい點を區別したならば、實に多種多樣であるが、一々擧げるのも却つて煩はしいから、こゝには只其の主要な代表的なものを出すに止める。勿論音の長短や地方の訛りなども分つてはゐるが、それらは或場合の外書きあらはさないことにした。

二

螢の謠の行はれてゐない地方も、或はあるかも知れないが、自分の調べた所では、只大都會の中央の、螢そのものの餘り飛ばない所の子供が、境遇上知らないといふ位に止まつてゐた。

さて螢を呼ぶ言葉の最も單純なものは、

○ほう　ほう　螢來い。

とだけ言ふものであるが、只これだけ言ふ所は極めて少いやうである。螢の謠で最も廣く分布してゐるものは、やはり

○ほう　ほう　螢來い。あつちの水は　苦いぞ、こつちの水は　甘いぞ。ほう　ほう　螢來い。

といふ系統のものである。水の甘苦で螢を呼ばうとするのであつて、意味も一番よくわかつてゐる。此の系統は畿內を中心にして、殆ど全國に普及してゐる。只東山道の東北半には、あまり多く行はれてゐないやうである。

但しこの歌はもとの小學校讀本によつて、近頃擴められた向もある。甘い苦いを具體的の物で表して

○そつちの水は　泥水ぢや、こつちの水は　砂糖水ぢや。

といふ地方もある。因幡地方の

○螢來い、鹽やらう。あつちの鹽は　苦いぞ、こつちの鹽は　甘いぞ。螢來い、鹽やらう。

とか、伊豫の

○螢來い、茶飲まそ。あつちの茶は　苦いぞ、こつちの茶は　甘いぞ。一杯もて來い、かへてやろ。

とか、又は羽後の

○ほたーるほたる、あつちの粕は　甘くねやい、こつちの粕は　甘(うま)んて。こちやア來い、こちや來い。

などいふのは少し異つてゐる。同じ系統に屬すべきものながら、九州地方のは一般に變つてゐる。

○ほう　ほう　ほうたい來。わいが水は　くそ水ぞ、おいが水は　冷水ぞ。小柄杓もつけ、汲んでやろ。

○ほうたいけんぢよ、みつけんぢよ。わいが水は　くそ水ぢや、おいが水は　柳の下のよか水ぢや。たんごもつて、汲んでくゆ。(汲んでやらう)

○螢來い、螢來い。池の水がよいか、はんど(甕)の水がよいか。小柄杓もて來い、汲んでやろ。

○ほうたる〳〵、くうばらよ。(來い)池の水を飲ましよ。そつちの水は苦い、こつちの水は甘い。のもば柄杓と　たんごを持つて來い。

などが是である。この系統のものは、他の地方でも

○一杯飲ましよ、柄杓もて來い。

○黃金の杓子で、汲んでくりよ。

○貝殼もて來い、ブウ(水)やらう。

などの句の、後に附くものが多い。尙

○ほう　ほう　螢來い。谷川の水くれう。小柄杓持つて來い、汲んでやる。

○螢　々、池の水を飲むなよ。のむなら柄杓と　たんごともて來い。

○螢來い、常念坊。風の宮(伊勢神宮內にある社)の水くりよ。伴になるなら、こゝへござれ。

○ほうたろ來い、〳〵。ネンネがジョウキ(飲器)で　ブウ(湯)飲ましよ。

○ほうたる來(こ)、豆螢。螢來、米螢。唐竹やぶの　露のましよ。

○ほうたり來い、水やろぞ。

○山吹來い、石灰(あく)蒔かぬ。かんねん(雌螢)〳〵　水くれる。

などは皆水に關係のものである。

三

次に廣く行はれてゐるのは、

○螢來い、田の蟲來い。行燈の明りで、こつちへ來い。
○螢來い、まつころ來い。行燈の火影に、飛んで來い。
○螢來い、山蟲來い。行燈の光を、目掛けて來い。
○螢來い、山見て來い。行燈の光を、ちよと見て來い。
○螢來い、山見て來い、川見て來い。行燈の光を　見て來いこい。
○ほう　ほう　螢來い。行燈のかげから、ちよこんと來い。

などいふ「行燈の光」の一系統である。又

○ほう　ほう　螢來い。簑着て笠きて、飛んで來い。
○ほう　ほう　螢さん。みの着て笠きて、おいでんか。

などいふ「簑笠」の一系統がある。行燈系は甘苦系とも結びついてゐるが、多くは簑笠系と一し

よになつてゐる。

○螢來い、田の蟲來い。行燈のかげから、簑きて笠きて、飛んで來い。
○ほい〳〵、螢來い。田の蟲來い。行燈の光で、笠きて來い。
○螢來い、〳〵。行燈にかくれて、笠きて來い。柳にうたれて、飛んで來い。

などが是である。尙

○螢來い、山伏來い。あみだの光で、笠着て來い。

などいふ變つたのもある。これらの種類のものは、近畿・中國・四國・東海・北陸及び東山の北部までも及んでゐる。

さて此の「行燈の光」は多く「簑笠」と結びついてゐるが、もとはやはり獨立してゐたものであらう。螢自身の光を行燈に見立てて、其の光に依つて暗夜を辿り來よといふのが原形らしく、我が家の行燈の光を目當に來よといふのは、後の轉化であらう。

○螢こい、土蟲こい。おーのが光で　狀もて來い。

といふのさへあるではないか。「行燈にかくれて」とか、「行燈のかげから」とかいふのは、簑笠と結び付いてから後でもあらうか。しかし他の物の光を避けるといふ同一想に、

○ちよつくら此處まで　飛んどいで、お月さんの　留守の間に。

などいふのもあるから、「隱れて」の方が、すべての原形らしい疑もないではない。

「簑笠」は「田の蟲」といふ所から農夫に見立てて、それを着るといふのであつて、行燈の光と結びついて後それから隱れる具としたのであらうか。「阿彌陀の光で笠着て來い」はたしかに「行燈の光で笠着て來い」の變形であらうが、螢の光を佛の後光に見立てて、其の後光を笠として來いといふ意にも取れる。要するに、餘り多樣な形に分化して了つて、明快な解釋を得難いのである。それにしても、電燈や瓦斯燈の今日、謠ふ彼等は行燈といふ實物を多く見たことはないであらう。

四

次は京都から滋賀をはじめて東山の南半、東海・北陸の一部に分布してゐる晝夜系である。

○螢來い、かね吉さん。晝はお乳母の　乳のんで、夜さりは提灯　高のぼり。

○螢さん、かね次郎さん。晝間は草葉の　露吸うて、よるは提灯　高のぼり。

○螢さん、〳〵。よるは提灯　つけなんせ。晝は菜の葉に　とまらんせ。

などいふのが是である。これは多く人の名前で呼びかけてあるのが面白い。深い謂はれもないだらうが、地方によつて多少異なつてゐながら、兼四郎・兼五郎とか、兼吉・龜吉・かな吉又は太郎吉など、音韻上通つてゐて起源の同一であることがわかる。歌詞の意味は明瞭であるが、「お母さんの乳飲んで」・「お婆の乳のんで」などいふのもあり、又晝と夜と前後して置かれたのもあつて、一々には揭げられない。

これが甘苦系と結合したのもあるが、この歌詞の前に更に言葉が加はつて、

○ほう　ほう　螢來い。螢の親父は　金持で、夜は提灯　高のぼり、晝は草葉の　露のんで。

などいふのがある。金持といふのと、かね吉・兼四郎といふのと、音が似寄つてゐるから、轉化したのかも知れない。光るから黃金に思ひよせたのかとも思はれる。或は「螢のとう樣金持で」・「ほたるの兄ちやん金持で」などいふのもあり、尙

○ほう　ほう　螢來い。螢の親爺は　金持で、金箱もつて來。すつぽんぽん。

など、金持だけ獨立したのも稀にある。

五

以上は行はれてゐる地方の、比較的廣いものであるが、以下はやゝ狹いものである。

○ほうたる來うい來い。螢の蟲は、親孝行蟲で、親をたづねて　こうい來い。

といふ一類がある。これが先の「甘苦」や「簑笠」と結び付いて

○螢こいこい。そつちの水は　苦い、こつちの水は　甘い。螢の蟲は　親に孝行で　火をとぼす。

○螢來い、山伏來い〳〵、金田の蓑笠着て、來い〳〵〳〵。螢の蟲は　親孝行蟲だ、親を尋ねて　來い〳〵〳〵。

などいふのがある。この系統のものは香川と千葉とにあつた。次に東北地方には

○ほ　ほ　螢來い、山彦來い　鰊の柱さ　露吸ひ來い。

○ほうたろ　來い〳〵、山吹　來い〳〵。にしんのあたまの　露くうれる。ほうた　ほたほた。

いふ種類が行はれてゐる。信州の一部で

○鰯の頭を　燒いてくれる。

などいふのも似寄つたもので、同系統かも知れない。

專ら信州地方に行はれてゐるのは、

○螢來い、乳くれる。山伏來い、宿かせる。

の系統である。

○螢來い、宿かせる。山伏來い、宿かせる。落ちたら　玉子の水くれる。

○螢來い、宿かせる。已がてんでの　箒もて來い。かい餅（蕎麥搔き）三杯　搔いてくれる。

など長くなつたのもある。

越後には

○螢來い、團子にしよ、おばこ（妹娘）嫁にしよ。三吉（人形）媒酌人（なかうど）〳〵。

といふのがある。之と同系統のもので、播州に

○ほう　ほう　螢來い。お花嫁入、三吉媒介人。內のとつつあん　槍刀。やりの先は　すつぽんぽん。

といふのがある。槍刀などは、大名時代の臭がして面白い。其の他

○ほうたる來い。うへに鬼がをる、下へさがれ。（香川）

○螢來い、露のましよ。彼方の水は　苦いぞ、此方の水は　甘いぞ。螢の〳〵　食ひ物は、

山の〳〵　團栗坊。甘皮むいては　がり〳〵、澁皮むいては　がり〳〵。（石川）

○ホーミ　螢來い、あんたんばばから　潜つて來い。落ちるなや、落ちればこばんの　三がいで。（石川）

などは、大分かはつたものである。

螢の光については、前にも行燈であるとか、或は提灯であるとか、暗夜を照す燈火に見立てあつたが、なほ

○螢も　來い〳〵〳〵、山吹も　來い〳〵〳〵。螢といふ蟲は　異な〳〵蟲で、夜なべになると　ピツカンチヤツカン　火をともす。（山梨）

○螢來い、油がない、火も焚かぬ、じも出來ぬ。早く來い、〳〵。（長野）

などがある。「じも出來ぬ」は多分「字も出來ぬ」で、手習も出來ないといふ意味だらう。車胤の故事などが聯想されるであらう。

六

最後に琉球のを紹介しよう。

○ぢんぢん（螢）　ぢんぢん（螢）。
さかやぬ（酒屋の）　くしんぢ（うしろで）、
うりてい（下りて）　みぢ（水）　くゑー（飲めよ）よ。
ぢんぢん（螢）。

やはり「水を飲めよ」といふのであつて、内地に於て最も廣く行はれてゐる系統に屬するのが面白い。

かつて山口高等商業學校講師ショー氏が、日本の螢狩の事を書いた文の中に、英譯された童謠のあつたのを、新聞で見たことがあつた。やはり普通の甘苦系のものである。玆に掲げて此の稿を終へることにしよう。

Fire-fire-oh, firefly come!
Out there the water's bitter as gall,
In here the water's sweetest of all.
Fire-fire-oh, firefly come!

（大正十一年六月、家事研究）

「榊の薫」を讀んで

一

自分が「神」といふことに必ず聯想して切離すことの出來なくなつた一つは、

いさぎよやさかきの青葉すがむしろ木綿しでなびく神の廣前

といふ歌である。これは近世末歌壇の異才橘曙覽の詠であつて、自分はこの歌を吟誦するとすぐ、神の寶前に立つ時我等に起る一種の情調を思はしめられるのが常であるが、近頃偶〻彼の作にして其の名もこの歌のさかきの青葉に因みある「榊の薫」を一讀する機會をもつて、其の文學上から觀ても頗る傑出した文字であり、亦教養上から觀てもなか〳〵貴重な或物を有つてゐる作品であることを知つた。「榊の薫」は彼の參宮の紀行文である。自分は未だ參宮に關する文學を餘り多くは見てゐないのであるが、若し「參宮文學」とでも名附け得る一類の作物がありとすれば、曙覽の此の作の如きは、其の中に這入つてたしかに一異彩をなすものであらうと思ふ。

文久元年曙覽方に五十歳の秋、年來の宿願を果すべく伊勢參宮を思ひ立ち、其の子今滋及び他に三人、一行すべて五人で、九月二日鄕里は越前國福井を出發し、近江・美濃・尾張を經て伊勢に出で、兩宮に參拜し、更に大和・浪華を巡つて京都に逗まること十一日、十月十日無事故山に歸着した、前後四十日間の旅日記が卽ちこの文である。流石曙覽その人の事だけあつて、趣味上から言つても、見聞上から言つても、はた遂行した豫定の諸行動の上から言つても、すべて充實した旅行であつた、頗る意義ある巡遊であつた。就中この行の主目的たる大廟參拜の條は、とりわけ委曲にしかも愼重に書かれてあつて、曙覽其の人の面影の見えるは勿論、又時人の敬神態度なども見ることが出來て、殊に興味多く讀まれる文字である。

二

この日記は勿論擬古文に屬すべきものであるが、世の常の國學者のそれのやうに難解なものではない。極めて平易で而も達意に書かれ、一讀現代口語文に接するとさして違ひのない感じを與へられる。行文は飽くまで自然であつて、故意の作爲がないけれども、流滑輕快少しも晦澁な所がない。事柄の描寫は力めて委曲を盡し、而もそれがよく躍動して寫實の妙を極めてゐる。由來

擬古文は形からも想からもとかく類型的になり易いものであるが、この日記は其の行文から見ても或特殊性を帶びてゐるのみならず、其の觀察とか情趣とかいふものにも一個人色の出でゐるのは、たしかに曙覽の偉なる所だと思ふ。加ふるに相當の品位を保ちながら輕い戲笑味さへ添はつて、如何にも面白く讀ませ得る文の一つである。

それ故、此の紀行の參宮道者の有樣や山田・二見あたりの宿屋の樣子などを活寫した條は、德川期に於ける鮮明な時世相であつて、單に文學上から見ても、たしかに趣味豐富な讀物として推すに足るものである。一例として彼等父子が二見に泊つた時の一段を出して見よう。二人はこの前日、同行の他の人々と別れた。次の文に、長蔭・長遠などいふ名の見えるのは卽ち別れた其等の人々である。

二見に着き、松阪屋といふ尋ねて宿りを定め、浦邊見にものす。海の面曇りたれば、眺め渡せど、物見えず。打寄する波の音のみ高う響く。岩根つたひて、かのならびたる巖ほのほとりまでものす。浪足もとに立重りて物凄し。辛うじて走る〳〵打過ぎて、宿りに歸り、足あらひなどしをるに、向ひの角屋といへるより人おこせて、「主等は越前の人にや、この文昨日こなたに宿り給へる人たちの主等に傳へくれよとて、殘しおき給へりしなり。見給へ。」とて

文出す。表書に「伊藤長蔭がもとより」と記したり。開き見るに「よべこゝの角屋にやどり、今朝出立ちたり。」とあり。「おのれら二人道の空さきくて疾く故里に歸れ。餘りにけ長くはなものしそ。」と懇ろに諭したり。

歌も

君をさておきて來ぬれば我が心ふたみに思ひわづらはれつゝ

長遠よりもあり、同じ樣なり。かくて脚洗ひ果てて入らんとするに、女主出で「向ひなる角屋に緣侍るならんには、彼の方へ宿りて給はれ。」といふ。「已等疲れたり、足も洗ひてあれば、さ言はでこゝに宿貸してたべ。」といへど聞入れず。せん方なく角屋へ行きたるに、この女あるじはた「向ひさして來給へるを、如何でこちには止めまつらん、なほ松阪屋へこそ物し給ふべきなれ。」とかたみに讓り合ひて時を過す。うたてかる所に來合ひていとわびし。辛うじて斷り定まりて、角屋には宿る事となりぬ。

宿屋同士の一種の經緯がまことに目に睹るやうに思はれる。尙其の夜の出來事として彼は次の一段を書加へてある。

今宵客人數多ありて喧まし。中にも酒に醉癡れて、物も吐出づべう聲して、繰言しをる、い

とうるさし。障子一重彼方に年老いたる妹脊とおぼしきが、女率て宿りたる、從者の男子挾箱もちたるが、後れ來着きたり。從者妹脊の者に向ひ、「さきに挾箱を馬屋ひて附けさせ給へる、奴君に後れ侍りて一人になりたるを窺ひて、馬曳く男子、荷持たせたる賃未だ取らず、いでくるべしと申し侍り。奴君のやり給へりしを知り侍れば、そは其許取りつらんと申し侍るに馬士いたく憤り、主人は錢一つだにはくれたる。此奴馬に荷負はせながら、錢おこせでやあらんとするとて、聲荒らかし責(さいな)み侍るにより、奴一人にはあり心細さ遣らん方なう侍りて、賃取り侍りし事は知る〳〵、有合ふ錢取出で、馬士に取らせ侍りきぬ。さる事の侍りしにより、かう後れては侍り。」といふ。主人の翁聞きて、馬主の腹黒きはさる物にて、從者の只管に脅されて、物取られぬるを痛く叱る。「汝初よりともすれば後れ勝ちになりぬるより、かゝる事の出來るものなり。馬主の憎さ、明日その所に行きて、委らかに問糺し、其の事情によりては、所の代官に訴へ、彼に辛き目見せてん。」など、すけみ勝ちなる齒食縛り膝打叩く。

此等に至ると、殆ど一九の「膝栗毛」にも出さうな圖であつて、其の描寫の手腕に至つては決してそれに讓るものではなく、むしろ之を上品にして、更にかの雅望が「都の手ぶり」あたりの壘

を摩するものがあるではないか。

三

曙覽は九月十三日に山田に着いて桔梗屋といふに宿り、翌十四日朝疾く外宮に詣で、更に宇治に行つて內宮を拜した。內宮では恰も神御衣祭であつて其の御神事が營まれてゐた。其の夜は他の同行者と別れて父子二人神主藤波殿といふに泊り、十五日林崎文庫を見て朝熊山に登り、歸途兩宮御祭（卽ち神嘗祭）の事を聞いて、それでは是非其の御式を拜まうといふので、其の夜は二見に出て一泊した。前記の一幕は卽ち其の時の事である。翌十六日山田に引返して外宮の御祭に詣で、十七日には內宮の御祭であるから拜みたいとは思つたが、餘り日數が長引くからといふので、只遙拜に止めてこゝに山田を去つた。是が彼の神都に於けるこの旅行の日程であつた。

彼は外宮に參拜した時の事を次のやうに記してゐる。

十四日、雨ふる。朝とく外宮に詣づ。一の鳥居入りもて行く。繁り立つ榊葉、あさ風にうち薫る。

この紀行の題名を「榊の薫」と命けたのは、こゝの言葉から出たのだらうといふ事である。

今滋

身にしみてかしこかりけり群立てる木の間に千木のかつ見ゆるより

さゝげ奉る物、御門の傍へなる處に行きて納む。事とり行はせ給ふ宮司たちに隨ひて、御門のみまへにはひ出づ。項根突拔く。豫ては祈事の限り祝詞にものして、心の中に讀み奉らんと思ひわたりけれど、此の大宮に詣で奉りては、尊さの身にや迫りけん、さると一言だに言出でられず、ひたぶるに頭地につけて、平伏すより他に絶えてわざなし。退き奉りて、

一日だに食はではあられぬ御食たまふ御惠おもへば身の毛いよだつ

豫め祈願の事を祝詞に作つて心の中に讀上げようと思つてゐたが、御神殿の前へ出ると、磅礴身に迫るものがあつて、一言も口に出ず、只管低頭平身する外なかつたとある。何といふ御神威の靈かさであらう、亦何といふ彼の心情態の尊さであらう。正しく「何事のおはしますかは」といふ心境が是である。其の歌の「身の毛いよ立つ」といふのも、亦ありの儘の表現であつて、彼としてはたしかに斯くあつたらうと想像される。

外宮の參拜を終へた彼等父子は、古市や相の山を過ぎて宇治に着いた。先づ神主藤波殿に寄つて、供物を取出して內宮に參拜したいと賴んだ。やがて案內者が出て來たので、其の後に蹤いて行

つた。宇治橋を渡る際に例の網受けを見て、子の今滋が懷中から錢を出して投げて戯れたとある。

五十鈴川に着いて、其の岸に下立つた時、

いすゞ川手あらひ口をそゝぐよりあやに心のきよまはりつゝ　今滋

五十鈴川先づすゝぎてん年まねくまゐで來ざりしおのが罪とが　曙覽

と詠じてゐる。曙覽の此の歌は短い言葉の中に、當時の國民の敬神思想、殊に大廟に對する思想といふものが髣髴してゐるやうに思ふ。彼は五十鈴川に手や口を濯ぎながら、年久しく念願しながら果さず、五十歲の今日漸く始めて參拜した罪を先づ神に謝したのである。卽ち我が國民たる者は何人も必ず伊勢大廟に參拜すべきもの、而もいち早く參拜すべき義務あるものといふ考を、明かに見ることが出來る。延いては若者の所謂脫參りを伊勢參宮だけに其の父兄が默許したといふ當時の風習の根柢をなす思想を窺ふことが出來るやうに思ふ。今や交通機關の開けると共に、地方人の參宮の昔日に比して容易になつたことは、この上もない幸ではあるが、願はくは參拜する人の誰もに、この心の消磨を來さないやうにありたいものである。

さて彼等は神域に入ると、その日は恰も九月十四日、神宮は神御衣祭であつた。「疾く來て拜め。」と案內者が言つたので、急ぎ周章てて參つた。人々が數多群集して御神事を拜觀する中に交

つて、地上に膝を折伏せて拜んだ。その時拜觀した樣子を

東寶殿といふ御殿の前に、神司あまた居給へり。階の上に、二かたの御神主――いはゆる十禰宜といふべき人の御方なりとなん――のぼり居給ひて、事取行はせ給へり。暫くありて御戸たて給ふ。一かたの御神主御鍵を取り給へり。さて二方とも御戸の御まへに額づきて、やをら階より下り給ひ、數多の神司たちもろ共に西の方へしぞき給へり。

と記してゐる。彼はすべて拜したことだけは、なか〳〵委曲に書きつけて、讀む者をして現たり神々しい御儀式を拜觀する想をさせるものがある。

彼は其の後に

今少し早う詣で來なば、始より見奉らるべきを、後れ馳せに物せしは口惜し。なべての御よそひ、涙こぼれていとたふとし。

と、少し遲かつたことを殘念がり、かつ感激の涙に咽んでゐる。

とかくするうちに、御門々々の御戸たちたり。あらたまりて御門の御前に至りけるに、宮仕ことさらに禱言まうし、大御酒・大御食のおろし賜はる。項根つきぬきてをろがみまつる。しぞきて

おはしますかたじけなさを何事も知りてはいとゞ涙こぼるゝ

かしこけどいひもてゆけば大神の御民の數ぞめぐみましませ

一の歌は、「何事のおはしますかは知らねども」の裏から出て、かく參拜して御神事まで拜觀して、愈〻大神の在ますを實感し奉れば、ます〳〵有難さの涙に咽ぶといふのである。二の歌は畏多いけれども私も畢竟大神の御民の中だから、御惠み下さいませと言ふのであるが、之が亦如何にもよく我が神と國民との關係を言表してゐて、神は畏敬すべきものであることは勿論であるが、我等との間には自ら一種親愛の情を以て繫がれてゐるものであるといふ考から流れ出てゐるやうに感ぜられる。

この日彼等父子は同行の他の三人と全く別れて、その夜は藤波殿に一泊し、翌十五日、雨の降るのに出發して、林崎文庫に行き朝熊山に登つて下りた。前に掲げた二見宿泊の一齣は、卽ち其の夜の事に屬するのである。

四

外宮の御祭は、その御神事が翌十六日の夕方から行はれた。彼はこの有樣をも亦更に〳〵詳細

に記してある。

其の日彼等は二見から山田の妙見町へ來て、先に泊つた桔梗屋に宿を賴んだが、室が已に塞がつて了つたといつて拒まれたので、據なく其の隣の小さな而もむさくるしい家に入つた。不快だとは思つたが御祭さへ拜すればと何も我慢してゐた。しかし其處もだん〳〵客が多くなつて來て、物置といはず板敷といはず押入れるといふ始末であつて、遂に彼等の室にも二人の相客があつたほどの混雜であつた。

夕飯を早く終へて二人は外宮の御門前あたりに行つて佇んでゐた。空がよく晴渡つて一點の雲もなかつた。參拜者の群集は大したもので、老若男女道も通られない位、凡そこゝ山田から宇治へかけて立錐の地もないといふ程であつた。

詣づる人の有樣見渡すに、誰も〳〵足の踏處もあらじげに、貌をすぼめ息もしあへず、ひたぶるに地に額をすりつけ拜む。百人が百人さあらぬはなし。こは固よりさあるべき理なれば、怪しみ言ふべき事にはあらざれども、世の常の習ひ、かう人群るゝ所にては心無き者の自ら打交り居りて、或は立ちながら頭打垂れ、或は聲高に物言ひ、或は齋垣などに手打掛け鳥居の柱撫で、なめげなる者の限りに至りては手洗ひだにせで御前に出づるなど、數多のうちに

はあるものにて、如何ばかり尊き御あたりにても、この無禮者制しわぶるものなるに、兩大宮の御境内に入りては、さる嗚呼者藥にせんとて索りたりとも、見ゆべくはあらず。上なき大皇神の大御稜威のさは言へどえさらぬ所、自ら人の骨身にや浸渡りぬると思ふに、畏しとも畏きわざになん。

讀んで行くと、大御神の御神威の崇きことはもとより、當時の人々の敬神觀念の如何にも至醇至誠であつたことが想像されて床しいことである。尙こんなことを續け記してゐる。

近き邊の人と見ゆるは、大方常の着物の上に白き木綿の單衣を打着て、新しき扇手に取りたり。大きやかなる手洗水入の――莚三枚ばかり敷きならべたらん大いさは定かにあるべし――石もて造りたるが中に涌上りといふ物にしつらひて、自ら此のものに滿湛へられ、人の汲入るゝ勞なくて、流し捨つる跡より溢れ行くべく構へたるが――水滿ちてある程には涌上りなりといふことも知られず、常の汲入れたる水のやうなり――群がり來る人毎に打漱ぐ手の多さには、さばかり勢猛なる涌上りも溜りゆく間なうて石槽の底あらはれたれば、涌上りの棒つき立てたるやうに一筋高う馳昇る。人々それに杓を當ててはつかに手打濡すなり。

御手洗の精緻な描寫、かつは參拜者の雜沓而もその眞面目さが髣髴して、殊に言ふべからざる妙

味があるのである。御儀式の有様は

やう〳〵日暮れかゝる。下司たち御門の御前なる白き敷物取納め、そこらに積れる賽錢、ふぐつもて來て取入る。入るゝ後より紙に包みて戴き投ぐるが雪の降りたるやうに積りゆく。うるさがりて又取入る。勅使の宣命讀み給ふ所石壺といふもの俄かに造り構ふる、清き眞砂取來て敷竝ぶ。酉の時ばかりになりて、遙かに松明數多見え來る。神司たち其の品によりて序を正し入來給ふ。第四の御門といふにて皆打揃ひ給ひ、それより三の鳥居のうちにおのもおのも裾を引き笏を取り、白砂の上に並居給ふ。暫くありて勅使松明あかうて前驅ふ聲しづしづ入來給ふ。同じく三の鳥居の中に、玉串御門の御前に未の方に、小砂の上に坐給ふ。やがて御門の眞向ひにこの勅使出で給ひ、宣命讀み給ふ。讀果てて元の所に歸りゐ給ふ。さて後に西の方にゐ給へる御神主――十禰宜たち――一方御門の少し西なる方に出で給ひて祝詞よみ給ふ。その事終りて、神司たち皆玉串御門のうちに入り給ふ。勅使は尙始のまゝにてゐ給ふ。しばしありて瑞垣御門の御扉開き給へるにや、それとおぼしき音す。折しも十六夜の月森のしげみを洩りて、眞澄の鏡かけたらんやうにきらめく。今滋が

月の影森のしげみを照るなべに御戸あく音のさやかにぞする。

何といふ神々しさだらう。一讀その整肅さ森嚴さが何となく身に迫つて來るやうな心地がする。

今は正殿の御扉開くるならし、先のやうなる音なひのいと高う響き渡る。人々耳を澄して窺ひ奉る程、さばかり所狹う集へる人の、物も言はず靜まり返りてある。篝火こゝかしこに燃ゆ。御火焚白き衣着て打衞りをる。檢非違使めく人數多の人引連れてけいめいしありく。今は亥時も過ぎぬらんと覺ゆれば、人押分け宿りへ歸る。……

これらは御儀式を拜觀しつゝ備忘的に手控でもしたものであらうか、とにかくすべてを順序正しく一事を漏すまいと委細に記し續けたものであり、而もその筆致がいかにも引緊つて、現場の感激とか興奮とかいふものを冷してゐないものである。洵に彼の敬神的至誠は神宮に關する記事に於て、彼がこの日記に費した紙の幅廣さに表れてゐるといふことが出來よう。而もそこに於ける筆の力强さに表れてゐるといふことが出來よう。

五

曙覽のこの旅行の主目的の、大廟參拜であることは勿論であるが、彼の伊勢に在る間に尙記すべき一事は、山室山なる本居翁の奥津城に詣で、松阪に翁の遺宅を訪づれたことである。この事

も亦比較的精細に書いてある。彼は國學を田中大秀に學んで、深く本居翁を追慕してゐたのであつた。彼はこの旅行に於て、後に京都で三木木の賴山陽の舊宅所謂山紫水明處に數日寄寓したが、彼の漢學はもと兒玉子敬に就いたので、山陽にも亦孫弟子であるから、この宣長と山陽との跡を訪ねたことは、この旅行に於ける極めて有意義なものであつたのである。

外宮の御祭を拜した翌十七日のことである。山田を出發して明星の村はづれで山室山への道を訊ねた。恰も茶店の主人が曾て松阪にゐた人であつて、本居翁の事を知つてゐて委しく物語つてくれた。而も折も折そこを通る本居家の當主を主人に敎へられて、立ちながら何くれと話すことが出來たなどは、誠に不思議な緣であつた。

さて山室山妙樂寺に行つて、翁の墓に詣で、

今日は松阪まで行きて宿り取るべく思ひたれど、この寺のいと物靜かなるに、同じくは一夜やどりて御墓に手向けまつらん歌をも讀みてん。

と言つて、寺に一泊した。聞けば今年は故翁の六十一年忌であつて、松阪の有志の人が宣長・大平兩大人の筆蹟を集めて展觀する催があるし、靈祭はこの月の二十九日翁の忌日に行はれる筈であるといふ。遙々訪ねて來た彼は、偶然にも來合せたその年や月を思つて、定めて感慨に禁へな

かつたことであらう。翌十八日、彼は寺の書畫帖に。

宿しめて風に知られぬ花を今も見つゝますらん山室のやま

尋ねえて今日おくつきを見まつれば嬉しくもあり悲しくもあり

後れても生れし我か同じ世にあらば杏をも取らまし翁に

といふ手向の歌三首を記し殘してそこを辭した。

それから彼は松阪に出て、魚棚町を人に訊ねて本居翁の舊宅を訪づれたが、昨日途中で逢つた主人は內宮の御祭に行つたのであるから、無論不在であつた。彼は固よりそれを知りつゝ故大人の御跡が慕はしくてならないので、門の閾でも越えて來ようといつて訪問したのであつた。偶〻出會つた隣人に「主人には昨日道で面會したが、歸られたら越前の者何某が參つたと申し傳へて下さい。」と言傳てて、宿望を果した彼は滿足しつゝ門を出て、大和路へと志した。

この事は國學者として、殊に鈴門の餘流を汲んだ人としての彼曙覽に取つて、とりわけ我々の興味を惹く一つである。

（大正十三年二・三・四月、敬神敎育資料）

「永代藏」と「胸算用」

一

我々稼いで食つて行く階級の生活には不安定が常である。かく觀ずることが我々をして此の世に愛想をつかすものでもなく、自暴自棄にならせるものでもない。不安定を豫想して之が準備を取ることであり、不安定に面して之に摧折しない所以でなくてはならない。かくして不安定は我我人類に向つての試練であり、向上の本であると謂ひ得るのである。

收支の均衡といふことが生活安定の一大原則であつて、收入に相當せる生活、生活し得るだけの增收が、生活不安定を救濟する唯一の解決には相違ないが、實際さう單純にいかないのは、そこに個人の努力の如何ともする能はざる所があるからである。即ち不安定を齎す原因も其の人自身に歸すべからざる事があり、亦之を救濟することも其の人自身の及ぶべからざる事がある。自然の力、社會の力、この二つは或度まで不可抗に我々の生活を制約してゆくからである。かく觀

ずることが我々をして放縱にならせることでもなく、自墮落にならせることでもなく、それが自己の爲し得る所を全力を擧げて爲す所以でなくてはならない。畢竟古人の所謂「己を盡して天命を待つ。」といふ處まで落着かなくてはならない。

それ故我々は不安定に面して、しかく脅威だと戰いたり、恐慌だと慄へたりせず、先づ肉體的にも精神的にも自己を強く建設することが肝要である。

二

經濟生活を中心とした安定不安定といふことを考へる毎に、自分の頭にいつも聯想される文學は井原西鶴の「日本永代藏」と「世間胸算用」との二つである。元來日本の文學に現代は別として——金の事、言換へると經濟の事を主題として取扱つた作品は極めて少い。西鶴は珍しくも當時經濟の中心たる京阪をはじめ諸國の町人の生活を捉へて、これらを小說に作つた。「永代藏」は一名「長者鑑」ともいつて、當時町人の理想たる大分限者になる經路や苦心を述べ、其の信條を說いたもので、六卷三十篇の小話集、「胸算用」は「大晦日は一日千金」といふ變名の命けてある如く、町人が一年中の難關たる大晦日を切拔ける遣繰算段を描いたもので、五卷二十則の短篇集

である。而も前者は優勝者成功者の得意、後者は劣敗者失脚者の悲哀であつて、對照した姉妹篇に書かれてゐるのが殊に面白い。自分が安定不安定に聯想をもつのもこの故である。

これらの小話は勿論そのかみ貞享元祿時代に於ける、しかも町人といふ一社會をのみ對象としたものであつて、直接現代に當嵌まるものでもなければ、一般社會を律し得べきものでもない。其の上今日の我々から觀れば、時代が時代であり商人社會といふものがさうであるからであらうが、さして深みがなくあまり單純に過ぎる嫌はあるが、黃金萬能を信條とした町人が、其の物質生活に徹底して動いてゐる壯快さを覺えずにはゐられない。成功者が手段を選ばず富に向つて邁進する有樣、失脚者が工面の限りを盡して債務を逃れようとする有樣は、なるほど一面に潜む悲哀を感じないのではないが、其の何れもの態度に一種の强さを思はずにはゐられない。

自分は今更富豪にならうとも思はないのであるが、かゝる讀物からふとして我々の日常生活にヒントの何等かが與へられ、モットーの或物が授けられはしないだらうかなど思ふのも、やはり不安定に生活してゐるものの弱さである。

三

「永代藏」三に「煎じやう常とはかはる問藥」といふ一つの話があつて、或人が四百四病は世に名醫があつて治すが、貧病の苦しみを直す治療があるかと、或長者に訊ねたら、長者丸といふ妙藥の處方を傳授するといつて、

△朝起五兩、△家職二十兩、△夜詰八兩、△始末十兩、△達者七兩。

此の五十兩を細かにして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合せ念を入れ、これを朝夕呑込むからは、長者にならざるといふ事なし。

と言つたといふ一段がある。朝起と夜詰は所謂夙興夜寐で勞働時間の長いこと、家職は祖先傳來の商賣を勵むこと、始末はケチなまで節約すること、達者は健康のことで、兩目の數は其の輕重の度を示したものである。その內最も自分の目を惹いたものは最後にある達者である。

我々の生活には經濟生活の外に精神生活と身體生活とがある。そしてその身體生活が凡べての始であり終である。身體の健康不健康が我々の日常生活の安不安を支配することは最も大であつて、健康な身體でなければ經濟生活も精神生活も健全に營まれやうはないし、不健康といふことが如何に個人若しくは一家庭の生活を不安に導くことであらう。西鶴が最後に加へた「達者七兩」は平凡なことではあるが、亦除くことの出來ないものである。兩目の如きは五つの內最も高

く置くべきものであらう。

それ故我々は勤勉勤勉といつても、限りある體力に過重な勞働を敢へてし、過度の疲勞を生じ、延いて健康を傷つけてはならない。節約節約といつても健康を保つことの出來ないまで粗惡な衣食住をすることを避けなくてはならない。衣食住中殊に先とすべきは食であつて、榮養不良は其の個人のみならず子孫の健康にも及ぶものであるから、國家的にも考慮すべき問題をさへ惹起すのである。

窮しても健康な身一つを持つといふことが我々の爲にどんな強みであらう。貧乏のどん底に陷つても尙「窮すれば通ず。」といふ落着きをもち、「天道人を殺さず。」といふ信念を以て、悠々やつて行かれる力は、皆この健康から出て來るのである。我々が何を措いても第一に強く築き上げ、そして持續けたいものは身體である。

四

西鶴は家職大事や始末と共に、知慧才覺といふことを到る處にいふ。これが出世者の一要素である。

人の分限になる事仕合（好運のこと）といふは言葉、實は面々の知慧才覺を以て稼ぎ出し、其の家榮ゆる事ぞかし。これ福の神の戎殿のまゝにもならぬ事なり。（永二）

この知慧才覺といふのは、機敏で目先の利くことをいひ、更に廣くよく人情の推移を理解し、社會の趨向を洞察する力をも指すのであつて、一言にいへば商機を捉へる才能とでもいつてよからう。

それで西鶴の分限者には仕合卽ち偶然な天運によるものもないではないが、皆それ〴〵の才覺によつて成功するものが多い。大は現金賣百貨店樣の吳服屋に勘づいて、大商人の手本となつたかの三井九郎右衞門の話、下落を見計らつて借金してまで唐船から緋綸子の買置をして儲け出した泉州堺の小刀屋の話から、小は北濱の米搗場のこぼれ米を掃集めることに目をつけて分限となつた後家の話、大工の落した鉋屑木屑を拾ひ集めて箸を削ることから、大材木商となつた箸屋甚兵衞の話に至るまで、皆着眼の非凡であることを物語つてゐる。

目の利くことに於ては亦惡い方に働いた例もある。初瀨の觀音の戸帳の古唐織を欺き取つて、茶入の袋表具切に賣つて大利を得た伏見の菊屋、長崎の或家から定家の小倉色紙の屛風をだまし貰つて、身代を取返した博多の金屋などの話の如きは是である。「胸算用」には手習師匠が子供

の日常からその將來を觀察して、子供の間の世智賢いのは只親の氣風を見習つてするだけで眞の才覺ではない、父母の言附けをよく守つて明暮讀み書きに油斷ない者の方が、行末分限になるものだと豫言したら、果してその通りであつたといふ大分教育的な話などもある。

西鶴は又商賣は只正直だけではだめであるといふ例に、神田の明神の前に身を隱した浪人が瀬戸物店を出して、直段を尋ねると百の物を百といつて、直切つても決してまけなかつたから、三年餘りに一つも賣れなかつたといふ話を出してゐる。

我々のこゝの問題は、それら富豪となる話とは違ひ、生活の不安定を濟ふ爲の手段についてであるが、やはり個人の經濟生活にも相當才覺があつてほしいものである。目の利く所があつてほしいものである。現今我々の生活に最も缺けてゐる一つは、社會的竝に經濟的知識とその觀察とである。凡そ現代は昔とかはつて社會的事實と經濟的事情とは密接に伴隨し、常に敏感に相反應してゐるのであるが、我々個人の生活は、多く社會やその經濟から戸を閉ぢてゐて、只其の影響波を感じてゐるだけで、其の如何にして起り何處から來るかを知らない。それ故眞の準備も出來なければ眞の救濟も出來ないのであつて、遣繰がすべて姑息ではないかと思ふ。言換へると眞の社會的境遇を自覺し、之に順應した生活が營まれてゐないのではなからうか。吾々は常に農作の

豐凶・產業の振不振・輸出入の如何・政治上の動靜・財界の景況等廣く社會的事實を觀察して之に伴ふ經濟的事情を知る眼識があつたならば、有り餘つた時だといつて不節制もなければ、逼迫して來たからといつて必ずしも困しまずに切拔けることが出來るだらうと思ふ。要するに善い意味に於ける町人の機敏な洞察が我々にも極めて肝要であると思ふ。

五

西鶴の描いた町人は、富を攫取する爲分限者を贏得る爲には、手段を選ばない體の人物が多數を占めてゐる。恐らく當時の町人の眞相であらう。それ故彼等には理性も道德も宗教も趣味も皆無視されて了つた。

金の前には理非はない。

いかに利發顏しても、手前のならぬ人のいふ事は聞くものなし。愚かにても福人のする事、よきに立つなれば、闇からぬ人の身を過ぎかぬる口惜しき事ぞかし。（永四）

といひ、彼の他の作「織留」にも同じやうに、

富貴は惡をかくし貧は恥をあらはすなり。身代時めく人のいへる事は横に車も退いて通し、

世を暮しかぬる者のいふ事は人の爲になりても、是をよしとは聞かず。何につけても金銀なくては世にすめる甲斐なきことは今更いふまでもなし。

と言つてゐる。それ故彼の描く道德的行爲も何となく富を獲る手段に見られることがある。一升買ひする貧乏人には利德かまはず量りをよくして酒や米を賣つて評判を取り、それが本で分限になつた江州商人が「織留」に書いてあるが、それも評判を取る爲にしたのであつたならば、動機に不醇な點があるといはなくてはならない。

從つて宗教も金錢の爲の手段に使はれる。西鶴には

古人も世帶佛法と申されし事今以て其の通りなり。（胸五）

と書始めて、或大晦日の晩に門徒寺の坊さんが、例年とちがつて讃談聞きの參詣者が、只の三人しか無かつたのを、これでは仕甲斐がないからとて、讃談をやめて皆に歸れといふと、三人の參詣者は我々も別に信心から來たわけではない、皆大晦日の掛乞から免れる爲に來たのだといふ、極めて皮肉な一つの話があるが、これでは僧侶も信徒も佛を生活の手段になし了つたものである。

又金錢の爲にはすべてが只實用的になつて、そこに趣味生活を容れる餘裕がなくなる。

嫁も高人の家は格別、民家の女は琴のかはりに眞綿を引き、伽羅の煙よりは薪の燃えしさるをばさしくべたるがよし。（永一）

これらも一面理のあることではあるが、全然風流を蹂躙し了つたものではないか。

葭垣に自然と朝貌のはえかゝりしを、同じ詠めには果敢なきものとて刀豆に植ゑかへける。（永二）

といふ商人もある。

しかしかうした生活は我等の到底堪へられる所ではない、少くも現代的生活ではない。やはり昔の事である、昔の淺はかな町人根性である。我々はたとひ窮しても、正しく・善く・美しく生活したい。さうでなくては、精神生活の不安定この上ないからである。こゝが人間たる所以であつて、「渴しても盜泉の水は飲まず、熱しても惡木の陰に息はず。」といふ意氣地がなくてはならない。金錢も時と處次第で至寶としなければならないが、亦瓦礫と見なくてはならない。

西鶴も亦全然この事を言つてゐないではない。

又は博奕業にて勝を得たり、似せ物商ひ、後家を見立て入聟、高野山の銀をまはし、人知らねばとてゑた村へ腰をかゞめ、手前のよろしきは嬉しからず、常にて分限になる人こそまことなれ。（永六）

などは金錢も穢く作るなと教へたものではないか。前に記した小倉色紙の屏風を欺き取つた話の始に、

これを思ふに、人をぬく事は跡つゞかず、正直なれば神明も頭に宿り、貞廉なれば佛陀も心を照す。（永四）

と言つてゐるなどは、大分宗教的に應報を説いたものである。

六

こゝに殊に注意を促したいのは、西鶴の所謂仕合である。仕合とは偶然に起る僥倖とか、投機的の當てこみをいふのである。なるほど西鶴にも當時世相の一面として仕合を以て亘萬の富を得た話が、ないではないが極めて尠いし、彼はそれを餘り賞讃してゐない。山城國淀の與三右衞門が、淀川の洪水に計らず千貫目に餘る漆の固まりを拾ひ上げて、忽ちこの里の長者になつたといふ話の處に、

これらは才覺の分限にはあらず、てんせい（偶然といふこと）の仕合なり。おのづと金が金まうけして、其の名を世上にふれける。（永六）

で面白くないといふ。すべて彼が自己の才覺によつて富を作り出すのを貴ぶことは、上に引用した文によつても明かであるが、零落した武士を評して、

運は天に、具足は質屋にありては、時の役には立ちがたし。（永五）

といふ警句を吐いて、僥倖を夢想してゐる者を哂つてゐる段もある。

凡そ僥倖を望んで一攫千金を夢みる心ほど墮落したものはない。亦之ほど人の精神生活に不權衡を與へるものはない。かゝる心の漸次高まることが、其の人をして眞摯な職務を嫌はせるのは自然であつて、忽ちその經濟生活に不安定を齎すことは明かな事實である。然るに生活の不安に脅される者は――飢ゑたるものの悲しさ――得てこの誘惑に唆かされ易いものである。しかしそれは不安を更に不安に導くものであると言はなくてはならない。人は確かでないものを期にするほど不安なものはないではないか。

實に生活の安定を欲する者の爲には僥倖心・投機心は大の禁物でなくてはならない。假にも一攫千金、濡手で粟の夢にあこがれるな。強かれ〳〵、心の魔の誘惑を退けよ。

七

終に西鶴のこれらの物語に見逃がしてはならない一事は、町人の身代を起したり破つたりする極めて重い一要素を、婦人ことに主婦たるものの才覺に置いてあることである。而もそれが力強く鮮明に出してあることである。

奈良の晒布問屋松屋といふの後家が、氣堅く子供を育てて、まだ年若い身を再緣もせず、家計を一心に切廻して、夫が借金を殘して死んだ身代を持直す話、江州八幡の蚊帳商人扇屋といふのが――前記貧民に米酒の量りをよくして賣つた家――一國の大商人となつたのは、もと〳〵內儀の才覺一つであつたといふ話は、女性が如何に家計に於ける强い力であるかを物語つてゐる。之に反して、寬濶な（伊達なといふこと）女が、親から讓り受けた財產を茶々無茶にして了ふ話もあるのであつて

殊に近年は何方も女房家ぬし奢りて、（中略）昔は大名の御前方にもあそばさぬ事、思へば町人の女房の分として、冥加恐ろしき事ぞかし。（中略）惣じて女は鼻の先にして身代たゝまる宵まで、乘ものに二つ挑灯、月夜に無用の外聞、闇に錦の上着、湯沸して水へ入れたる如く、何の役にも立たざる身の程、死なれたる親爺持佛堂の隅から見て、浮世の雲を隔てければ、悔みても異見はなり難し。（胸一）

と言つてゐる。いづれも主婦たる者の心一つで、一家の榮落を見る好い例話である。

我々普通の家庭に在つては、男子たる主人が收入を得る人で、女子たる主婦が支出に携はる者である。收入を得る人だけが燒きもきしても、支出に携はる者に何の考もなかつたら、到底經濟生活の權衡は取れていかない。身體生活や精神生活の方面に於ても、稼ぐ主人のそれらの生活に、主婦が全く理解を缺いたなら、忽ち安定は破られる。この意味に於て、一家の生活に對する婦人の使命の、殊に重大であることを思はない譯にはいかない。自分はこの小敍述を結ぶ爲に、西鶴の物語中から尙二つの女性を拔出したいと思ふ。

此の女房（醬油賣りまはる喜平次の妻）隨分かしこく、子供を奇麗に育て、人の物をも負はず、年取物をも師走のはじめ頃より調へ、節季に帳かたげた男の貌を見ぬを嬉しやとて、萬事を仕舞ひけるに、この幾年か錢取集めて七匁五分か八匁、七匁六分、八匁八九分の殘り、遂に十匁ともちて年越えたる事なく、板木で押したるやうな此の家の若ゑびすと祝ひける。（永二）

京に限らず江戸大坂のはしゞ〳〵、あき地野原まで少しのあきどもなく、人家に立ちつゞき、何して世を渡るとも見えねど、五人三人の子供に正月著る物綿入れて、盆は踊ゆかたも拵へ、はし鹿の子の後帶一しほ見よげなり。亭主は日傭取り、或は釣瓶繩屋、又は童すかしの猿松

の風車をするなど、やう〳〵一日に丸とりにしてから、三十七八文、四十五六文、五十までの仕事するかせぬ内にて、四五人口を過ぎていづれも身の寒からぬは、これみな母の働きなり。（永六）

これらは實に良き妻賢き母の禮讃である。願はくはかゝる女性にとことはに幸あれ。

（大正十四年八月二十五日稿、同十月、家事研究）

久保田さんの事ども

私は去る五月二日京都黑谷の瑞泉院で營まれた故島木赤彥氏の追悼會に罷出て、故人の同窓の一人として其の追憶談を致しました。處が八月末に、貴誌發行所の齋藤さん・藤澤さんから、十月のアララギ追悼號に何か書けといふお話があり、次いで備後の中村さんから、京都に於ける彼の拙話の筆記を送つて戴きました。それで大體京都に於ける拙話を本筋とし、それに多少の增訂を加へて、故人に關する追懷をものすることに致しました。中に就いて奈良地方に來遊された際の事を、餘計に增補してあるのは、發行所からの御注文に隨つたわけであります。尙お斷り致しておきますが、この話には——殊に舊い時代のことに——記憶の誤りも多からうし、又私は只今當福岡市に移つて參つてゐますので、敍述に於て或は時間上場處上の錯亂が起るかも知れないことを、豫め御承知おき下さい。

一

私は明治二十九年四月に、長野縣尋常師範學校（間もなく尋常だけが除かれた）に入學したが、詩

人といふ評判で我々新入生に尤も早く注目された一人は、塚原俊彦さん――後の久保田さん――であつた。塚原さんはその時三學年生であつて、私ども入學當時室長といふ役員をしてゐたが、丁度交番で舍監室に詰めてゐられた時、私は何かの願だか屆だかを恐る〳〵出しに行つたことを覺えてゐる。當時の塚原さんは丸顏のしかも肥えた、若々して――當時上級には隨分大人びた人もあつたが――快闊であるといふやうな感じをもつた人であつた。塚原さんは諏訪郡出身であつたが、由來諏訪からは比較的優秀な人が多く出てゐたし、當時の三學年の級には殊に異色の人が多かつたので、全校の仰望する所となつたが、その中に諏訪出身も數人ゐて、頭腦のよい人、人物の優れた人などあつて、塚原さんはその中の出色の詩人であつたわけである。太田水穗さんも同級であつたが、この級が全校に於て一番文學的色彩の强かつたのは、塚原さんなどがゐたからであると言つてよい。當時の四學年にも隨分優れた人々がゐたやうであつたが、創作家といふやうな人は三學年よりも少いやうに感じた。只今の高野斑山博士はその時の四學年であつたが、あの頃の我が長野師範を出た中では、高野さんと塚原さんとが何といつても双龍だらうと思ふ。

塚原さんの長野時代は、明治の詩歌史から見ても新體詩時代であつて、かの「東西南北」・「天地玄黃」・「花紅葉」・「抒情詩」・「松蟲鈴蟲」・「若菜集」などの續出した時である。隨つて塚原

さんから言つても新體詩時代であつて、短歌は餘りなさらなかつたやうである。作は常に伏龍或は山百合の號を以て、主として「文庫」といふ雜誌へ寄稿されてゐた。私どもは塚原さんの詩壇の地位といふことなどは、餘りよく知らなかつたが、この雜誌の中では大分有數な作家であつたらしい。爲に誌上の友だちなども多く出來て、或年夏季休暇を行脚して、詩友を巡訪したといふやうな事も聞いてゐた。あの頃を追想すると、自習室に於ける塚原さんが、學校名入の和罫紙――學習用として生徒に給與されたもの――を前において、いつも脣の端をちよつと墨で染めて詩作に耽つてゐた姿を思ひ浮べる。寢室は別棟にあつたが、夏の晝休みなどに、軍隊式の寢臺の上に横たはつて、大形な雜誌「文庫」を廣げたり、當時刊行の小形な詩集を讀んだりしてゐた塚原さんの姿を思ひ浮べる。

殊に一つ思ひ出すことは、三學年の人たちが毎月「二葉草」といふ詩文集を作つてゐたことである。中には必ず塚原伏龍の長詩が伏龍一流の文字で、目立つて立派に書かれてゐるのを見るのであつた。全校に文學趣味を濃くしたことは、この「二葉草」の影響が多く、從つて其の中心をなしてゐた塚原さんの力が大きかつたことを思ふ。塚原さんには、詩人生來の一素質とでも申さうか、手跡の立派であつたことと、吟誦の上手であつたこととが、亦鮮かな印象として吾々の

耳目に殘つてゐる。當時の筆蹟は晩年のものとは大分違つてはゐたが、已に一家をなした脫俗な體であつて、其の影が多少は後の體まで殘つてゐるやうに感ぜられる。私は或時枕詞を集めて寫したものの首に、短歌を一首書いて貰つたことがあつたが、此の頃探しても何處へ紛れたか見附からないのは惜しいことである。塚原さんの長詩の吟誦は又一種朗かな調子をなしてゐて、よく「君方聽いてくれ給へ。」と言つては、自作の長詩を節面白く歌つて下さつたので、私共はそれに聞惚れるのが常であつた。

塚原さんの師範在學中は詩作に熱心であつただけ、どちらかと云へば學業すべてに就いて勉强された方ではなかつたらうが、元來頭のいゝ方だから、その爲に何等の故障もなかつたやうである。かやうに思ひつゞけて來ると、當時よく行はれた行軍の時など、制服——緣を取つたホック掛けの上衣で、左の袖に年級を表す白線を入れた——制帽の著け方、ゲートルの穿き方、背囊の負ひ方などの如何にも不恰好な、といふより寧ろ武裝といふことが如何にも此の人には似つかはしくないと言つたやうな塚原さんの姿など、私にはまざ〳〵と見えて來るのである。

學校を卒業された塚原さんが北安曇郡の池田小學校に赴任されたことだけは記憶してゐるが、私は元來特別に親しく願つたのでもなく、私も學校卒業後間もなく東京に出て了つたし、その後

の塚原さん——もう久保田さんであつた——の御動靜についてはあまり多くを知らなかつた。私は明治三十八年三月東京を去つて、山陽道の或山中へ女學校の國語の教師として赴任したが、其の卒業間際に金色社主山田氏から、圖らず詩集「山上湖上」を贈られた。私はこの時久しく意識を去つてゐた昔の知人山百合さん、即ち久保田さんの記憶を再び新たにしたのであつた。私は知る人のない山中に這入つて、久保田さんのあの鄕土的な詩を口吟して、獨り懷かしんだものであつたが、それも只それだけであつて、後は又久保田さんの歌道の御精進を時々雜誌の上で拜見する位に止まつた。しかし私共が二十年東西に漂游してゐた間に、久保田さんは已に島木赤彥の名で、中央の和歌壇に立派な地位を占められてゐたのであつた。

二

しかるに最近圖らず久保田さんと私とを近くさせることが起つた。はじめ大正八九年の交、今の九大教授松濤さん——かつて長野に在住されて、久保田さんとは何か姻戚上の關係まで引いてゐられる上、東京の淑德女學校で同勤された——が奈良の學校へ來られ、尙淑德女學校での久保田さんの教へ子が奈良の學校へ入學して來た頃から、私は自然久保田さんの言傳を承り、お手紙

をもいたゞくやうになつた。間もなく久保田さんが「信濃教育」の編纂に携はられるやうになつて、大正九年の四月だと思ふが、態々葉書を下さつて、「信濃教育」誌上に何か寄稿せよとの仰せであつた。しかし私は多忙な爲その時の御依頼に副ひ得なかつたことを濟まないと思つた。かうして二十何年かの後、再び生じた御縁を不思議にも思つてゐた際、遂に大正十一年十月の末、奈良地方への來遊があつた。私はその十月二十九日に旅行先の土佐から歸つて來て、翌三十日は學制發布五十周年記念日であり、翌々三十一日は天長節祝日であつたが、その三十一日外から歸ると、私の留守中午後四時頃、思ひがけない久保田さんが宅を訪ねられたことを知つた。今夜は松濤さんの家へ泊られるとのお話であつたさうだから、直様お訪ねするとゐられた。私は長野以來實に二十四年振りでお目に掛つたのである。久保田さんはやはり大分年を取られたなあと思つたが、同時に何となく昔とかはつて落着いた重々しさと、大層謙虚な丁寧さとを感じさせられた。聞けば京都に數日ゐて、大學の圖書館で萬葉集の燈であつたか僻案抄であつたかを校合して來たこと、大阪方面にも遊んで——中村さんの所かにゐて——文樂も見て來たこと、とちらでは已に飛鳥地方を巡つて來たことなどの話をされたと記憶してゐる。明日は午前に法華堂（三月堂）の佛像を見て、午後法隆寺へ行きたい豫定だと承つたから、それでは明日午後は私もお伴をしようと

約して私は辭し去つた。久保田さんはお土産だといつて、私に信濃眞綿のチョツキを下さつた。何だか滿誓沙彌の「筑紫の綿」の詠などが聯想されて、萬葉詩人らしい贈物であると、殊に嬉しくありがたく感じた。

翌十一月一日、三月堂拜觀を濟まされた久保田さんは、正午近く中村さんと御同道で私の學校へ見えて、私どもの室を訪れて下さつた。丁度私が土佐から持つて歸つた鹿持雅澄先生の墓碑の拓本があつたので、それをお目に掛けると、久保田さんは、

余以後　將生人者　古事之　吾墾道爾　草勿令生曾

といふ先生の辭世を見てそれを口吟まれた。丁度携へ歸つたばかりの萬葉學者の墓碑の拓本を、第一に萬葉道の大家久保田さんや中村さんにお目に掛けるのも、不思議な縁であることを感じたのであつた。こゝで淑德女學校出身の生徒にも會はれ、丁度私の同僚の岩城準太郎君や水木十五堂君もゐて、水木君が同君一流の大福帳を差出して署名を求めると、久保田さんも中村さんも署名され、かつ歌も書かれたやうに記憶してゐる。

午後一時前後の汽車で法隆寺に向はれた。私がお伴をした。彼方へ着いて寺務所の千早さんに御紹介して賴んだら、特別に夢殿を開いてくれて、例の觀音樣を拜むことが出來た。お二人は暫

く息を凝して見てゐられる。やがて久保田さんが戸帳が少し邪魔になると言つて殘念がられながら、又前から見、左右から見、よく見られて、あまり仰しやることもなかつたが、最後に「とてもえらいものだ。」といふやうな事を言はれた。法隆寺驛午後四時近くの汽車で、東西に別れて中村さんは大阪へ、久保田さんと私は奈良へ歸つた。

其の夜は私の家に泊つていたゞいたのであつたが、今から思ふと斷れ〴〵ながら、色々の事が浮んで來る。夕飯の膳に薯蕷の磨つたのがあつたのを、他の何よりも殊に賞美して下さつたのを記憶してゐるが、さういふ點にもやはり赤彦さんらしい處が出てゐると思つた。たま〳〵文樂座の近松二百年記念興行の話が出て、募集當選の新作劇「聚樂乃榮華」の甚だ結構なものでない、——私も同感であつたが——第一不自然極まる所々が多いと批評され、最後の「博多小女郎浪枕」は流石大近松だけあつて、自然の人情に觸れてゐる、偉いものだと賞讃されたが、私かに和歌の寫生道などいふことも、こんな所に通つてゐるのではなからうかと思つたのであつた。丁度その頃私の近所に住んで、古假名の研究をしてゐられた大矢透翁の近作「地藏十輪經元慶點」や「成實論天長點」などをお目にかけて、かういふ研究を二十年來やつてゐる七十三の老翁が、今奈良にゐることをお話したら、その古假名と萬葉假名との關係を面白いと言はれ、殊に老翁の篤學な

のに深く感心された。——この大矢翁の事については、久保田さんが其の後何かに書かれたやうに記憶してゐる。——後になつて同翁の新著「願經四分律古點」を送つて上げると、大層よろこばれた。

話は又童謠の事から、子供の讀物の事などにも及んで、現代文學者に崇敬すべき人物の稀なこと、現代讀物の信頼すべきものの少いことなどを痛歎され、延いては子供の教育の仕方に移つて、今の教育が、とかく眞面目さと質實さとを缺いてゐることなどを批判されたが、お話の一つ一つが皆久保田さんの和歌道と同一精神から出て來るやうに感ぜられて、私は和歌道が實に大きな修養道であることを、久保田さんに於て見たやうな氣がした次第である。

ついでに家の子供の赤彦先生觀とでもいふべきものを添へることにするが、子供も童謠をお作りになる赤彦先生だと聞いて、其の泊つて下さつたことに、少からず興味をもつたらしいが、蔭で母親にいふのを聞くとかうであつたさうである。

「赤彦さんつてあんな人か。もつとハイカラな、洋服でも著てゐる人かと思つたに、何だやあ。」

これは故人に對して或は禮を失ふかも知れないが、率直に記しておくことを許していたゞきたい。

其の夜久保田さんは、私の爲に短册を三枚書いて下さつた。今手許に殘つてゐるのは、

冬榮まくとかき平らしたる土明しもの幽けきは晝ふけしなり

絶間なく鳥なきかはす松原にあしをとゞめてこゝろ靜けき

の二枚であつて、他の一枚は人に乞はれて遣つて了つたので、その歌も記憶してゐない。こちらへ移つて來てつい此の間の事であつたが、或人が訪ねて來た際、私の短册帖を見せた所が、其の人が「私はあまり日本人の書を好まないが、この中ではこの人などのを一番面白く思ふ。」と言つて、指さしたのが卽ち赤彥さんのそれであつた。此の人は現代の和歌壇の事などは勿論、赤彥さんの名前など全く知らない人である。

三

その翌十一月二日、久保田さんは早朝私の家を立たれて、七時三十四分發の汽車で御鄕里信州下諏訪に歸られた。

その後間もなく下諏訪から一つの荷が私の家に着いた。久保田さんから彼の地產の榠櫨と胡桃とを子供等に送つていたゞいたのであつて、それに添へたお葉書の端には「おほのろ三吉」といふ童謠を書いて下さつた。このお葉書も私の家には大切な記念物となつた。

久保田さんは別れる時、來年は今一度大和に來る、大和に來て見殘した戒壇院の四天王を是非見たいと仰しやつた。私は是非お出でを待つ、東大寺に賴んで十分便宜を與へてもらふからと約束したが、遂に來られなかつた。翌十二年の秋滿鮮方面の旅行をされると聞いた時、復り路にでも奈良に寄られることかと思つたが遂に來られなかつた。思へば大和の山河も再び久保田さんの來遊を待つことが出來なくなつた。私は前申す通り二十四年振りで會つて、而もそれが卽て永久の別になつて了つた。私は今遠く筑紫の島へ渡つて來て、はるかに久保田さんに泊つていたゞいた奈良の舊廬を想ふと、あの時の久保田さんの姿がまざ〳〵と浮んで來て、洵に感慨に勝へないのである。

私はこの敍述に於て、知らず識らず自分一個の私事を臆面もなく陳ねて了つて、故人を瀆し誌上を汚したことを幾重にも謝罪する。（大正十五年九月十日稿）

（アララギ、島木赤彥追悼號）

海の哀話

一

海のない國に生れて、殊に此の二十年間を不思議に海のない國にばかり暮して來た自分は、海に就いては目新しさから湧く可成りの興味を持つのみならず、同時に亦海に就いては相當いろいろな事を思はせれらる一人である。遠く隔たるといふ心持も、一衣帶水ながら關門海峽を渡る事によつて、大地つゞきの幾百里よりも一入深められるやうな氣がした。此の頃と〻谷の奥にまで這入つて來る對馬の木炭賣があるが、自分が只山から市へ擔つて出る炭燒夫の上よりも、「對州」といふ彼等の聲に一種の感を唆られるのは、彼等の海を渡つて來る生業を思ふからである。

二

昨年の事である。此方へ來た當時、自分は博多の或古本屋の店頭に一つの寫本を見出した。半

紙二十枚足らずの薄い册子であるが、表紙に「志摩郡唐泊浦船頭十右衞門乘組之内加子孫太郎ボルネオ國支配之内に漂着口書」とあるものであつた。知る人は知る、殊に此の土地の人々にはさして珍しくもないだらうが、新來の自分に尠からず興味を惹き起させたのは、それが鄉土的の資料であり、而もそれが漂流譚に屬するものであつたからである。石井研堂の漂流奇談全集を繙く人は、其の中に「吹流天竺物語」・「南海紀聞」といふ二つの物語を見出すであらう。前者はその筆者を明かにしないが、筑前國唐泊浦孫七直述（孫七とあるのは孫太郎と同人であるが、何れが正しいのか自分は知らない。）とあり、後者はとりわけ福岡の蘭學者青木興勝によつて、直接孫太郎から聞いたといふ事實が記されたものである。自分が今得た口書といふのは、漂流以來九年振りで長崎に送り返された彼孫太郎が、長崎奉行所から福岡藩へ引渡された時の口上書であつて、其の奥に長崎奉行所から藩へ宛てた引渡し狀と、藩から更に浦奉行へ宛てた注意書とが附錄されてゐる。元來この漂流談は種々の書物に依つて傳へられてゐるやうであつて、自分の今得た材料が、果して那邊まで信じ得べきやも解らないのであるが、其の孫太郎の口上書といふものは、此の漂流に關する顚末を頗る簡明に表してゐるといふ點を長とすべきものであらう。

三

時は寶暦十三癸未年の冬（「吹流天竺物語」には十二年とあつて、物語のすべてが一年づゝ早いことになつてゐる。）筑前唐泊の船頭十右衞門・水主孫太郎等總べて二十人、藩の御倉米を積立て大阪藏元へ運び、更に豐後中津の城米積みに下つて江戸に登せ、翌明和元甲申年の七月、奥州津輕の材木積みに罷り下つて、月末頃彼の地を發船、八月九月大風の時節を仙臺小淵港に避けて、十月半ば同所を出帆した處が、恰も鹽屋岬で西風を食つた。とう〳〵吹流されて十一月十二月を波上に漂ひ、破れた船に命からがら翌二乙酉年正月初頃、辛うじて一島に辿り着いた。それが南海のカラカン島（ボルネオの南、ジャワの東北にある小さいカルクン島）であつた。そこで土人に捕へられて半年ほど勞働してゐる内、乘組二十人の中死ぬ者もあり、外へ遣られる者もありして、孫太郎等七人はソウログ（ボルネオ島の西部サラワク）に賣られ、こゝに又半年ほど過ごして、更に孫太郎と外一人はバンジヤルマハシ（ボルネオ島の南部バンジヤルマッシン）に連れゆかれ、支那商人に賣飛ばされた。仲間の權右衞門はこゝへ來る船中で果てたので、孫太郎一人七個年ほど奉公してゐたが、遂に主人たる支那商人の同情によつて日本に歸る機會が惠まれ、明和八辛卯年五月ジヤガ

タラ（卽ちジヤワのバタビヤ）に着き、それから日本航路の阿蘭陀船に載せられて、長崎に歸着したのが其の年の六月十六日であつた。寶暦十三年家を出てから正に九年目であるといふのが此の話の梗概である。

四

この話を讀み了ると、聯想は自分を驅つて、ゆくりなく萬葉集に見える志賀の白水郎荒雄の物語に牽いていつた。時は神龜年間の事である、太宰府の命に依つて筑前國宗像郡の民宗形部津麻呂を以て對馬送粮船の舵師とした。然るに津麻呂は年齒已に老衰して渡海に堪へなかつたので、糟屋郡志賀村の白水郎荒雄の許に行つて、自分の爲に代つて舵師とならんことを賴んだ。荒雄は平生の好から俠氣を出して快諾し、早速肥前國松浦縣旻樂の崎から發船して對馬をさして海を渡つた。忽ち一天暗冥となり暴風が雨を交へて吹募つたので、遂に海中に沈沒して、荒雄等もあはれ不歸の客となつて了つたのである。

惟ふにかうした難破の物語は、こゝ北筑の沿岸、玄界灘、その對馬水道や朝鮮海峽には幾らもあつた筈であつて、續日本紀を見ると寶龜三年十二月の條に、上村主墨繩等が太宰府から年糧を

對馬に送らうとして、俄かに逆風に遭つて船が破れ人が沒したといふ前と同種類の話が見えてゐる。先頃唐泊の近海から奈良時代の酒甕らしい陶器が引上げられたとか聞く。眞僞は知らないが、それを聞くにつけても、古代からこゝ朝鮮航路の難破といふことが思ひやられるのである。

松浦佐用媛領巾振山の話は誰も知つてゐる所であるが、顯昭の「袖中抄」には筑前國風土記にあるといつて引いてゐる大伴狹手彦の話がある。之は「打上の濱（東松浦郡名古屋浦）の所に曰く」としてあるから、多分肥前風土記の誤りであらうと言はれてゐるが、何れにしてもそれは玄界灘に起つた事實である。大伴狹手彦連が任那へ渡るべく船に乘出した處が、船が海上に停つて進まない。船中石勝といふ者があつて推測して言ふには、御舟の行かないのは海神の御心に由つてである。海神は恐らく狹手彦連の伴れてゐる妻那古君を慕つてゐるに相違ないから、此の君をこゝに止めたならば渡海することが出來るだらうとのことであつた。その時狹手彦が那古君と共に歎いて見たが、結局皇命を忽にすることを恐れて、涙を呑んで恩愛の情を斷ち、菰の上に其の妻を載せて波の上に放ちやつたといふのである。

この話は、日本武尊御東征の際、上總の海に於ける弟橘媛の傳說と同一系統のものらしく、海上航路の故障に當つて海神の心を宥める爲に、弱い女性が人身御供にされた事は、上古の習俗であつたらしい。海に於ける哀話は亦こんな所にも見えるのである。

五

思はず聯想が駛り過ぎたが、難破、漂流、而して其の犧牲、とかく海には哀話が多い。漂流談を讀んで見ると、「吹流天竺物語」といはず「南海紀聞」といはず、此の種の作物の通有性として、一種の冒險的壯快味に加へて、異鄉に於ける珍奇な見聞が與へる好奇的興趣をそゝることを行るのが常であつて、とかくかゝる事實を奇談視してゐるものが多いが、孫太郎などの夢のやうな不思議な運命を思ふと、其の裡面に宿る深刻な悲哀を見出さずにはゐられない。他人の爲に命を棄てた荒雄や人身御供になつた那古君の上に至つては言はずもあれである。

近來「波のうへ」とか「流るゝまゝに」とか、又は「破船」などといふ言葉が、頻に物語の題名に用ゐられてゐるが、人間苦患の或物が海の生活のそれらに譬へられるのでも知れることであるが、眞に海に生きる人々のそれらは、決して甘つたるい事ではない、冗談三昧ではない。眞劍な命がけなのである。「板子一枚下は地獄」といふ命がけの生活を思へば、そこに言ひ知らぬ哀愁をそゝる。「一丈五尺の艪がしわる」とか、「波に搖られて鯛を釣る」とか言つた民謠子の聲に

は、一種の壯烈さもあらう、或は一種の可笑味もあらう。しかし其の中には限りない悲しさの基調をもつてゐる。まして一たび其の妻子の身となつて見るならば、そこに又言ひ知らぬ悲痛なものがある。自分は萬葉人が海ゆく夫を送つて、

君がゆく海邊のやどに霧立たばあが立歎く息と知りませ

と言つたのを思ふ。更に藤村の「蜑のなげき」が、

もし海いかり狂ひなば、
我この岸にひれ伏して、
いと〳〵深き溜息に、
その暴風をぞなだむべき。

と祈つたのを思ふ。更に〳〵荒雄の妻子が、

荒雄らは妻子の產業をば思はずろ年のやとせを待てど來まさぬ

と泣いたのを思ふ。「吹流天竺物語」は其の結尾に於て、

同月六日の夜、唐泊の浦に九年ぶりにて歸りしに、わづか九年の其の間に、替り易きは飛鳥川、婦は待兼ねて入夫を招き、或は子を連れながら他村に嫁し、老は殘りて若きは死す。

と記してゐるが、（但し孫太郎自身は兩親妻子もなく兄だけがあつたらしい。）かうして或は西鶴が「懷硯」に書いた屋島の漁夫久六の話の如き、イノツク、アーデン式な悲劇を更に生み出さないとも限らないのである。

自分はつい數日前本紙に載つた和蘭の風景畫家ヤコブ、マーリスの「歸舟」といふ畫を見たのであるが、幸に誇りつゝ歸り來る舟人の心の底に、喜んで迎へに出た浦人の姿の蔭に、何とないうら悲しさがにじみ出てゐるのを覺えたのである。

六

海は眺めて美しいものである。其の碧い色は我等の氣分を明るくしてくれるかも知れない。其の濶やかな面は天空と共に我等の心界を開いてくれるかも知れない。しかし渡つて見てわびしいものである、人を渡らせて憂への湧くものである。若しそれ一たび渡津海の神の呪に遭つたら最後、そこに多くの哀話は生ずる。古來海洋に關する物語に悲しいものの多いのも無理はない。

「一に玄海二に遠江三に日向の赤江灘」とか船乘りによつて歌はれた玄界灘。自分は其の碧い玄界灘を見やる毎に、文永弘安の役の壯烈さを想はないでもないが、又古來その荒浪に生きなけ

ればならなかつた人々の哀話を思ふ。さうしてそこに殘された海の物語を更に多く聞かんことを欲するものである。

自分がこの小敍述を書終らうとする時、偶〻新聞は霧島丸や甲子丸の遭難を傳へた。霧島丸が西戸崎を出て南洋航路に上つたのだといひ、甲子丸が朝鮮海峽に於ての坐礁であると聞くと、我が土の荒雄の傳說や孫太郎の物語に全く緣のない事でもないやうに思はれて、今更に哀愁の深いものがある。

（昭和二年四月、福岡日日新聞）

銷夏漫筆

鐘の岬を訪ねて

一

灣線の終點宮地嶽から、珍しい鐵道馬車に乘つて、津屋崎に着いたのは朝も彼是九時半を過ぎてゐたらう。七月十七日の津屋崎の町は、恰も博多擬ひの山笠で、可なりの賑やかさであつた。こゝから更に自動車を驅つて、昔の所謂有千潟や勝浦潟——隨分桑滄の變をなしてはゐようが——を走り、神湊へ下りると、もう是から北へは自動車は出ないといふ。

江口から上八まであまり人に出逢はない松林の間を、一里餘りも只自分の靴の音を自分と聞きつゝ辿つて、正午近くになつた。ちらちらと木の間に地の島や大島の影が見え出したと思つたら、直ぐ目の前に岬村が現はれて、其の北から西へ延びた砂洲の鼻が小山になつてゐる。可愛らしい

饅頭形をして青々と海中に突出した小山になつてゐる。鐘の岬である。

それから二十分後に自分は其の饅頭形の織幡山に登つてゐた。織幡の社の後から更に山頂を西北へ下りると、樹木の茂みから出て、海の面が一眸の中に開ける。直ぐ前に見えるのが地の島である。一里あるといふこの岬とかの島との間は、潮流の工合に由つてか水準が違ふと見えて、水面にけざやかな一線を劃して、玄海灘と響灘とを仕切つてゐるのも珍しい。大島は地の島に半ば隱れて、夏潮の潮曇りとでもいひたいやうに、ぼんやりと霞んでゐる。こゝから沖の島も見えるさうであるが、何分糢糊としてゐて、殊に視力の弱い自分には見附けられなかつた。海は極めて靜かであるが、出てゐる船もあまり見えない。

二

なる程この鼻は昔の海路には重要な地點であつたに相違ない。本州卽ち大和から來る船は速鞆の瀨戸を出て、洞の海や岡の水門を西へ進んで、筑紫に着くべく始めて南下する目標であつたらう。又筑紫から上る旅には、こゝから楫を東へ向けて、故鄕に別れを告げる場處であつたらう。萬葉集に

ちはやぶる金の三崎を過ぎぬとも吾は忘れじ志賀の皇神

と歌つてあるのは是である。自分は今、ゆくりなく上代の海路の旅を懷ひやつて見た。この歌は「吾は忘れじ」だといひ、「吾(あ)をば忘れじ」だともいつて、訓方に兩說あるやうであるが、いづれにしても筑紫人が東に上つた船旅であることは動かないのであつて、其の「金の三崎を過ぎぬとも」と言つたのは、如何にも此の岬がそれらの人々の爲の大事な地點、特に故山に訣別する場處であつたことを物語つてゐるのである。

京都から下つた人でこの岬に跡を止めてゐるのは源氏物語の玉葛の君である。頭中將の子でありながら、母夕顏のあゝした果敢ない死から、乳母の許にのみ育つて、父を知らず母の死んだのさへ知らない玉葛が、四歲の時乳母の夫たる太宰少貳に伴はれて、乳母や其の娘たちと共にはる〴〵九州に下らなければならなかつた運命よ。この岬を通つていよ〳〵九州へ着くのだと思つた一行は、萬葉集のかの歌を「われは忘れじ」と口吟んで、今更のやうに玉葛の母夕顏の事を思ひ出し、つく〴〵玉葛の君のかうした漂浪を悲しんだ。娘の一人が

船人もたれを戀ふとか大島のうらがなしげにこゑの聞ゆる

といつたのは、あのぼんやり霞んでゐる大島ではないか。東の方を見やると、岡の水門のあたり

から遙かに本土の山々が雲煙漂渺の間に見える。源氏物語には水手どもが荒々しい聲で「うら悲しくも遠く來にけるかな。」と唄つたので皆差向つて泣いたと書いてある。さて太宰府へ行つてからの彼の君よ。任果てた少貳の死に次いで、嫌らしい肥後の大夫監の言ひより、遂に少貳の子豐後介が母親や妹等と共にこの君をつれて都へ逃げ上ることとなつた。松浦潟から船に乘つた時のこの君は

行くさきも見えぬ波路に船出して風にまかする身こそ浮きたれ

といつて船にうつ伏して了つた。かうして再びこの岬を通つたのは、この君も已に二十の初夏であつたのである。自分は北からの輕い海風が額の汗を吹く心地よさを貪りながら、良久しく旅にさすらふ人の身の上を思ひやつて見た。

三

岬の鼻を西に下つて、潮の引いてゐるのを幸ひ、磯を傳つて織幡神社の鳥居下に出た。砂濱に桃子形の巨大な石が据ゑてある。高さ九尺あまりもあるであらう。前に太い鐵索の卷捨ててあるのを見ると、聞かずしてそれが數年前引上げたといふ沈鐘の本體であることを知つた。此處の沈

鐘の傳說は古くからの事と見えて、細川幽齋の「九州道の記」――天正十九年――にも記してあつて有名なものである。この傳說が果して地名を生んだものであらうか、自分は寧ろ地名がこの傳說を作つたもののやうに信ずるが、それは何れにもせよ、この鐘の引上げは無用の興醒ましである。鐘は永劫に海中にあらしむべきであつた。さうして土人をして久遠にこの傳說を談らしむべきであつた。それが何の爲にか引上げられて了つた。而もそれが石であつた。世人の多くは之が爲に、何の埒もないと言ひ去つて、情趣豐かであつた空想の說話を可惜壞して了つたのである。

自分はつい先程まで岬頭に立つて、かの玉葛の君の事が物語中のものであることを打忘れて、萬葉集中の歌などと同じく實在したことのやうに考へて來た。それも思へば錯覺である。しかしさう考へさせる錯覺の世界の存することが人間にはこの上ない貴いのである。さうした貴い夢を也之を現實の――それすら眞の實相か何かわからぬ――世界にのみ喚醒まして、如何にも分別がましく發見がましく美しい想像を否定して了つた。何といふ索寞だらう、何といふ殺風景だらう。

橘南谿の西遊記續篇には、彼が博多崇福寺逗留中、或人の物語として、當國の太守が代を重ねて一再この鐘を引上げようとしたが、いつも荒ましい風波に妨げられて、どうしても果すことが出來なく、鐘は龍神のものとして永久に海中にあるのであることが記されてゐる。之を引上げた

ことが果して現代人の強みにでもなつたのであらうか。……

二時半頃こゝを出た東郷行きの乘合自動車――實は自分の外に誰一人乘合のない――の中で、自分はこんな事を一人思ひつゞけてゐた。

（昭和二年八月、福岡日日新聞）

古京幻想

一

丁度一年ぶりで奈良に歸つた。歸つたと云つても、そこにはもう自分を迎へ入れてくれる家がなかつた。そこを懐かしい故郷のやうに感じながら、而も宿屋に泊らなければならない旅人としての自分を見出しては、流石に或寂しさが湧く。猿澤池畔から五重の塔の下に出て、興福寺の寺務所の前を過ぎりつゝ、何となくこのそぐはない心持に領ぜられながらも、やはり青芝が足裏に與へる輭かさは、えも言はぬ懐かしみを覺えさせて、歩みは自ら博物館へ向つて運ばれた。

遠い旅を億劫がるやうになつた身を呵して、態〻暑い眞夏に自分をしてこゝを訪れさせたのは、

全くこゝの博物館に仕殘して去つた仕事があつたからである。いやその仕事を仕上げるのもだが、其の爲といふよりはむしろ一年間古い物を見ることが出來なかつた餒ゑからであつたとも言ひ得る。古い物が夢見させる美しい幻想に耽ることが出來なかつた渇ゑからでもあつたと言ひ得る。奈良は到る處に古い物を見出すことが出來、而も其の古い物が皆麗しい昔の世を夢見させてくれるからである。

今日は日曜日で、博物館事務所は休みであるのに、館長が特に自分の爲に便宜を與へてくれて、日直のMさんに凡べては命ぜられてあつたのである。自分の席はMさんの居る事務室の一隅に取つてあつて、餘り日の直射しない而も隣の館長室を通して心地よい風の來る所である。Mさんが今本館の方から恭しく持つて來て、自分の前に置いたのは古經卷三卷。これが自分のこの兩三年調べて來た西大寺藏の金光明最勝王經十卷の内であつて、自分の仕殘して去つた仕事と言つたのは、卽ちこの三卷の經の再調査であつたのである。

二

この經は天平寶字六年百濟豐蟲の願經であつて、奈良朝寫經の代表的のものの一つであること

は勿論、平安朝初期のものと見られる白點が十卷全部を通じて施されて――すべて訓讀されて――ゐることは殊にこの經の珍とすべき特徴であらう。自分はこの經を開く毎にいつも必ず萬葉集のことを聯想するのであるが、それはこの經の書寫の時代が萬葉集の最新歌の年に極めて近いことと、願主の名の豐蟲といふのが、萬葉詩人に高橋蟲麻呂をはじめ蟲の字のつく數人を思ひ起させることとに由つてである。いな〳〵抑〻經そのものが萬葉集とは切つても切れない緣があるのであつて、集の註釋を讀んだ誰しもが、卷の五に於ける山上憶良の「蓋聞四生起滅」といふ序の「四蛇爭侵」や、更に有名な「思子等歌」の序などの出典が此の經に在ることを知つてゐるだらう。……

自分は今卷の三「滅業障品」を開きながら、かうした聯想を繰返しつゝ、光線の射し工合に由つては極めて見にくい、その白點をためつすかしつ辿つて之を讀んでゆくのである。なか〳〵容易く讀み續けられない個處などもある。殊に一年餘り遠のいた爲に、讀方の速度が大分遲鈍になつたのであるが、しかし再度の調査である爲に比較的捗つて、午後三時頃までか〻つたら、この三の卷だけはほゞ方附きさうである。自分は元來佛教の經典には甚だ暗いのであるが、此の經卷には隨分說話として面白いものがあり、時には歌劇にでも仕組んだらよささうな場面にさへ行當

るので、さうした內容上の趣味に引かれながら、かうして日本讀みに讀んでゆく仕事を、これまで相當長い間續けることが出來たのであつた。

三

現に今も讀んでゆく內に、こんな所が出て來た。

我(佛)爾時に女人の身と作れりき。福寶光明と名つき、第三の會にして世尊に親近したてまつりて、是の金光明經を受持し讀誦し、他の爲に廣め說き、阿耨多羅三藐三菩提を求めむとの故になりき。時に彼の世尊、我が爲に授記したまはく、此の福寶光明女未來の世に當り佛と作ること得む。號をば釋迦牟尼といはむ、如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人佛世尊といはむとのたまひき。女身を捨てて後にして是より以來四惡道を越えて、人天の中に生れつゝ上妙の樂を受け、八十四百千生に轉輪王と作りつゝ、今の日に至りて正覺成ること得て、名稱れ普く聞えて世界に遍滿すべしとのたまふ。……

といふのである。畏けれども光明皇后には女性の御身にあらせられて、夙くこの福寶光明女といふ御佛を以て、御親ら擬し給ひ、深く信に入らせられたものではなからうか、と思はれることで

ある。自分には御名の光明さへもこゝから出てゐるやうに思はれてならない。

この經の卷の六に「四天王護國品」といふのがある。曾てそこを調べた際に、國王がこの經を恭敬供養する功德を記してあるのを讀んで、光明皇后が聖武天皇に勸め奉り給うて、金光明四天王護國之寺たる東大寺を建てられた譯もわかつたやうな氣がしたし、國王のこの經を聽受する時の莊嚴の次第を記してあるのを讀んで、彼の大佛落慶に當つて、聖武天皇が行はしめられた供養の御儀式が、全然この經に見えるそれを實現されたのだらうことを想像したのであつた。かう考へられるとすると、奈良朝に於ける萬葉歌人——無論聖武天皇にも光明皇后にも萬葉歌人におはしますが——ことに憶良等の如き人の佛敎だねが、この經から出てゐるのも無理はないこととのやうに思ふ。……

四

自分は今暫く書取る筆を止めて、奈良朝の佛敎、といふよりもそこに現たり建てられた美しい佛の御國を思ひやつて、天平の世の麗しい夢見に耽つてゐた。一しきりしきる蟬しぐれに我に返つて、又白點のためつすかしつを續けてゆく。日直のMさんはワイシヤツ一つになつて、机に向

つてゐるが、徒然に苦しむらしく時々室を出ては小使部屋の方へゆく。自分も亦その度毎に顏を上げて、修理室の向ふに黑くそゝり立つ古い杉の茂みを見上げた。それはずつと春日の森までつづくのであるが、其の老杉が翠の芝生に深い陰を落して、如何にも往にし世を想はせるにふさはしく森閑としてゐる。

谷の家に歸つて

一

緣先の簾を卷上げて風を喚ぶと、蚊遣線香の煙がゆるくたなびく。香煙の縷々につれてぼんやり過ぎにし旅路の夢を追ふ。奈良の十日間は近來にない樂しいものの一つであつた。しかし旅は流石にあわたゞしかつた。たとひ借家住居にしても、こゝ谷の家に歸つてからして机に憑つて見ると、亦他に得られない安易さを覺える。

自分は豫ねてから、この夏休みを三分した最後の一つをこゝ谷の家の籠居と定めておいた。而してそれにかうした安易な心持で、讀むべき多くの仕事、書くべき多くの仕事を課てて置いたの

である。元來この計畫を立てた六月の末には、まだこゝ谷の家の周圍が、籠居には比較的好い事情に置かれるかと思つてゐたのに、此の頃俄かに家の南に接して、而も自分の部屋に面して新築の普請がはじまつて了つたのだ。

二

自分はこゝに移つて來て丁度一年になるのだが、來た當初家族の者が寂しさを訴へたほど隣に離れてゐた住居は、それだけ極めて閑靜であつた。却つて馴れない街の中に急にまじることから逃れた心安さもあつた。而して自分がこの住居に最も嬉しかつた一つは、南の軒に迫つて——無論籬で隔てられてはゐたが——可なり大きな一叢の竹林のあつたことであつて、暑い時に移つて來た自分たちは、この竹叢の夕そぎを此の上なく涼しく感じ、夜の雨の音などはわけても淸々しく聞いたものだ。その上この藪の下草の丈高に伸びたのは荒れた野良のやうにも見えたが、そこに鳴くくさ〴〵の蟲の聲が眞晝間も夜もたえず聞えてゐて、それが亦此の上なく自分を喜ばせた。抑こゝ谷の閑けさを破つた最初のものは、この春開通した城南電車であらう。たとひ出歩きには多少便利になつたとしても、それが谷をとよもしかへす音は餘り有りがたくはない。しかし

其の電車はしやうがないとしても、せめてこの夏はその涼しいさやぎでも聞いて本を讀まうと思つた竹叢が、七月の初から急に掘りかへされてそこに家が立つといふ。十日から用材が運び込まれ、目を遮つて大工小屋が建てられる、毎日槌や鑿の音がつゞく、地固めが始まる、やがて建初めとなる。其の賑やかさといつたらない。

しかし時は人に馴れるといふことを與へる。馴れるといふことが數日ならずして其の賑やかさを別に苦にしないやうに自分たちをしてくれた。殊にかうして夜になつて、普請工場の狼藉さも見えず、宿番の大工等の話も絶える頃になると、新しい木の香を送る風が、掘殘された數竿の竹に生ずる。やつぱり吾々の世界は十分にあるやうな氣がする。さうだすべてが馴れるといふことだ。移つて來た當時に果してこんな風であつたら、とても居られたものではない。かくてもかうして堪へられるのは、それだけ此の家に馴らされたのだ。さうしてさして良いとも言はれない而も他人の家を「我が家」と思ふやうになつたからである。

三

馴れるとは對象を我の領域にすることである。「彼」であつたものを「我が」にすることであ

る。昔太宰府に來て旅愁に泣いてばかりゐた帥卿大伴旅人は、人前の御挨拶に

やすみしし我が大君のをす國は大倭もこゝも同じとぞおもふ

と歌つたが、自分の今は正直の處もうすつかり同じだと思ふことの出來るやうになつた。現に今自分が披いて見てゐる「萬葉考」は、これも去年こちらへ來てから間もない九月半に圖らず手に入れたもので、福岡唯一の國學者ともいふべき靑柳種信翁の書入のある本であるが、かうした古への學者にまでも何となく鄕土的親愛が湧いて「我が柳園翁」とさへ呼びたくなつて來た。

自分が翁の名を知つたのは、十數年前自分のまだ學生であつた頃、京都大學の圖書館で、伴信友の校藏書の中に「瀛津島防人日記」――寫本であつて信友の書入があつたと記憶してゐる――を見出した時が最初であつたが、當時は此の書に對しても亦著者たる翁に對しても何等の興味が湧かなかつたのであるが、こちらへ來て此の一年の間に、相當翁に就いての知識を大きくしてもらつたし、つい此の間は其の奧津城に詣でたくなつて鹿原山をさへ訪れたほど、少からず熱心になつて來たのである。

自分は今萬葉集十六の

いゆしゝを認ぐ川邊の若草の身若きがへにさねし兒らはも

といふ歌の認の字をツナグと訓ずることに就いて調べて見たい爲に、この「萬葉考」種信本を出して來たのであつたが、此の本には丁度この處に、

種信云、筑紫の山家の獵人等矢つけして逃げゆきし鹿の足あとを尋ねてつたひ行くを鹿のあとをつなぐといへり。しかれば此歌にいるししをつなぐとよめるは矢つけせし鹿の跡をつなぐにてよくかなへり。

といふ翁の書入があるではないか。翁の書入であることが、今の自分には此の上なく貴重に考へられるはもとより、筑紫にこの古語の殘つてゐることが、恰も自分の事ででもあるかのやうに誇らしく感ぜられるほどになつた。

四

あゝ丁度一年！　自分の爲にはそれが馴されの一年であつた。昨年來た九月初に二人の子供を彼等の爲には全く知る人のない小學校に送つて歸つた時、彼等が暫くの間は定めて銷沈するであらうことを窃かに恐れたが、彼等は二三日にしてすつかり新しい學校に馴れて了つたらしく大元氣で通ひはじめ、一週間も立つか立たないのに、何時かこちらの言葉を使ひ出したのに驚いて、

子供の順應性の強いのを羨んだこともあつた。それに、こちらの言葉がもう此の頃は自分の耳にも耳立たなくなつて了つた。……

宿番の大工等はとうに寢しづまつた。先程までしてゐた上のAさんの家の女の話聲も聞えなくなつた。靜寂な谷の暗に、唯一の覺めたもの顏をして十分毎に電車が往き來してゐる。

（昭和二年八月稿）

歳次聯想

亥の年を迎へて

一

我が福岡の歌人大隈言道の歌に、

何を書く心はなきに筆とりて書く事なきに筆を執りつる

といふのがある。この歌は家集にあるか如何か知らないが、先年林大壽氏から贈られた「筑前名家短册」といふ繪葉書中に、同氏所藏の短册として見えるものである。翁晩年の枯れ切つた筆であつて、萬葉書きの立派なものである。新聞に强ひられて何か書かうと言つた自分は、實際まだ書くことのない癖に漫然ペンを取つたのだ。書くことのないことそれ自身を歌にした名匠言道の才を羨むのであるが、書くことがないながら、今の場合は只何でもかまはず書いて見るより外仕

方がないのである。

この歌の「筆とりて」について思ひ出されるのは、自分等の幼少な時分、歳首には必ず試筆——いや試筆などいふものではない、書初めといふものを親たちから強ひられたことである。それは、

吉書始

あら玉の年の始に筆とりて萬の寶我ぞかき取る　　某ノ年男

といふ形式に半紙に書いて、惠方棚に張下げたものである。「萬の寶我ぞかきとる」は少し鄙俗であると思ふが、斯様な風習の失はれて了つた今から考へると、かうした些細な事も懐しい一つである。

試筆の事では奈良に住んだ當時を想ふ。假名文字研究の權威者大矢透博士は、大正八年から研究の爲奈良に移住して來られて、同十二年までゐられたが、博士は書も畫も已に一家をなしてゐられた人であつて、歳首毎に必ず試筆をして持つて來てくれられたものである。多くは其の年の干支に因んで、半折に淡彩に書いた墨畫の上へ、歌の賛をしたものであつた。今自分の手許に殘つてゐるものに、十一年戊の年のものと、翌十二年亥の年のものとがある。其の亥の年の繪は深

谿の奔湍を山猪の超躍するといふ誠に勢盛なところであつて、賛には、

癸亥元旦試筆

瀑津瀨の水のとばしり怒り猪のかけるてふ年筆とるわれは　　七十四老透爲

とある。嗚呼それからもう十二年になつた。博士は已に八年前に物故されて、この試筆も其の形見となつてしまつた。博士は實に走り猪のやうな氣象の人であつて、三十年間脇目も振らず假名研究に從事して、只管其の學業に突進した意氣が、この繪や歌に表れてゐて、博士の風丰がそゞろ面影に立つのを覺えるのである。

今年の干支は乙亥といふので、既に舊年から猪突といふ言葉が彼處此處に用ゐられ出した。誠に元氣に溢れた言葉であつて、非常時日本の國民に取つては、この上ない好標語であるであらう。「猪突稀勇」といふ語は漢書に見えて、彼の王莽が命じたものだが、支那では餘りよい意味に用ゐたのでないらしい。しかし其の單純に突進するを知るのみといふ處が、自分はこの上なく好きである。殊に我々學問に從ふ輩は、左右を顧慮せず、自らの研究に突進するのが、其の役目である筈であるからである。

平家物語に義經が攝津の渡邊から讃岐の八島に渡らうとする時の記事、所謂逆櫓の事がある。

歳次聯想

逆櫓とは櫓を艫舳ともに立て、逃げる場合にも備へたものであつて、梶原景時の主張する所であつた。然るに大將義經は軍の首途に逃げ支度は緣起でもないと言つて斷然聞かなかつた。その時梶原の義經を罵倒した語がかうであつた。

好き大將軍と申すは、駈くべき所をも駈け、引くべき所をも引き、身を全うして敵を亡ぼすを以て好き大將とはしたる候。さやうに片趣なるをば猪武者とて好きにはせず。

是が所謂猪武者の典據である。しかし其の時の義經の言草が亦痛快であつた。

猪鹿は知らず、軍は唯平攻めに攻めて勝ちたるぞ心地よき。

まことに氣一本な義經の氣前が嬉しい。日本外史は、已に身命を賭してゐたこの義經を憫んだが、武人は當に然あるべきだ、否武人のみならず、何人もさうあるべきである。少くも我々學問に從ふ輩はさうでなくてはならない。今の世は梶原のやうに「駈けんと思へば駈け、引かんと思へば引き」といふ所謂駈引きが何れの社會にも多過ぎると思ふ。何事も只平攻めに攻めて行くことが、最も能率の上る事だと自分だけは考へてゐる。

二

徒然草には

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつの所作も、言ひ出づれば面白く、恐ろしき猪も、臥すゐの床といへばやさしくなりぬ。

といふ一段がある。元來我が國に於ける猪の、古い書物に見えるものは、皆「怒り猪」であつて、古事記の仲哀天皇の條に、香坂・忍熊二王の反を謀つた時、香坂王を咋ひ殺したのも大きな怒り猪であり、應神天皇の條に、皇兄大山守が宇治山に捕へようと言つたのも忿怒の大猪であり、又書紀の雄略天皇の葛城山御獵の條に出て來たのも嗔り猪とある。拾遺集は既に「いかりゐの石をくゝみて嚙み來しは」など隨分烈しい處を詠んでゐる。されば徒然草の「恐ろしき猪も」は尤もながら、「臥す猪の床といへばやさしくなりぬ。」とは少々去勢してしまつた憾があるが、之は和泉式部が「伏す猪の床のいをやすみ」と、彼女の奇拔な才ではあつたが、この物を一朝にして艶めかしくしてしまつた以來のことであつて、和歌では猪を全く睡りに封じてしまつたのである。

歳次聯想

それ故川柳子は

猪は起きると歌に讀めぬなり

と笑つたではないか。

後京極攝政良經は

おどろかぬ伏す猪の床のねぶりかなさらでも夢にすぐる此の世を

と詠じたが、之も歌や悟りには勿論よからうけれども、睡りや夢ばかりでこの世は通されない。我々は何處までも現實の世に覺醒して働き續けなくてはならないからである。人々よ、今年は臥す猪の床だなどと、身も心も呑氣に構へてゐたら、忽ち四方から怒り猪が牙をむき出して突入し來ることを忘れてはなりませんぞ。ふす猪の歌では、

はた山のをのへつゞきの高茅に伏す猪ありとや人とよむらむ

といふ藤原爲家の詠などが面白い。無論作つた歌ではあるが、客觀的に讀んで迂曲してゐない處が好い。而も今にも其の高茅の中から醒めて起上つて來る猪を思はせて、何となく豪宕な趣を搖曳させてゐるのがよい。今や非常時日本は高茅の中の睡りから目覺めて力一杯猪突する人々を要求してゐるのではあるまいか。

「猪も七代目には豕になる」といふ諺がある。それは退化か進化か知らないけれども、どうせよい譬ではないであらう。とにかく我が國では、豚のことをヰノコといふやうになつたが、其の初のヰノコは眞の猪の子を言つたものであらう、彼の「亥の子の祝」のヰノコはブタではない。

「亥の子の餅」は已に源氏物語に見えてゐる。葵の卷に十月初亥の夜に、源氏君が麗人紫上に亥の子の餅を贈つたが、引續いてすぐ翌日の子の日に、三日の餅を造れと、家臣惟光に命じた時、

さても子の子は幾つか仕うまつらすべう侍らむ。

と惟光の洒落れたあたりは面白く讀まれる。

蜻蛉日記の著者は、圓融天皇御誕生の御五十日の祝に猪の子の繪を描いた上へ、

萬代を呼ばふ山邊の亥の子こそ君がつかふる齡なるべし

と書いたとある。畏きことながら今の大御代の皇太子殿下の、御健かに第一御誕辰を迎へさせられた昨今に思ひ擬へられるのである。

三

「刻」といふ字は亥に立刀を加へたものであるが、爾雅といふ書物には、豕の歩いた跡を刻といふとの說がある。それとの前後は知らないが、やがて木に彫ることをも刻といふことになり、又日時計の度盛りから時をも刻といふやうになつた。更に痛也といふ訓があつて、身を削る意からであらうか、苦しむことをも刻といふ。我々學究は寸刻を惜しんで、刻本を見るのが仕事であ

つて、それを刻苦してやりさへすればよいのであらう。

さて今の印刷に刻といふ名は適切でなくなつたが、昔の書物は眞の刻であつて容易ではなかつた。印刷文化の進歩は喜ぶべきに相違ないと共に、一面其の餘弊とも見るべき無用の出版さへ多くなつた。之に比較して昔の刻苦した刻版は貴ぶべきものであるし、更に刻版の出來なくて遺つてゐる製作物をも埋もらしてはならない。古來學者が古刻本と古寫本とを尊重したのは理由のあることである。

昨年の福岡は古版本・古寫本に對する認識に於て記念すべき年であつた。十一月初旬に福岡縣書籍商組合・福岡日日新聞社主催で開かれた古版本の展覽會が、この種の會に稀に見る盛會であつたことは學界の爲慶すべき事である。自分は生憎旅行中であつて見るを得なかつたのは、くれぐれも遺憾であつた。次いで十二月下旬には筑前の碩學青柳種信翁の百年忌記念展覽會が、福岡縣立圖書館に開催されたことである。翁の著述は當時學界の權威とすべきものでありながら、生前は勿論、現代まで殆ど上木されなかつたのであつて、其の自筆稿本や轉寫本が一堂に集められたことは、近來の偉觀としてよい事である。

種信は本居宣長の門人であるが、其の師宣長は常に古書の貴ぶべきことを言つた人であつて、

其の隨筆「玉勝間」には「古書どもの事」數條に亙つて、この事を細說してゐる。先づ

ふるき書どもの世に絕えて傳はらぬは、萬づよりも口惜しく歎かはしきわざ也。

と書出して、釋日本紀や萬葉仙覺抄などの時代までは、多くの古書が遺存してゐたやうに見えるが、應仁の亂によつて其の多くを滅ぼして了つたのは殘念である。それも當代（宣長時代）のやうに地方に學問する人が多くゐて書物を所藏してゐたならば、之ほどには絕えなかつたであらうと歎き、地方の書として豐後風土記や出雲風土記の殘つてゐる事を賞讃し、記・紀・萬葉のよくも傳はつたことを有難がつてゐる。第二に日本書紀は誤りの多い版本一つのみで、他に古寫本も稀だから校勘の困難なこと、第三に續日本紀以下の國史も善い古寫本を選んで上版すべきことをいひ、第四に版本・寫本の長短を論じた後に、當代諸侯の家に殘つてゐる古寫本を、學者に公開して善校定本を作らせて、天下に廣めたいことを力說して居る。更に第五に翁は書物道德ともいふべきものを書添へてゐる。曰く珍書を得た時は、其の親疎を問はず、互に貸合つて、見せもし寫させもしたいものだのに、世には之を獨占して自慢してゐるものもあるのは、學者として最も卑劣である。但し不便な遠地へ貸してやる際は、途中で遺失したり借用者が死んで返らなかつたりすることがあるから、豫め注意に注意を加へた上途中を用心し、必ず返るやうに約定せよ。凡

そ他人の書物を借りたならば、速かに見て速かに返却せよ。それは書物に限つたことではないが、書物は殊に長びき勝ちなものだから、心得べきであると戒めてゐる。さて最後の第六に

人に借りたる本に、已に讀みたる境に、折目つくるは、いと心なき仕業なり。本に折目つけたるは、直る世なきものぞかし。

と言つた如きは、如何にも翁の愛書精神の溢れであつて、周密而も適切な注意といふべきである。凡そ古書の貴重すべきを說いてある言葉であつて、翁のこの書のこの條に若くものはないとさへ考へられるのである。

我が九州は邊土であつた爲に、往昔は比較的書物を得ることが困難であつたらう。本居門下の九州の人で、刻苦して古書を自寫したものが二人ある。其の一人は卽ち筑前の靑柳種信であつて、他の一人は肥後の帆足長秋であつた。されば種信に自著の多かつた上、他人の著書の自寫が可なり多數に殘存してゐるのは貴ぶべき事である。今年も亥の年に因んで古刻は勿論、古寫の珍しいものを、昨年のやうに見せてもらひたいものである。

四

自分の知つてゐる人の中に、亥若しくは猪の字のつく名前の人は、近い處では先づ久保醫學博士であらう。博士が專門の醫學の權威者であることは勿論、文學の方面に於ても、夙に一方の驍將であることは、今更言ふを俟たない所である。博士が名士の遺墨を豐富に藏せられてゐることは、嘗て聞及んでゐることであるが、自分は舊臘仙厓三昧會の岩瀨謹治郎氏から贈られた仙厓遺墨の寫眞集中に、博士所藏の次の一幅——いや橫物であるから額かも知れない——を觀ることを得た。其の語に曰はく、

耳　鳴

行レ德猶ニ耳之鳴一、獨自知不レ令ニ人知一。

耳鳴の大字の豪宕さが以下の小字の勁淡さと相待つて、如何にもよく紙面に收まつた逸品である。

自分は仙厓和尙の事をば未だ深く知らないのであるが、博士の專門醫術の上から、この書蹟の在るべき所を得たことは勿論、又實に語其のものがよい。德は得なり、自ら得ることであつて、人に知らるゝことを求めるのは、其の得を失ふ所以である。學問の事が亦さうであつて、眞の專門の學問の事は、實際に自ら知るより外ない事が多い。自ら知るだけで面白くない間は、未だ學問の黃口兒である。孔子は門弟子夏に敎へて「女君子の儒と爲れ、小人の儒と爲る無かれ。」と言

つた。馬融が之に註して、

君子儒と爲れば、將に以て道を明かにせんとし、小人儒と爲れば、則ち其の名を矜る。

と解いたのは頗る其の要を得てゐる。誠に學問にも君子のやり方と小人のやり方とがある。無暗に自己宣傳ばかりして、他人の美をなさうことを知らぬはよいとしても、好んで人の瑕瑾を拾ひながら、人の卓説は斷りなしに我が物らしく拜借するといふやうな手合が、現代には多い。嗤ふべき限りである。それが學問にまだ駈引のある所以であつて、眞の猪武者でないからである。

自分は耳鳴の箴が仙厓自作の語であるか、古人のものであるか知らないのであるが、久保博士が惜しまれて大學を勇退された間もなく岩瀬氏からこの寫眞版を贈られたので、恰も久保博士から戴いたやうな感がして、此の上なく嬉しかつた。昨年最後の自分の獲物として、永くこの語を玩味し續けようと思ふのである。

何でも構はず書いて見るより仕方がないと書出したら、荒狂ふ猪のやうに無暗に跳躍してとんでもない所へ來て了つた。これでも自分だけは相當興味を昂ぶらせて來たつもりだが、定めて人が見たら、そんな白い豕なら遼東には澤山ゐますと言はれるであらう。（昭和乙亥元旦記）

（昭和十年一月、福岡日日新聞）

牛よせ

一

舊臘初旬に長崎の市丸人形店から、かの地の祇園牛の繪葉書を送つて來た。畫は玩具の牛の木版色刷、相當雅味の豐かなものであつて、新しい年の干支に因んだ年賀用のものであることは言ふまでもない。元來長崎の祇園社には厄除けとして張子の首振り牛が古くからあつたが、明治四十年前後から全く其の姿を消して、只首振る人を「祇園牛のやうだ」といふ諺に、其の跡を遺してゐたに過ぎなかつたのを、一昨昭和十年七月、三十年振りに市丸の主人が復活させて賣出した。當時長崎在住の知人H君が早速一疋送つてくれたが、其の手頃な大きさ（舊いものよりやゝ小形にしたといふが）といひ、單純化して兒童性をもたせた可愛さといひ、眼と角の先尾の先が僅かに白いのみで、全部眞黑な體に、鼻輪・手綱・鞍・鞦・腹帶、背負はせた米俵、さては鼻の先蹄の先などを彩取つた色の配合が映りよく、而も其の首の振り具合が牛の鷹揚さに相應はしくて、如何にも好い出來榮えである。机の上に据ゑて「この牛を見てゐると何となく氣が暢々する。」と

言つて賞めると、家人に「牛は牛づれといふが、貴方によく似てゐるからだらう。」と言はれた。「のろさがか？」と苦笑しながら、贈主への禮狀を認めた末に、

長崎の祇園の牛は何事もよしとうなづく卜象のよさ

と緣起を祝つて見た。H君が之を市丸の主人に告げたといふのが緣になつて、かの主人とも知るやうになつた。今度繪葉書を送つてくれたのもその爲である。私は元旦早々其の祇園牛を机の上に曳出して、よしよしと頷く卜象に、まづこの新年の幸先を祝福した。

さてこの厄除けの牛が京都の八坂神社その他に、ありやなしや不聞にして知らない所であるが、少くも長崎のこの祇園牛は、全く祇園社が牛頭天王を祭神としてゐる故であることは言ふまでもない。祇園も牛頭天王も、もと佛教のものであつて、祇園は印度の須達長者が釋尊の爲に建てた精舍であり牛頭天王は其の精舍の守護神であつたのである。而して日本の今の祇園社が素戔嗚尊を祭神として、それと牛頭天王を同體としてゐるのは、もと本地垂跡の考へによつたものであつて、素尊は印度の牛頭天王が跡をこの土に垂れ給うたのだといふのであるが、其の起源はやはり日本書紀の一書の傳に據つてゐるらしい。その傳といふのは、素尊の所行が例の如く亂暴極まりなかつたので、諸神が千座の置戸を課して放逐し奉つた時、尊は其の御子五十猛神と新羅國に降

りまして、曾尸茂梨といふ地に坐ましたといふのである。而してこのソシモリが朝鮮語の牛頭山の義に當る所から、この牛頭と素尊とを關係せしめたものらしいのである。

神代紀の事に聯想されるのは、我が神話に見える牛の起源についてである。これも日本書紀の一書に據ると、保食神が月讀神に斬殺された時、其の頂には牛馬、額には粟、眉の上には蠶、眼の中には稗といつたやうに、身體の各部分に種々の物が發生したとあつて、牛は馬と共に保食神の頭から出來たことになつてゐる。しかしこの神話も亦もとは朝鮮起源であるらしく、朝鮮語の頭卽ちモリといふのが馬のマルといふのと音の近似する所から、(他の部分の名と生ずる物の名との關係も之に準ずる)附會した言語上の遊戯であらうと金澤庄三郎博士は「古事記の一節に關する私疑」といふ論文に於て言はれてゐる。これでは我が牛の發生は馬のそれと卷添へに逢つたわけである。とにかくかうした一二の事柄について見ても、我が古代文化の朝鮮半島から受けた影響の大きい事を想はせるのである。

二

さて立返つてめでたく丁丑の春は明けたが、丁丑の歳の正月を古典文學に求めると、やはり萬

葉集にゆくのが手取り早い。集卷六には「九年丁丑春正月橘少卿竝諸大夫等集彈正尹門部王家宴歌二首」といふのがある。九年は天平九年であつて、橘少卿は諸兄卿の弟佐爲、門部王は出自が明かでないが、後に大原眞人の姓を賜はつた人である。この時主人の門部王が、

あらかじめ君來まさむと知らませば門に屋戸にも玉敷かましを

と言つて迎へると、客方を代表して少卿の子文成が

前日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まくほしき君かも

と挨拶した。歌は儀禮めいて技巧に勝つたものであるが、萬葉人の新年宴會ともいふべきものが想像されて面白い。天平九年は今年から恰も千二百年前であつて、まさしく二十回前の丁丑に當るのである。

卷十五によると、この年の正月には、昨丙子の歳我が北九州の沿岸に多くの歌を詠み散らして行つた遣新羅使阿倍繼麻呂の一行が、大使繼麻呂を空しく對馬の土に委して歸京したのであつたが、其の際の彼等は我が海岸に歌を一首も殘さなかつた。只播磨以東の海路の詠三首だけが見えるのであつて、定めし悲歎の中に悄然と還つて行つたものと見える。

萬葉集中に牛の詠みこまれた歌も多くはない。無論牛そのものを詠じたものなどはない。卷十

六に「乞食者詠二首」の長歌、鹿の爲に痛を述べたものと蟹の爲に痛を述べたものとがあるが、其の蟹の方の一首に、

馬にこそ絆掛くもの、牛にこそ鼻縄はくれ。

といふ句があつて、牛や馬のやうに縛めるといふ比喩に用ゐてある。馬には脚を繫ぐ縄があり、牛には鼻に掛ける縄のあつたことは、この二つの動物の制御の別が、古今同一であることを想はせて面白い。因みにこの乞食者は古來ホガヒビトと讀むことになつてゐるのは、古へ家々の門に立つて物を乞ひ歩く人は、種々の壽詞卽ち祝福の語を唄つたものであつて、自ら乞食者卽ち壽詞人となつたのである。恰も今の萬歳や厄拂のやうなものであつて、こゝに「乞食者詠」といふのは其の唄ひ歩く歌の文句のことである。萬葉集にかゝる種類の歌の殘つてゐることは、文學上のみならず民族學上も珍重すべきことであり、又興味深いことでなくてはならない。

牡牛は昔からコトヒといひ、今俗にコツトヒといふのが是である、同じく卷十六には「心の著く所無き歌」卽ち意味をなさないナンセンスの歌といふ標題があつて、その中に牡牛を詠み入れたものがある。

吾妹子が額に生ひたる雙六のことひの牛の鞍の上の瘡

天武天皇の皇子舍人親王が侍坐の人に命じて、若し意味のわからない歌を作る人があつたら、錢帛を賞與しようと仰せられた時、大舍人安倍朝臣子祖父が立ちどころに上つて、懸賞錢二千文を賜はつたといふのがこの歌であると、其の左註が語つてゐる。萬葉人は歌の遊戯として、多くの名詞を讀込む所謂「詠二數種物一歌」といふものを興じたと共に、全然意味をなさない歌を勿體らしく詠むことに笑を取つた。今の天狗俳句に似た遊戯が、奈良朝に既に盛に行はれたらしいことを懐ふのである。

尙ことひ牛については、卷九に

ことひ牛の三宅の浦に・・・

といふ句があるが、この「ことひ牛の」は枕詞であるか地名であるか、甚だ難解の語である。集に牛の出て來るのは先づそんな所に止まるであらう。

三

地名に牛の入つてゐて、集中有名なものは紀伊國の黑牛である。卷九に

黑牛潟鹽干の浦を紅の玉裳裾曳きゆくは誰が妻

といふのがある。これは、大寶元年歳次は辛丑に、持統天皇の紀伊行幸の時の歌十三首の中のものである。黑牛は今の黑江のことで、往昔そこに黑牛の形をした大きな巖石があつたから、地名になつたといふことである。卷七の

黑牛の海紅にほふ百敷の大宮人しあさりすらしも

といふのは、作者も場合も不明であるが、前の歌と情景が甚だしく似寄つてゐるので、同じ時ではないかと思はれるものである。尙卷九には柿本人麻呂歌集から採つた歌として、

古へに妹と我が見しぬば玉の黑牛潟を見ればさぶしも

がある。これは挽歌の部に入れて「紀伊國にて作れる歌四首」の中にあるから、妻を失つて後一人こゝに來た人が、昔相携へて遊んだ時を偲んだものである。牛窓は備前の港であつて、名もそのまゝ今に存する所である。卷十一に

牛窓の浪の潮さゐ島とよみ依せてし君に逢はずかもあらむ

は、評判高く言ひ騷がれたあの方に、如何して逢はずに置かれようかといふ義であるが、地名の讀込まれてゐるのは、多分牛窓地方の民謠であつたらう。牛窓に關して備前風土記逸文に、昔神功皇后の御舟が備前の海上を過ぎられた時、大きな牛が出て來て、御舟を覆さうとしたが、偶〻

住吉明神が老翁と化して現れ、角を取つて牛を投倒した故、其處を名づけて牛轉（うしまろばし）と言つた、今牛窓といふのは後に訛つたのであるといふ地名傳說がある。如何にも窮した故事つけではあるが、古代人が地名の起源を必ず皇室皇族に關係づけて語り、其の因緣を尊嚴にしようとする民族精神の表れが亦貴いと言はなくてはならない。

集には人名に牛のついたものが四人ある。時は天平十八年その正月の事であるが、大雪が降つて積むことは數寸、左大臣橘諸兄卿が諸王諸臣を率ゐて太上天皇（元明）の御所に參集して雪を賞した時、酒宴を賜はつた上、勅して各〻歌を上らしめた。其の中に大伴牛養宿禰といふ人の名前が見えるが、他の十數人と共に、作つた歌の漏失したのは惜しいことである。卷二十の防人の中に上野國から出た上毛野牛甘といふ人がゐて、

難波路を往きて來までと吾妹子が著けし紐が緒絶えにけるかも

といふ歌を作つてゐる。これは多分吾が筑紫に於て詠んだものらしく、久しい年月と〻要塞の任務に就いてゐた東國人が、遠い故郷の妻を憶つたものである。牛養も牛甘も共にウシカヒと讀んで同じ意味であるが、古代には動物について何養（犬養、馬養の如き）といふ樣式の名がよくある。次に駿河國から出た防人有度部牛麻呂には、

水鳥の立ちの急ぎに父母に物言ず來にて今ぞ悔しき

といふ詠がある。筑紫まで來る途中の作であつて、父母を戀ひしむ若々しい醇眞な心持である。

牛麻呂といふ名は今一人あつて、而もそれが我が九州の人であるから一層懷かしまれる。卷五に見える建部牛麻呂が是である。卷五には山上憶良の作とされる有名な鎭懷石の歌がある。鎭懷石は當時筑前國怡土郡深江の子負の原にあつて、神功皇后が三韓征伐の際恰も御懷妊であり、而も臨月に當らせられたのを、凱旋後まで鎭め給ふ爲に御裳に挿まれた石であるといふ傳說をもつてゐた。書紀にもこの事は簡單ながら記されてあるし、筑前風土記（逸文）には更に委しく記されてゐるが、この傳說を當時筑前守であつた憶良に物語つた人は、誰あらうこの牛麻呂であつた。憶良はそれを歌にした上、

右の事傳へ言ふは那珂郡伊知郷蓑島の人建部牛麻呂是なり。（原文漢文）

と左註してゐる。伊知郷といふ古名は今殘つてゐないが、蓑島は住吉に近い蓑島であつて、今尙其の名を殘し、電車停留場の名にまで呼ばれて、朝夕之を聞いてゐる我等は、集の牛麻呂にさへ隣人のやうな親しみを感じ、この人には作歌はないのみならず、傳も明かでないながら、こんな人でもあらうかと、その容貌をさへ心に描いて見ることがある。

歳次聯想

四

人名の事の出た序に、我が九州には人名を記した古文獻をもつてゐることに及びたい。それは正倉院に遺存する大寶二年の戸籍帳であつて、現在日本に殘る古文書、卽ち紙に記した文獻の最古のものである。その中に美濃國のものと共に、我が九州の筑前國島郡川邊里、豐前國上三毛郡塔里、加目久也里、仲津郡丁里及び豐後國某郡某里等のものがある。戸籍帳であるから人名をのみ書連ねてあるが、其の人名には相當注意してよいものがある。これらの人名に著しい一つは動物の名を取つたものが多く、殊に十二支に配した動物の名を取つたものの多いことである。それは勿論子丑寅卯などの文字を用ゐたものはなく、後に掲げる例のやうに普通の漢字若しくは萬葉假名で書いてあるが、ともかく十二支の動物の名の多いことは現著な事實である。我が國に存する考古學の遺物について見ても、十二支思想の傳來は隨分古く、やがて曆法の輸入によつて益々この思想を強くして、遂に人の命名法にまで浸入したものと見える。

かくて自然牛といふ名をもつものが、男にも女にもあるのであつて、殊に牛は他のものより多いやうに感ぜられる。今筑前國川邊里の戸籍帳だけから摘出して見ても、

大家部宇志麻呂
物部宇志麻呂
搗米部宇志麻呂
卜部牛賣
宗我部牛賣
肥君宇志麻呂
物部宇志賣
(肥君)宇志麻呂
肥君宇志麻呂

等九人を擧げることが出來る。麻呂は男で賣は女であることは勿論であつて、すべてがウシマロとウシメばかり、中には同姓同名の人さへある。若し之に豐前・豐後の分を寄せて來ると、更に優に二十數名を加へることが出來る。而してそれらには、たゞ牛又は宇志といふ名もあれば、牛手又は宇志提更に堅牛などといふ名も見える。尙美濃國の分にも七人ほど見えるが、總じて牛麻呂と牛賣が最も多い名であつて、萬葉集に見える二人の牛麻呂も要するに極めて通俗の名であつ

たらしく思はれる。しかしこれらの名は、必ずしも生年の歳次によつて命けたもののみではなく、其の年齢を檢べて見ると種々の人があつて、かうして多くの牛麻呂や牛賣に寄合つてもらつても、それらは丑歳生れの人ばかりではないのである。そこは現代とやゝ違ふ所である。

牛の人名については、九州の古代に尙一つ加ふべきことがある。應神天皇が日向の髮長姫を召上げて、やがて之を大鷦鷯皇子（仁德天皇）に賜ふ一段が古事記にも書紀にもあつて、而もそれが趣味多い歌物語を展開してゐるが、この髮長姫は古事記によれば諸縣君牛諸の女である。この牛諸は書紀の本文に從へば牛諸井であり、書紀の一書と日向風土記（逸文）とはたゞ牛とのみある。同一名の呼び方の繁簡による差異であらうが、何れにしても牛が名前の主要部らしいのである。

五

戸籍の名前調べで寄路をしたが、こゝらでもとへ戻つて、そろ〳〵お開きとしよう。萬葉集について今一つ落して來たのは牛の鳴き聲である。萬葉人は「馬聲蜂音石花蜘蛛」（卷十二）をイブセクモと讀ますべく戯書してゐるので、古く馬の嘶きをイと聞き、蜂の羽音をブと聞いたことがわかるが、それと共に牛の鳴き聲をばムとしたことが「牛鳴」をムの假名に戯用してあるのでわか

る。即ち卷十一に「如是爲哉猶八戍牛鳴」とあるのを、「かくしてや猶やまもらむ。」と讀ませるのが是である。牛の鳴聲は現今普通モウと擬ねるのであつて、昔のムもそれに近い音ではある。元來支那に於ける牟の字は、漢音はボウ吳音がムであつて、我が萬葉假名にはムに用ゐられ、片假名のムはこの字の下略であることは周知の事である。この字が又牛の鳴聲を表したものであつて、說文にも「牟牛鳴也」とある。それ故萬葉の牛鳴をムに戯用したのは、或は支那の字書の訓によつて、牟といふ假名の代用にしたものではないかと思はれるのである。

私はこゝまで來て、殆ど聯想が盡きてしまつたので、一往初から讀返して見たが、まるで牛の飼葉槽のやうにごた〳〵して了つた。我々は徒然草に於て牛のにれかむ（反芻する）といふ語を覺えたが、こんな話などは恐らく牛さへにれかむまいであらう。それよ徒然草ならば牛を談るべく尙々聯想はつゞくかも知れない。延政門院の牛の角文字の歌、今出川殿の牛飼さい王丸、「養ひ飼ふものは馬牛」より「人突く牛をば角を切り」の段、さては大理の座ににれかむ章兼の牛など、寄せて來ればなか〳〵多く、中でも有名なのは「牛を賣る者あり」といふ一段であるが、是は牛のおちたといふ話に始まり無常の說法に轉じたもので、新年早々の緣起でもないであらう。

（昭和十二年一月、福岡日日新聞）

青柳種信の事ども

一

福岡藩に於ける國學者として、當時に重きをなし得るものは青柳種信翁であらう。翁が其の師宣長から常に推稱されてゐただけ、學才の秀でてゐたことは勿論、著述の多かつたにもかゝはらず、割合に其の大きさが世に知られてゐなかつたやうに思ふ。其の傳記の如きもこれまで表れたものは極めて簡單であつて、大日本人名辭書や國學者傳記集成などにも、鑑定便覽に據つた一二行しか書かれてゐなかつた。幸に筑前志が鄉土の碩學かつ鄉土の研究者として之を世に紹介し、已にして大正五年追賞贈位の恩典に浴し、最近武谷水城翁によつて其の詳細な傳記が發表され、人名辭書の新版も亦筑前志に據つてやゝ廣い紙面を與へた爲に、漸く其の大きさが世に認められるやうになつた。

筑前續風土記拾遺をはじめ多くの翁の遺著は、殆ど總べてが鄉土に關する研究であつて、亦總

べてが稿本のまゝに遺されたのが、鄉土以外に餘り知られなかつた原因をもなしてゐるのであらうが、實に翁は鄉土志關係の研究に於ては偉大の功績を殘した人と謂はなくてはならない。而して自分が特にこゝに附記したい一事は考古學方面に於ける翁の功績である。翁の好古癖は自ら鄉土に於ける出土品にも注意が及んだのであつて、其の爲「柳園古器略考」をはじめ數種この方面の遺著がある。斯學の權威たる中山博士の言はれる所に據ると、現今日本の考古學上大切な地方となつてゐる我が北九州に於ける該方面の研究は、抑〻彼の筑紫郡須玖・糸島郡三雲に於ける出土品に淵源してゐるのであるが、當時之を實見して記錄しておいた人は誰あらう翁であつて、實に翁は九州考古學の祖といはなくてはならないと言ふことである。

かくして翁には一般國學に關する遺著は比較的少く、從つてかうした雜誌の記事として物語るべき文學方面の材料は多くないやうに思ふが、それにしても翁の萬葉集研究と其の作歌だけは見逃すことの出來ないものであらう。以下管見の及んだ範圍に於て、それらに關する一二の事を記して見ようと思ふ。

二

翁の萬葉集研究については自分も餘り明かではない。徵すべき資料に未だ多く接しないからである。しかし翁の萬葉集に造詣の深かつたことは、最もよく其の作歌に表れてゐる。而も比較的早い時代の作から其の跡が著しいのである。翁は言ふまでもなく本居宣長の弟子であつて、常に文通に由つて其の教を受けてゐたのであつたが、其の江戸に在る間は常に野田諸成に就いて其の說を聽いてゐた。殊に萬葉集に關する修養は多く諸成から得てゐるものと言つてよいやうである。今此等の關係を見る爲には、翁自記の年譜を借るのが最も好いと思ふ。

寬政元年己酉三月八日同寮十八人と共に江戸邸に宿直す勝次年二十四

（この間本居宣長に贊を取る顚末の記事あり略す）

四月江戸に着櫻田邸に直次。今年江府古學の士を尋訪て野田大人助敎殿に謁す縣居翁の門人子息は野田富之進殿二百石御旗下の士也助敎大人始は田安中納言殿へ仕へ御用人を勤め給ひ野田帶刀殿といひける今は退隱なり此ぬし厚く親み給ひて縣居翁の著給へる書種々萬葉全部の考等を傳へ給ひ且賀茂大人の秘置れし齊明紀の童謠の解をも自ら寫して授られき五年六年が間此の大人の恩もまた廣大也といふべし。

以て其の事情の一斑を窺ふことが出來る。

賀茂眞淵の著萬葉考は六卷並に別記三卷、人麻呂集一卷を合せて十卷だけが、眞淵自身の書いたものであるが、卷七以下卷二十までの十四卷は眞淵の歿後野田諸成が眞淵生前の敎へた所を辿り、自說をも入れて書いたものであることは卷七の序を見れば明かである。而してこの序は諸成が天明五年に書いてゐるのであるが、寬政元年種信翁が江戸に上つて諸成と相親しんだ後まで、此の萬葉考が作られつゝあつたことは、この卷七の長氣の註に

氣は來經の約にて長き月日も年も來經たるをいふ言ならんと吾友大藏種信がいひし。

とあるのでも知れるし、尙卷十五水城の註にも

諸成云吾友大藏種信は筑前國早良郡岡の者なり。種信云水莖の水城と集中によめると水莖の岡とよみしは別地なり。

とあるのを見ると、諸成が考を書く際に、常に翁との話合のあつたことが想像されるのである。

加之萬葉考の一本に靑柳種信本といふものが傳へられてゐる。この本は諸成が貸與した考を翁が自ら寫し取つたものであるが、それに翁自身の說を書込んであることは勿論、其の或卷（卷九の如き）に至つては翁自身が諸成本を全然書改めたやうにさへ見えるのであつて、流布本萬葉考（眞淵全集本の如き）とはよほど異なる書である。この種信本萬葉考の事は校本萬葉集首卷下、萬葉集

註釋書の研究の萬葉考の條に解說されてあるし、自分も先年入手した家藏本に就いて、奈良文化第十一號（昭和二年七月刊）に紹介した事があつた。校本萬葉集に用ゐた本は、竹柏園所藏であつて種信自筆であるが、家藏本は他の人による傳寫本であつて、竹柏園本ともやゝ違ふものである。

こゝに此の本の委細な解說を繰返す煩をば省くのであるが、其の卷六の終には

ことし寬政のはじめの年しはすの日鳥が啼吾孀國なる大城の本霞關の邸中にて高麗宿禰大人躬らかき給へる本をもて書うつしぬ　大藏種信

といふ奧書が見えるから、翁の江戸に出て諸成と往來するやうになつた當初から、此の考を寫し始めたものであつて、いち早く萬葉集の研究に從事したことが知られる。前記の年譜に

縣居翁の著給へる書種々萬葉全部の考等傳へ給ひ……

とあるのに思ひ合せられる。校本萬葉集の解說に據ると諸成から借りて考を寫し、かつ私案の書入をしたことの奧書が寬政五年まであるのを見ると、江戸祇役中萬葉研究をやつてゐたらしく見える。翁は翌寬政六年二月には福岡に歸つて、三月から八月まで沖島御番を命ぜられて、彼の島に渡り有名な防人日記をものしてゐるが、其の中の歌に盛に萬葉語を用ゐ萬葉調を行つてゐるのであつて、作歌によつて其の造詣がわかると言つたのはこれである。以上に由つて翁の萬葉研究

が相當深いものであつた事は知られるが、萬葉考種信本だけでは其の研究の全成績を窺ふことは出來ない。此の本に書入れられた翁の說はむしろ斷片的なものであつて、さしたるものでないからである。

只茲に一顧を拂ふべきは卷九である。この卷は今本卷五であつて、世に憶良の集だとも言はれて、九州に於ける旅人と憶良との作を中心に集めてあるものであつて、翁の鄕土には最も關係の深い卷であつたからであらう、種信本の中で特に此の卷だけが、翁の手に由つて全く諸成本を書改められたやうに見える。今種信本卷九の特徵をいへば先づ本文の校定を嚴密にしてゐることである。諸成本も全く本文の事を記してないのではないが、多くは獨斷に意改した形を斷りなく其の儘本文としてゐるのに、翁に於ては一々他本との校合を斷つて苟もしなかつた。歌の位置なども無論輕々に變ずることはしなかつた。之が翁の諸成よりも勝つた學者的態度であつて、古典の研究はかくあるべきである。是が諸成本に勝る第一の點である。次に諸成本には特別此の卷に多く見える漢文漢詩を、別記に出すとして皆省かれてゐるのに、種信本にはこの漢文漢詩を悉く解釋してある。諸成本の別記といふものは傳へられてゐない、恐らく遂に出來なかつたものであらう。元來翁の學問は第一に漢籍を學んだらしく、十一歲の時他に寄食して手跡や四書の素讀を習ひ、

十九歳に井土南山に就いて左國史漢を修めたとあるから、相當漢學にも通じてゐたもので、漢文は本居宣長に讃められてゐる位好く作り、漢詩も柳園集に二三見えてゐる。長歌の序を漢文で書いたもののあることは勿論である。されば萬葉集の註解に於ても之を除かずにやつてのけられたことがわかる。是が第二の點である。而して第三は諸成の説の誤を訂して行つたこと、第四は眞淵・宣長の説を後より書入れてあることである。今一例を示すと、例の「比等母禰能」の註に、

眞淵云ひともねのもはむに通しか。人みなと通したる事歟又ひとむねにて一家と云事ならむか○諸成云毛根の約迷なれば人目のといふ。さらばめをほりなどの類にて、人の面のうれはしくわびたるをいふ歟。或説にひとむねの通音にて、一家をいふといへるは次の説ならむ。種滿案るに賀茂大人の人皆のといひおかれしかたよろしからん歟。さ心得る方あきらかにして義もとほれり。（以上本註）

種萬呂今按に本居大人の説偶予の説とあへり。

○宣長云ヒトモネ未詳、モシハヒト彌那ニテ人皆ノ歟。跡ニノコレル人ハミナ君ニワカレテウラブレヲルニ君ハ京ヘノボリ玉フナレバ立田山ノ邊マデ行玉ハバ此方ノコトハワスレタマハンカトナリ。（以上朱墨頭書）

とある。之を眞淵全集本のこの個處と比較したならば、思半ばに過ぎるものがあらう。勿論全巻を通じて、かくの如く改まつてゐる譯ではないが、とにかく以上のやうな諸點に於て諸成本よりも全く面目を新たにしてゐるものと言はなくてはならない。

武谷水城翁の記述によると、種信翁の著述の中に

萬葉集註釋

といふ名が見えるが、其の巻數さへ明かでなく、勿論自分は未だ之を見る機會を持たないのである。先頃武谷翁に會つた際、此の事を質して見たが、あれは著述目錄によつて記されたのであつて、實物を見ての上ではないことを確かめることが出來た。それ故この書については尚後日の調査を待たなくてはならない。

只諸成との關係及び考書寫に由つて、翁が萬葉研究には如何に熱心であつたか、從つて如何に到る處の深奥であつたかが想像される。寛政九年に本居宣長が翁を松平定信に推薦しようとした際、稲掛大平が其の中介人金子某に贈つた推薦狀の中に

右青柳氏は（略）皇朝學問甚出精にて才氣も隨分有之國史を始萬葉集其外の古書は博達仕歌文章も宜敷出來申候（武谷水城「筑前の國學と青柳種信」所引）

とあるのを見ると、殊に萬葉集の造詣の認められてゐたことが知られるのである。因みに翁の國史の著述には日本紀講說五卷があるが、只神代紀の一部に止まつて完成されなかつたのは惜しいことである。

三

福本日南は其の筑前志に於て、此の土の文學を論じ、古今の文豪を列ねて、其の內に

青柳種信の歌未だ至らずと謂ふと雖も、復古の魁を爲す亦珍とすべし。(略)種信の「防人日記」と望東の「姫島日記」、其文其歌と藝苑の合璧と爲す可く……

と言つてゐる。已述の如く大平が、

歌文章も宜敷出來申候

と推稱してゐるし、鑑定便覽などにも、

古學ヲ唱ヘテ世ニ稱セラル。詠歌又善セリ。

と言つてゐるのを見ると、當時一流の歌人といふことは勿論出來ないにしても、詠歌に於て少くも鈴門中では讀手の一人と許されてゐた事だけは疑ない。而して翁の歌は短册・書幅等に於て現

今世間に遺つてゐるものが比較的多い。若しそれ一たび防人日記や、遺稿の柳園集を閲したならば、其の遺詠の隨分の數に登ることを知るであらう。防人日記は已に述べたやうに、寛政六年沖島御番に征つた間の日記であるが、其の上下兩卷に讀込まれた歌が五十數首の多きに上り、柳園集は已に散逸した部分もあるやうであるが、寛政四年から年月を逐つて隨詠隨錄し、歿する一年前天保五年までの詠が載つてゐて、自分の見たものにも五六百首はあるであらうと思ふ。是を以て觀ると、翁は作歌に對してよほど趣味を有してゐたことは勿論、よほど達吟健詠であつたこと、亦相當自信を以てゐたらうことが窺はれるのである。

翁の歌の格調は一言にいふと鈴門風であつて、全體から見ると、其の新體が多きを占めてゐる。今翁自信の作と見るべく短册に書かれたものの內から一二擧げて見ると、

かまど山峰の戸ぼその明けくれは雲におきふす苔の岩床

終夜うつや砧の音たててやまよりをちの里を知るかな

あやなくも花に霞のかゝるかなさらでも曇る老の涙に

花ざかり臥處ながらに見るのみぞわが山住のかひにはありける

といつた調子である。新古今風の韻をもつた讀口が、やはり翁の歌の中心をなしてゐたやうに思

ふ。しかし翁は江戸に在つて、當時彼の地の驍將である橘千蔭や村田春海などとも往來してゐたのであるから、無論それらからの影響も認めなくてはならないだらう。

船よばふ聲とそしきれ山城の狛のわたりの五月雨のころ

大井川くだすいかだに指すさをの雫もにほふ花ざかりかな

木々は皆拂ひつくしてこがらしの行方を苔の庭に見るかな

などは、やゝ進んだ新しみを見せてゐるものであつて、頗る江戸派の風格に似た所を見る。

さて一方古體は數に於てこそ少いとしても、亦けざやかに萬葉風を行つてゐるのである。

沖津浪千重に立つとも幣まつり君しいのらば豈さはらめや

志賀のあまの小舟つらなめはなりその荒磯の上に玉藻かる見ゆ

風まもり大島のへに我をれば鐘のみさきにしら波立つも

新羅べに夕立すらし百ぶねの津しまのねろゆ雲ゐたち來も　（以上防人日記）

唯爾不遇　日之可左奈羅波　益雄登　於母閉留我也　泣管將居

吾背子之　獨毛行歟　佐鷺牟川　可波廼比己凝理　寒朝爾　（以上柳園集）

安豆射弓　春來爾氣羅之　狹已呂母能　緒筑波峰呂爾　霞棚飛久　（書幅）

などに於て其の讀口を見ることが出來よう。形が勝つてゐることは固よりであつて、時にはあまりに模倣に過ぎると思はれるものさへある。

吾はもよしら玉えたり皆人の得がてにすとふ白玉得たり　（防人日記）

玉纏の太刀たれはきてかゞひする輕の市邊に立つは誰が子ぞ　（唱和少年行）

くしの神少彦名のかみし酒千とせの春もあさずをせさゝ　（年の賀）

朝もよし和歌の浦松萬代に有りつゝ見らむ木人乏しも　（本居大平六十賀、寄木祝）

かうした歌は、只言葉の遊戯に過ぎないやうにも見られようが、又如何に古語を使用するに自由であつたかを知ることが出來る。

かく近體古風を並べ詠んでゆくことは、畢竟するに徹底しないことであつて、其の爲に鵺式な不調和を見る弊は往々あつた。

泊瀬山もみぢ吹きまく秋風にいやすみのぼる月人男

神さぶるいそしが崎による貝をひりひてゆかむ袖はぬるとも

大木曾やをぎその山し深ければまだ宵ながら月はゆつりぬ

何となく古言が耳ざはりになるを覺える。皆一方に卽しなかつた弊であらう。

四

長歌は萬葉獨特のものであるが、翁は萬葉家だけに亦之を好んで作つたらしい。防人日記にも三首見えるが、柳園集その他で自分の見たものが十首近くある。今其の一二を示す。

江戸に在ける時飛鳥山に遊びて黑髮山を望みてよめる

遲々登　照留春日爾　大野等乎　振放見連者　雲雀安賀里　櫻花咲　無良肝乃　心悲之母
國原廼　退邊之極　天雲烏　不利佐氣瞻望婆　野干球乃　黑髮也滿者　霞立　春登波雖言
山牛鳴狹爾　開留花歟登　見左右手爾　時自久耳社　雪者降介禮

（この歌には反歌がない。柳園集に載つてゐるが、これは家藏の書幅に據つた、一二句の異同がある。）

遠村雪當座

今朝廼朝開　雪見乎將爲登　益雄廼　伴寬集　降雪乎　腰爾奈豆美氐　埴安乃　堤廼上爾
登立　四方見放者　香具山廼　遠面此面波　春花廼　開如　海原者　汀氷居　澳爾邊爾　加
萬目立々　國原者　彼所共不知　白妙爾　雪降敷奴　栲穗爾　雪者雖降　遠方爾　烟立々
其香乎留　烟廼末也　藤原廼　名爾負宮廼　墟庭不有歟

反歌

妹之屋廼　木於遠雪波　雖隱　烟爾灼然　遠乃村並

天保二二之歲　仲秋三五之夕　夜氣亮朗　宇宙洞然　素娥擅淸光於東山

玄兎走澄暉於西溟　加之露凝旻序木葉脫　風轉商郊雲烟斂　會此佳期不能

黯然　染翰操紙自愧才短　仰蒼穹而嗟歎　對皓月而長歌　哥曰

何時者雖有　秋之最中之　今宵照　蟾蜍鴛鴦將見登　暮懸留　虛空乎待得而　東方之　山間
遠久　眺望者　漸澄昇留　月讀之　光華乎四方爾　敷島也　大倭乎山上復有山留　其影者
高麗唐土毛　仰良志　金吹風爾　雲霧毛　無蹤霽而　秋野爾　立左男鹿毛　孺戀而　鳴響也
久方之　天門涉留　鴻鴈毛　聲乎揚帆而　月船　星之林乎　排而往　遍影乎　邑里不別　御
代之光輝爾　准管　仰而序觀留　長終夜

反歌

安布久哉　賤之伏舍母　玉敷母　影無隔　月之光乎

最後の月見の歌は、歿する前二年の天保四年に成つたことが序で知れるが、餘り巧いとは言はれない。中に七五調に成りかけた處などもあつて、調子が甚だ亂れてゐるのみならず、反歌の如

きは全く近體に墮して失敗の作であると思ふ。遠村雪は題詠であつて、本歌はやゝよいが、やはり反歌が拙くて萬葉調を失つた。これらも要するに兩體不徹底の所から生じてゐる。黒髪山の詠は終がやはり拙いがまだ良い方であらう。翁の長歌は言葉はなか〳〵達者であるが、想が單純であるしどうも疵があり勝ちである。自分は概して短歌の方が佳いやうに思ふ。

翁は又古學者だけ、萬葉家だけに、古典關係の地に於ける懐古の詠がある。夙く鎭懐石の長歌があるが、之は他人の作に唱和したものであるから、茲には除くが、此の類の短歌を二三擧げておく。

遊灘縣歌

秋芽子乃　爾保不宮食乃　野倍見者　頭挿遊思　宮人於母保由

寛政十年九月十一日太宰官府のあとを尋ねて

大王の遠の御門と造らしし西の都は荒れにけるかも

高麗くたら御貢そなへて仕へてし西の都のふりし址處

水城をとほるとて

あたまもるおさへの城とし名におへる水城の關はさしてふりゆく

淡海大津の朝に仇守るおさへの城とて築かせ給ひし水城のそのかみの下樋なりし

埋木の出でたるとて人々のもてはやしけるを見て千年餘りを經て今の世にあらはれけむことのいとめづらしければかくなむ

春花の榮行くみよに逢はむとしみづ木の下樋出でにけらしも

雪の中に梅の咲きたるかたに歌かきてと人のいひければかの天平の昔太宰のつかさにて此の花を賞で給ひしことをおもひて

梅の花をりてかざさむ白雪のふりし昔のあとをとめつゝ

歌として盡くよいといふ譯でもないが、古學者としての翁には相當感興が深かつたものだらうといふ點に意義のある作である。

五

翁の歌は日南が評したやうに、未だ至らざる點もあるであらう、月並の作も多いやうである。殊に近體・古風を並べ詠んだことは著しく不徹底な所を生じて來た。むしろ何れか一方に卽いた方がよかつた。而して卽くとすれば翁にはむしろ萬葉風がよかつたのではなからうか。自分は思

ふ、翁の作の中では、初期における萬葉調の短歌がやはり特色をもつてゐるやうに思ふ。それは主として防人日記の中の歌をいふのであつて、前掲の日南の讃め方にはやゝ曖昧な點もあるが、あれらの詠にはソツがないやうに思へる。此の日記の事件は寛政六年の事に屬してゐるが、日記全卷が出來上つたのは寛政十一年頃のやうであるから、多少練つたものではあらう。柳園集には寛政四年二十七歳の頃からの詠が載つてゐるから、防人日記の歌は翁としては初期と見てよいのであるが、江戸に於て萬葉集を研究した直後ではあり、未だ妻帶もしない壯年であり、（翁は三十三歳にして始めて久野氏を娶つた。）殊に沖島御番といふ境遇が妙であつて、十分防人氣分になることが出來たらうし、而も總べてが實境に臨んだ實感から湧出てゐる。翁も未だ寛政十一年頃には、歌について宣長から注意を受けてゐることが、現存の宣長からの手紙でも知れるが、さうした時の方が、堂々たる先生になつてむやみに題詠をしたり、他人に乞はれて强ひて作つたりする歌よりも潑剌としてゐる筈である。

翁の歌が新古を並べ詠んだのは、もとは宣長に倣つたのかも知れないが、彼の古風だけは自分の萬葉研究から自然に迸り出て來たらしく、徒らに宣長に摸した跡は見えない。寧ろ師に讓らざる生氣が表れてゐる。又眞淵をも祖師として常に追慕はしてゐたが、歌は眞淵に比してたとひ氣

韻に乏しい憾はあるが、格調がより醇であつた。この點に於てはむしろ元義などに迫るものがあるが、惜しいかな氣魄に缺けてゐる。寛政九年に同門の近藤春彦が長崎に下る途次、翁を訪ねて來た時の事を、其の「四方賓客來訪」といふ備忘の帖に記して、

鈴屋翁の門人のよし哥を專として諸國を游すれども其の歌も未熟にして殊に古言をしらず淺學といふべし

と言つてゐる。當時三十二歳の翁が、四十餘歳（翁自ら記してある）の春彦に對してから評したのは、學問に於て作歌に於て如何に自負してゐたかが分ると同時に、和歌は古言を以て讀むものとしてゐる信條がよく表れてゐる。實に此の時代には未だ形を主としてゐた人が多かつたのだ。翁は頭が餘り古典研究に傾き過ぎ、常に考證的思考に向つてゐて、要するに內容に淸新味が缺け、詩趣に乏しかつたことは事實である。しかし鈴屋門としてはその學問と共に作歌も一二に伍する事が出來る。翁の性格は大平が溫和篤實なる人物と言つてゐるやうに、其の肖像畫を見ても面容極めて溫雅の人と思はれるが、其の割合に讀口に歌才があり、かつ氣力があるものと言ふべきであらう。而も九州に於ては重きをなす人、殊にあの時代に古風を讀んだ一人者であらうと思ふ。若し翁をして永く江戸に在らしめ、新古その一方に徹底せしめたならば、更に進境を見て歌人と

して名をなしたかも知れないと思ふのである。

因みに此の稿を草する爲に、伊東福岡縣立圖書館長の君が資料を見る便宜を與へられた厚意を特に附記して感謝の意を表する。

（昭和五年一月、能古）

種麿と海量

一

たしか昭和五年の十二月のことであつたと思ふ。自分が福岡縣立圖書館に乞うて青柳種麿の遺著を見せてもらつた際、其の「四方賓客來訪」の中に僧海量の名を見出して、思ひがけない處で珍らしい人に出遭つたやうな氣がした。「四方賓客來訪」といふのは種麿が訪問を受けた東西の學者詞人の姓名及び其の人に就いて記した年月順の備忘錄であつて、寛政六年彼が江戸祇役から歸藩した以來、こゝ福岡で會つた人々について記したものである。歌僧にして詩僧而も一生を殆ど四方漂遊で終つた海量が、我が福岡を訪れてゐることは勿論、少くも當時の古學者青柳種麿に邂逅してゐることは、相當我々の興味を惹くものがある。而も種麿は海量について及び其の際に於ける兩人の交渉に關して、簡潔ではあるが、相當鮮明に記してあつて、當時の海量其の人を懷はしめるに十分なもののあることを感じた。

然るに一昨九年の十二月、青柳種麿一百年忌記念の展覽會が同圖書館に催された際、其の陳列品の一部に當市山崎昌太郎氏所藏の種麿に關する書翰數通があつたが、其の中江戸の野田諸成から種麿に宛てた一通に、亦海量の名を見出したことは、再び自分をして目を刮らせるものがあつた。それは種麿が海量に會つた際の話柄について諸成に知らせてやつたので、之に對する諸成からの返事に又海量の名が出た譯なのであつた。自分は昨十年五月にこの手紙を山崎氏から借覽した時、更に同氏が海量の手紙をも所藏されてゐることを聞いて、三たび驚喜して早速それをも見せてもらつたが、それは海量が滯在を切上げてこの地を去らうとする直前に、種麿に宛てたものであつた。而も是が亦「四方賓客來訪」の記事と相待つて、其の際の事を一層委曲に物語つてくれるものである。

かく青柳種麿をめぐる資料の中に、圖らずも以上の如きものに次々に接して、かれ海量の我が福岡來訪を可なり鮮明に跡づけ得たことは、自分に取つて相當の喜悅であり、それが偶然であつただけむしろ或奇緣をさへ感じたことである。

二

我等は先づ「四方賓客來訪」の記事に聞かうと思ふ。種麿はこの記錄に「寛政六年寅十一月」の見出を以て、

近江國犬上郡彦根近村僧海量年五十歳餘一向宗の僧也先年も當國に游したるよし。此僧の兄は綱立といひてこれも歌學をして先年當國に來りしよし。海量は縣居翁の門人にして歌をよめり。

と書出してある。寛政六年は種麿が江戸から歸藩した年であつて、而も直に沖の島御番に向ひ、終つて八月歸つた、其の十一月がこの記事に於けるそれである。海量の年を五十餘歳と記してあるが、種麿は只推測で記したものであらう、海量實はこの年既に六十二歳であつた。而して種麿はまだ二十九歳、海量よりは卅三の年下であつたのである。六十二の海量が廿九の種麿を訪れて、眞に忘年の益友と思つたことは、種麿の已にどれほど世に認められてゐたかを知ることが出來る。而も歌は眞淵の丈夫振を承けて徹底的に萬葉調に凝つた海量が、江戸に於ける數年間を萬葉集研究に沒頭し、歸藩後盛に古風を詠んでゐた種麿と、如何に意氣投合したであらうかを想像せしめるものがある。詠みかはした歌の餘り殘つてゐないのは惜しいことである。因みに彦根近村といふのは彦根城の東方里根村のことであつて、海量の草庵を結んだ地である。綱立とあるのは立綱

の誤りであつて、この人は普通海量の甥といはれてゐるのであるが、それもさうではなく、全く他人であつたといふ説がある。種麿が兄と書いてゐるのは果して海量から聞いた所に據つたものか否か、頗る疑問である。海量が以前已に當地に來遊したことは、後にいふ歌集「ひとよばな」にこの地方を讀んだ歌のあるので明かである。それは恐らく安永六七年の交西遊の途次であつたらしい。さて次に、

此度崇福寺へ滯在す。田尻翁を訪ひ夫より余を訪ひ來る。諸國周遊の紀行歌二冊繪入にて上木また古今集の評一冊これはいまだ卒業にいたらず。

とある。

滯在中主として崇福寺にゐたと見えるが、寺に何か其の資料が遺つてゐるか否かに就いては、自分は未だ調査の機會をもたなかつたのである。田尻翁とは才兵衛眞言のことであつて、筑前に於ける鈴門最初の國學者、梅翁と號し詠歌の門弟をも集めてゐた人である。或は海量はこの田尻梅翁から種麿のことを聞いたのではなかつたかと思はれるのである。諸國周游の紀行歌二冊といふのは卽ち彼の歌集「ひとよばな」のことであつて、彼が諸國を周游して作つた歌を五畿七道の國順に並べたものである。筑前では太宰府・箱崎・生の松原、豐前では彥山・宇佐等の詠が載つ

てゐる。早く天明中に成つて寛政四年に刊行されたもの、繪入であつて繪は大雅堂・天民・岸駒等の筆に成り、博多眞景は遜齋といふ人が描いてゐる。この本は一冊であつてこゝに二冊とあるのは疑問であるが、彼にはこの歌集と同年に刊行した周游詩集「臥遊篇」があるから、多分それを一しよに見せたものであらう。古今集序の評一冊はこの年に長崎の旅寓に於て書いた「偲種」をいふのであつて、其の時尙未定稿であつたといふのである。この本は現に東京の無窮會文庫に遺存してゐる。次に、

一日崇福寺中の寮にて田尻氏とともに會せり。折しも風吹き霰の降りければ、　種麿

風まじり降るや霰のたしゞに示し給はね千代の古道

かへし　　海量

なか〳〵に千代の古道尋ねてもたづ〳〵しきを吾いかにせむ

只通り一遍の挨拶とも見られるが、若輩たる種麿が先輩として海量をあがめた態度、海量が學問に於ては却つて種麿に一目置いてゐた心持がよく現れてゐる。さて

荷田東麻呂の點神代紀をもてり。余が眞淵大人の書入の神代卷を見て書寫しかへる。

互に古典を貸借し合つて見たことが知られる。

小金丸村林眞治彦が家に行きて三十日餘滯在す。前後の滯留中我家に五六度訪れ來る。鈴屋翁を始め内山眞龍・蓬萊雅樂・宇治五十槻など、いづれも心易きよしにて、かの人々の事どもを委しくかたる。

小金丸村は今の糸島郡可也村に屬するが、林眞治彦といふ人については未調査である。後にいふ海量の手紙が二月一日に林家から出てゐるらしく、而も三十日ほど滯在したといふから、大體寛政六年の冬は崇福寺に、翌七年は林家に世話になつてゐたと見える。而して兩所に滯在中、五六回種麿を訪問して來たといふから、如何に兩人の親しくなつたかを知るに足るであらう。

三

「四方賓客來訪」に見える所は以上に盡きるが、更に兩人がこの際話し合つたことの一部が野田諸成の手紙に表れて來ることは面白い。諸成が眞淵の學を承けて眞淵の歿後其の萬葉考を完成した人であることは周知の如くであるが、種麿が江戸に在る數年間は、その家に出入して教へを受けたのであつて、種麿の強く恩顧を感銘してゐた人、諸成も亦種麿の學才を認めて互に相許した間柄であつた。而して今存してゐる諸成の手紙は二月十九日附のもので、表は種麿の年賀に答

へたものであるが、其の裏には次のやうなことを記してある。

御追書披見、兵庫湊植田將監と申者眞淵之板木も買取候而、全部二十册近々出板之趣、近江僧海量咄申候由、上方邊にも眞淵門人有之事に候所、他之手へ板木も相渡り候、殘念成事と噂御座候由、御紙面之趣先黑生へ早々相達可申候……

これは眞淵の萬葉考の板木（一・二及び別記三卷の分）が人手に移つて、縣門の弟子でない他の學者に由つて續篇の刊行されるに至つたことを殘念がつた話が、種麿・海量の間に出たので、當時江戸に於て萬葉考の續篇を書いてゐた諸成に其の事を知らせてやつたのが、種麿の年祝狀の追書であつて、諸成のこの手紙は更にそれを見ての返事である。種麿の年祝狀が寛政七年のものであることはもとより、諸成のこの返事も無論その二月のものであつたと推定されるのである。眞淵の萬葉考の版木及び續刊の一件並に諸成の事に關しては、この手紙が少からず役立つのであるが、是は自分が嘗て或ものに書いた事もあり、玆にはやゝ餘事に亙るから省くことにする。只彼等二人の會つた際、萬葉考に關して共に自分の事のやうに殘念がつたのだといふに止める。

四

さて山崎氏所藏の海量の書簡をこゝに紹介して、「四方賓客來訪」の記事と照合して見ようと思ふ。

さきの日はたいめたまひ、分て神代の卷かしあたへたまへる、いとも〳〵ぬかづきてみをはりぬる。とくかへさまくほりすれど、たびのならひ何ごともおのれまゝならず、ちぎらへるまゝならぬを、つみゆるしたまへ。はじめてたいめたまひしより、めづらしく江戸の沙汰うけたまはり、年ごろいぶかしくおもひつる加茂大人のふみどものこともはるけ、ことにうつしえつることあさからず、うれしさいはんかたなし。たゞたびのうさそのところのならひ、一日一夜もこと〻ふことの心まゝならぬぞ心のこりにき。おのれ此ほどははかたにいでん行ぶり、今一たびたいめえまくおもひつるを、今宿わたりより、牡鹿の島わたりへふねにてわたりなんとはかれば、たづねまゐでんこととはかりがたし。神代の卷あろじにつげおきぬれば、たよりにわたしてん。さておのれが「ひとよ花」崇福寺までいだしたまはんことをこひのむになん。大方三日四日のうちこゝをたち出、しかの島田島にめぐり、崇福寺までたちでんは、六日七日になりなん。このことのみいとわづらはしくおもひたまへらるゝになん。田尻のぬしもこのごろこゝにまうでたまひゆたにかたらひつる。たゞこたびたいめえずはろ〴〵の國

にたちわかれんはくちをしかれど、せんすべなきこそ。ことなくつとめたまはんことのみこひねぎぬ。かりがねのふみのたよりにまうさなも。くさ〴〵めぐみによりうつしえつるさち、いつわすれめや。このあたり林のぬし中原のぬしなどこゝろざしの人々あれば、よくかたらひたまはんことたぬしかるべし。このあさけいかづき(ちカ)山にまうでんとするに、けふしもたよりもやとかくなん。「ひとよ花」のことといとわづらはしまつる。すてもすべきものながら、肥後さつまのかたまでもてゆかんとおもふものから、かくまうしまつるかしこ。

きさらぎのつひたちの日

青柳の種麻呂ぬしのおしまづきのみもとにまつる　海量

この手紙は寛政七年二月一日のものであることは勿論、多分小金丸村なる林家から出したものであることは、種々の點に於て想像に難くない。而して彼がこの朝雷山に登るので、福岡に幸便もあらうかと書いたと言つてゐる。

この手紙を一讀するものは、かれ海量が種麿より受けた裨益に對して如何に感謝し、從つてこの地を去ることを如何に名殘惜しがつたかが紙面に溢れてゐるのを見るであらう。先づ種麿が記して置いた書物の名が亦この手紙にも見えるが、海量は種麿の神代卷を借り、種麿は海量の「ひ

とよばな」を持歸つてゐたことが知れる。海量は初めて種麿に對面して、種麿が最近齎し歸つた江戸學界の情況を珍しく聞き得た歡喜を述べ、竝に眞淵の神代卷を讀みかつ寫し得たことを返す〴〵感謝してゐる。さて今度博多に出る序に、今一度面會したいが、今宿から志賀島へ舟で渡るから、推參し得るや否や分らない。神代卷は宿の主人にことつけてお返し申す、私の「ひとよばな」は崇福寺まで出しておいてくれろ、これは棄ててもよいものではあるが、行先の肥後や薩摩まではもつて行きたいから御手數だけれど返してくれろとある。

さて豫定として今月三日四日のうちこゝを立つて、志賀や田島（宗像神社）を回つて崇福寺まで出るのは六日か七日になるだらう。もう多分お目に掛かれないだらうが、どうか御健康で御勤めの程を祈るとある。これから推すと、この時海量が博多を立つたのは、二月十日前後と見たら大差がないであらうと思はれる。而して「ひとよばな」は肥後・薩摩の方までもつて行かうと言つてゐるのであるから、新たに熊本・鹿兒島方面へ向はうといふのが、彼の是からの旅程であつたことが想像される。かくして海量は我が福岡を去つたのである。

五

近頃海量の事を記したものには、森銑三氏の「近世文藝史研究」に於ける海量法師一篇がある。氏は海量自筆の日記數册を本として、年次を逐うて委細にその傳記をものしてゐられる。只其の日記には缺けた部分がある爲に、そこに海量の動靜の不明な個處がある。森氏によると、寛政四年の初冬海量六十歳にして近江を出でて西遊の途に上り、岡山に於て翌五年卽ち六十一歳の正月を迎へ、其の初夏に長崎に下り着いた海量は、越えて六年の冬の頃まで同地に滯在してゐたらしく、冬に入つて歸途についたが、歸路のことは全く知るに由がないとの事である。然るに我が種麿に關する資料によれば、其の十一月にはたしかに我が福岡に來てゐるのであつて、しかして翌七年の二月十日前後まで、この地に滯留したことが知られるのである。森氏又曰はく、

寛政七年に於ける海量の動靜はまた全く不明の裡に在るが、十一月下旬にはまた長崎にゐて、親鸞忌に同地で逢つたらしい。

とある。がこれも海量自身の手紙によつて、恐らく福岡より更に熊本・鹿兒島に至り、再び長崎に引返したやうに考へられる。

これも森氏に據ると、熊本藩の儒者脇愚山の「蘭室集略」卷四に、

淡海寶器上人見訪名海量且示其所著歌詩二集、告以歸意、因賦呈。

と題した一律があるといふ。是はやはり我が種麿に貸したのと同じ詩歌二集を見せたものであつたらしく、從つて寛政七年二月我が福岡から南下した際の事ではなかつたらうか。或はこの間に一度郷里へ歸つたかも知れないが、その年の中に又長崎に居た彼は、多分熊本・鹿兒島の旅行を經て、再び長崎に舞戻るよりほか時間が許されなかつたのではなからうか。自ら「愛山愛水誤生涯」といひ、

ふるさとを雲ゐに置きて草枕たびより旅にいづるたびかも

といつた海量の海量らしい處を遺憾なく出してゐるやうに思ふ。

六

それにしても奇僧海量は寛政六年の冬十一月我が福岡に來て、翌七年の新春をこゝに迎へたのであつた。而も初めて會つた種麿と齡を忘れて肝膽照し合つたのである。

尙日記によれば、海量と關係のあつた筑前の人としては、龜井昭陽・香月春岑等があつて、殊に春岑は享和二年大阪で海量に遭ひ、歸國の際彼から歌をもらつてゐる。私は當市林大壽氏が曾て春岑舊藏の海量の短册を得られたことを近頃聞いたので、同氏から知らせてもらつた。其の歌

は次のやうである。

すみの江のふねにいざなふ友はあれどともをとはんとかちよりぞゆく

これは送別の歌ではないやうだが、やはり大阪に於ける新詠を春岑が得たものであらう。

（昭和十一年二月、福岡日日新聞）

柳園資料

——種麿宛宣長の書簡——

青柳種麿に與へた本居宣長翁の手紙の一つが、福岡市在住の宮崎兼一氏に所藏されてゐることを、或方面から洩聞いて、是非見せていたゞきたいものと豫てから冀つてゐたが、此の程一見する機會をもつたから、同氏の許諾を得てこゝに紹介することにする。

この手紙は加藤千蔭の種麿に宛てた一通と共に卷子に仕立てられてゐるが、今は宣長翁のものみに止める。縱約一五センチの半切、長さ一メートル强のものであり、尙表書の「本居中衞」といふ署名だけを切取つて、卷首に貼布してある。さて本文は次の如くである。

去年三月之御狀漸九月ニ相屆申候其後十月之御狀ハ年內ニ相達致拜見候先以愈御安全御座被成奉賀候愚老無事罷在候乍慮外御安意可被下候

一日本紀ノ注解可被成御存立之由扨〻結構成義何とそ御成業可被成候とかく學問ハ古書ノ注を致し候が第一宜御座候たとひ成就ハ不致候而も大ニ益ヲ得ル事ニ而御座候必〻御怠慢なく御

考可被成候

一書紀改訓ノ事ハ至而難キ事ニ御座候愚老も壯年之節神代卷を一わたり改訓致候へ共其後段〻相考候處不宜とかく書紀ハ全ク古言ニハ訓ミかたき書ニ而御座候返〻漢文ノ潤色大ニ邪魔ニ成申候

一通證ハ神代ハ勿論皇代ニ至テもとかく漢意ニ而古意ヲしらさる注ニ而御座候とにかくに書紀ハ漢意ノ潤色ニ而古意顯レかたく扨〻かなしき事ニ御座候此所ヲ能〻御考被成古事記と引くらへて漢意ヲ御さとり古意ヲ御考へ可被成候門人中外ニ書紀注解存立候人無御座候尾張ノ横井千秋改訓ノ望有之追〻相考られ候由ニ候へ共いかゝ可有哉と存候

一肥後ノ長瀨去年中被參候へ共此度ハ逗留もなく被歸候貴君ニも何とそ御發起被成御出奉待候

一遠州內山眞龍ゟ折〻文通御座候由此方へハ久〻狀も參り不申候

一續紀宣命ニ相穴ナヒト申事是ハ宣命ニ折〻見え申候くはしき事ハ未相考不申候へ共輔佐ノ意ト相聞え申候和名抄造作具ニ庵柱(アナナヒ)アリ此物うつほ物語ニ見えたるやうを考ルニ俗ニ云アシ、ロト聞えたりされは是も輔クル意アル歟

一令ノ抄愚老見申候も一冊ニ而さしたる事なき物也仁齋ノ解ハ未承ラス候壺井ノ解アレ𪜈是も
用ニタ、ヌ物也其外不承候尤愚老別ニ考も無御座候
一律ハ御示シノ通ニ而此方ノ本モ右ノ分也外ハナシ
一古物ノ圖御見せ被下忝奉存候御返シ申候ニ及不申候由別而忝奉存候いつれもめつらしき物共
ニ御座候
一細井氏去年三回忌ニ付愚詠御望致詠出進申候もはや時過候へ共先進申候
先者右御返事旁如此御座候尚期後信紛冗中早々

恐惶謹言

のりなか

二月廿二日

青柳勝次様

一尚〻悴健亭儀御尋被下忝奉存候無事罷在候乍慮外御安意可被下候尚又宜申上度由申候以上

この手紙の日附は二月二十二日であるが、年が記されてゐない。只文中に「細井氏去年三回忌ニ付云々」とあるのが倔强の手がかりである。細井氏とは福岡藩の國學者細井三千代麿の事であ

つて、この人は寛政五年鈴屋門に入り、同七年に歿したのであるから、去年其の三回忌であるといふ此の年は、(三回忌は歿年を入れて三年目、即ち足掛け三年目をいふから)恰も歿年から滿三年目の寛政十年に當る。從つてこの手紙は寛政十年二月二十二日のものと斷定すべきであると思ふ。宣長方に六十九歳(歿する三年前)であり、種麿は三十三歳であつた。

さて宣長の此の手紙は、種麿が宣長に送つた去年(寛政九年)三月と十月との兩度の音信に對しての返答であるらしいことは、其の起首の文面に明かであるが、今序を以て文中の語に就いて補註の二三を附記しておかうと思ふ。

先づ種麿の「日本紀ノ注解」といふのは、彼の著「日本紀講說」と名づけられたもののことであつて、初の部分僅かばかりしか出來なかつたが、九大國史研究室架藏本に據ると、寛政八年・九年にかゝつて書始めてゐることは確實であるから、種麿が宣長に其の手紙を出した時に之を書いてゐたことは亦確實である。この書は明かに宣長の古事記傳に倣つて、書紀の註釋を企てたものであつたから、師宣長に其の意圖を明かして指導を請うたものであらう。宣長が「何とぞ御成業可被成候」と勵ましてゐるが、彼がこの事業を大成しなかつたのは、惜しみても餘りあることであつて、恐らく恰も起つてゐた筑前續風土記の拾遺や附錄の仕事が、之を阻止したものであら

うと私は考へてゐる。

「書紀改訓」とは書紀の古訓を妥當に讀改めようといふのであつて、古事記で言へば、古訓古事記のやうなものを作ることをいふのである。宣長の壯年の頃神代卷の改訓を志したといふのは、かの髻華山蔭として殘つてゐるものが、其の仕事の跡であつたのであらう。「書紀ハ全ク古言ニハ訓ミかたき書」であるといふことは、宣長が古事記傳にも、亦髻華山蔭にも記してゐる所である。「通證」とは谷川士清の日本書紀通證のことであるが、横井千秋に改訓の著のありやなしやは寡聞まだ知らない所である。

「肥後ノ長瀨」は眞幸の事であるのは言ふまでもない。「遠州内山眞龍」と種麿とは親交があつて常に文通してゐたことは勿論であらうし、柳園集の中には眞龍との交渉や、從つて眞龍の歌なども見えてゐるし、又種麿の自寫した書物の中には眞龍の所藏本に據つたものが可なりある。

「續紀宣命ニ相穴ナヒト申事」は、種麿から質問してやつた其の解答と見える。この語の事は詔詞解の第三詔の「阿奈々比奉」の註（卷一ノ四十八丁ウ）に見えてゐる。宣長の詔詞解はこの時未だ出來てゐなかつたのであつて、翁の種麿に與へた他の手紙――翌寛政十一年五月二十五日附のもので、森繁夫氏藏、近世萬葉調短歌集成の卷一の口に掲げられてゐる――に、

是より續紀宣命注に取掛り候積りに御座候

とあり、寛政十二年までに成つたらしいが、刊行は翁歿後の享和三年のことである。

「令ノ抄」とあるのは、一條兼良の令抄、「仁齋ノ解」とは伊藤仁齋の令の解であらうが、種麿の問に對して宣長は未だ知らないと言つてゐる。其のありやなしや私も亦知らない所であるが、恐らく種麿は東涯の制度通の事を聞誤つて訊ねてやつたものではなかつたらうか。因みに近藤芳樹の著標注令義解校本には、校訂用の一本として伊藤長胤本といふものを擧げてゐる。「壺井ノ解」とは、壺井義知の令私考をいふのであらう。

「律」は周知の如く佚失した部分がある爲に、それについて種麿が質問したらしいが、宣長は此方の本もそれより以外にはないと答へてゐる。この頃種麿が律令の事を研究してゐたらうことは、彼が寛政九年（この手紙の前年）に内山眞龍の律の寫本を借りて寫した事實があるので知れる。（家藏の種麿本「律」に據る）

種麿は考古學に趣味をもち且研究した人であつて、こゝに宣長に贈つたといふ「古物ノ圖」は、たしかに出土品の圖であつたらうと思ふ。彼の遺稿の中には、柳園古器略考（怡土郡三雲村所掘出古器圖考・同郡井原村所掘出古鏡圖考・志摩郡誓願寺藏吳越王塔考）その他出土品に關する著

述があつて、先年との古器略考は鉾之器といふものと合冊に刊行されたのである。宣長のもらつたのも恐らくこの種の圖であつたであらう。

宣長がこの手紙と共に贈つて來たといふ細井三千代麿三回忌の追善歌詠は、多分短冊などやうの別紙に認められてあつたものであらう。因みに柳園集には宣長の歌として、

細井道世まろが身まかりしあくる年の秋によめる

朝露と消えにし人のおもほえて秋風吹けば袖ぞぬれける

といふのがあるが、これは一周忌の時のであるから、勿論この手紙の時のものではない。

追書に見える「健亭」（春庭）はこの年は三十六歳であり、種麿の三十三歳とは恰も同年輩であつた。春庭は周知の如く、生來虚弱、殊に二十八九歳頃眼を患へ、遂に三十三歳の時（この手紙の年より三年前）に失明して、爲に本居家の跡目を嗣ぐことも出來なかつた人であつた。この頃種麿が春庭の事を見舞つてやつたのも首肯されることである。

（昭和十二年六月、九大國文學會誌）

短歌に比較した俳句

一

この敍述をするに先だつて、斷つて置きたいのは、自分の俳句に對しては素人であること、少くも現代俳壇の新傾向などについての知識の極めて貧しいこと、及びこの敍述は明治・大正・昭和時代の俳句には言及してゐない、むしろ俳句の起源的觀察を主としたものであることである。

さて俳句が短歌から岐れ出て、全く統違ひでないのは勿論、其の貰ひ承けた形まで持續けてゐるのを見ても、此の二つは互に相近い詩であることは勿論である。それ故俳句風の短歌もあり得るし、短歌風の俳句もあり得る筈で、亦實際其の歴史を觀るとそれらが有つた。同じ日本の歌謠の一つであり、根元まで同一である兩詩體に、類似の點の有るといふ事を先づ知らなくてはならない。

しかし、已に外形に大小の差がある以上、それより起る律格の違ひがなくてはならない。隨つ

て之に盛る內容に異なりが生じて來なくてはならない。少くとも相對抗して別途に發達して來た根本の趣味に相違がなくてはならない。しかしそれ等に就いて比較を試みることは、眞面目に考へると隨分大きな問題にもなり得るのであるが、こゝには極めて概觀的に、只大體の方向の異なりと思はれるものを示すに過ぎない。それ故一一の引例などをば避けて、勢ひ論が抽象に傾くことであらう。かつ豫め斷つて置きたいことは、この敍述は兩詩の方面の異なりを述べるのであつて、兩詩の軒輊をしようといふのではないことである。

二

形から觀た短歌も俳句も共に世界に類の少い短小な詩である。短歌が三十一音で俳句が十七音、短歌の上半が俳句全體と音數律の構造に於て全く同一である。比較上からは一は長くて他は短いに過ぎないのはわかり切つた事であるが、順序としてかつは內容を規制する根本的條件として、是非とも陳ねておかなくてはならない事である。

然らば音性律に就ては如何。兩詩ともに五音・七音に區分されることは言ふまでもなく、更に小分することも出來るのであるが、それは姑らく措くとして、短歌の上句と下句とは各〻西洋の

詩の一行に當り、俳句はそれ全體が一行に當るものと見てよからう。それで兩詩形を今感情の弛張から考へて見ると、(之は無論科學的の精密な觀察からではない、素人流に吟誦した上の感じである。)短歌の上句と俳句全體とは音數律は同一でも心持が大分違ふ。短歌の上句の方は後に來る下句を豫想する爲めに終が全く弛緩し了らないのみならず、寧ろ其の第三五言句の峰が高いやうに感ずるが、俳句の方は之に反して第三五言句の終で全く弛緩して了ふ上に、第二七言句の峰が高いやうに感ぜられる。それ故短歌の上句と俳句とを比較しても其の心持はよほど違ふ。是は如何なる短歌でも、上句だけ切離したら俳句になるといふことの出來ないのと同一である。況して下句を加へた、短歌の全詩形と俳句との感情比較に於ては尙更である。試みに附合の句を取つて、前句と附句とを合せて和歌の形で讀み、更に前句だけ獨立させて讀んで見たならば、其の差が直ぐわかるだらうと思ふ。かくて短歌の方は長い時間內に情の波を緩やかに描き、俳句は短時間に一張一弛變化が急劇である。從つて和歌は纖弱といふやうな感を與へ、俳句は遒勁といふやうな感を與へる。自然其の印象に於ても短歌は朦朧で俳句は明晰である。

和歌が五七から七五に轉じたことは歷史上明かな事實だけれども、今意味の斷續からいふことは差措いて、之を上句・下句と別つことは卽ち形式上から已に七五になし了つたものと言はなく

てはならない。此の點に於て、俳句も勿論七五には相違ないが、和歌のそれとは趣が大いにちがふ。元來五七調が莊重で、七五調の輕快であるのは、主として其の前部に對する後部の輕重に起因するやうに思はれる。恰も漢詩の五言が二・三の形で莊重であり、七言が四・三の形で輕快なのと同一である。俳句がそつくり短歌の上句を貫ひ承けて、其の輕快を破るために種々の手段が取られてはゐるが、一般に其の第一の五言句と第二の七言句との間に大休止が置かれるやうである。其の休止が全詩形を兩分して前部と後部とを對立させる氣味を持つてゐる。すなはち後を重くするのである。これが短歌の輕快なるに對して、俳句の莊重になるわけである。俳句が五七調の萬葉和歌と相近いのは主として、これに起因してゐるやうに思ふ。俳句にはよく輕妙といふ如き形容をすることがあるが、それは短い內に手際よく內容を盛るといふに過ぎないのであつて、律格の上からは短歌よりも重いといはなくてはならない。尤も短歌の下句の七七であることは其の輕快さを終で落着かせてゐるし、俳句の末の五言であることは多少其の莊重さを和げては居るであらう。

次に之は直接其の詩形から來る結果ではないが用語や句法から來る影響である。比較的長い和歌が文章上省略とか顚倒とかを多くしなくて足りるのに對して、短い俳句に之等が多く用ゐらるべきは自然である。其の結果、俳句は體言が多く、用言の少くなる傾があつて、句が點々切れ勝ちである。加ふるに切字などいふものがあつて、休止を明かにすることは短歌に比べて大いに違ふ。卽ち短歌は進行が流滑に行くし、俳句は訥澁になり易い。初期の俳句の和歌に近いのは形式上からは之で說明が出來ようと思ふ。

以上が音性律より見た兩詩比較の槪略であるが、其の强弱といひ、明晦といひ、輕重といひ、流澁といふことは、互に相關聯した性質であつて、其の之を起し來る原因も亦相混淆して劃然區別の出來るものでないことは無論である。

三

こゝに附記したいことは響と裝とに就いてである。自分の所謂響とは音聲をいひ、裝とは外貌をいふのであつて、これらは一面內容から來ることではあるが、外形にも關して居るから、玆に附加へて置く。短歌と俳句とに於ける響と裝との差異は專ら其の採用する用語や題材から起つて來ることである。日本音の本來平坦で變化に乏しいことは爭はれぬ事實であつて、それが雅正と認められる言語であるほどさうなのである。從つて因襲的に或範圍を出ることの出來なかつた和

歌が、音聲の種類に於て貧弱であることは亦事實であらう。然るに俳句の開拓者は和歌の敢へてしなかつた俗語をも取入れ、漢語をも取入れた爲に、音便等に由つて變化した音や、日本語に固有しなかつた拗音・撥音・促音又は入聲音などが多くなつて、音韻上甚だ豐富になつた。之が響の差であつて、前述の律格の性質にも大いに影響するものである。この點に於て現代歌壇の革新が先づ音聲の開放から始まつて居ることは面白い現象である。即ち明治時代の新和歌が國語の音便をも構はず使用し、漢字の拗音・撥音・促音等をも嫌はず詠入れ始めたことであるが、かゝることは古い和歌には決して許されないことであつた。しかるに俳句には已に三四百年以前にそれが自由にされてゐたではないか。

次に題材であるが、和歌は比較的餘り卑近なものを取らなかつた。つまり趣味の範圍が限られた爲に和歌中のものとすべからざる物があつた。然るに俳句は殆ど何でも詠み得るやうに開放した。むしろ卑近なものに其の趣味を求めようとした。從つて其の裝に於て兩詩の差が生じて來た。和歌は品位を保つたが、俳句は敝衣を纏ふことを敢へてした。和歌が堂上、俳句が民間といふことは、其の弄ばれた社會上の區別からであるが、抑〻詩自身の扮裝が公家と百姓との差であつた。之は決して趣味の高下や、詩としての優劣を論らふのではないが、響の貧弱なものは平板に流

れ易いけれども、常に正體を得易く、響の豐富なものは變化が多いけれども、蕪雜の弊に陷ることがある。裝の高いものは都雅だけれども典型的になり易く、裝を下すものは鄙俗に墮し易いけれども、清新奇拔であり得ることは、亦兩詩の異なる一方面であると觀るべきであらう。

四

第二、內容から考へて見たいが、先づ其の材料についてである。かゝる短い二つの詩形に盛るべき內容は、共に大きなものであることを容さない。何れも材料の時間的・空間的延長に大制限を受けて、到底我が長歌や泰西に於ける敍事詩の如き自由さは望むべきではない。音數上より見た兩詩は瞬間的の狹少な材料に止まらなくてはならない。明治文學界の新要求が新體詩を生んだのは無理ならぬ所である。

それにしても、まだ短歌の方が俳句に比して大きな內容を盛り得る、即ち描寫力の大きいことは爭はれないことである。元來時間的延長の材料は空間的延長の材料よりもより大いなる描寫力を要し、主觀的材料は客觀的材料よりもより大いなる描寫力を要することは事實である。この點から觀た時、短歌が比較的に時間上、主觀的材料の描寫に可能であり、俳句が空間上、客觀的材

料の表現に適切であることになる。之は兩詩の形の長短から考へたことであるが、其の律格の性質なる明晦・强弱・輕重・流澁の別より起る要求にも照應して居ると思ふ。即ち抒情は纖弱・朦朧・輕快・流滑な短歌の詩形を借らなくてはならず、敍事――人事・自然を含んだ廣義の――は遒勁・明晰・莊重・訥澁な俳句の詩形で出來る。敍事の中でも人事を描く敍事（狹義の）はむしろ短歌の能くする所で、自然を寫す敍景が俳句に適することとなる。これは歴史を見ればやゝ明かな傾向をなしてゐて、古來短歌の名吟には純主觀の戀が多く、客觀の材料といへども、常に主觀を交へ勝ちな傾を有つてゐたのに反し、俳句の傑作には純客觀の敍景が多く、主觀の材料といへども、全く客觀を離れることの出來なかつたことは、其の季といふものがこの詩の大きな約束になつてゐるのでも知れる。

つまり和歌は抽象無形に趨ることがあるけれども、俳句は有形具體に止まらなくてはならない。誇張して言へば、短歌は空想を交へたロマンスになり得るけれども、俳句は現實性を持つた自然に居なくてはならない。明治詩壇の革新に於て、明星派和歌の取つた方向と、日本派俳句の取つた方向とを比較すると、此の對照がよくわかる。短歌の軟文學に近づき易く、俳句の硬文學に親しみ易いのは一は此に基因する。

終に、取材の範圍であるが、之は前述の通り、和歌が甚だ狹少であつたのに對して、俳句は廣汎に之を開放した。和歌が主として高級感覺的の標準であつたのに比して、俳句は低級感覺的の材料をもすべて捨てなかつた。和歌が積極美を追つてゐるのに對して、俳句は消極美の探求に力めて、時に或は醜と思はれるものをも美化しようとした事は、固より其の趣味に因ることではあるが、取材上の大きな差異と言はなくてはならない。現代の新詩壇の風を觀ると、此の點に於て兩詩が相近づいて來てゐるけれども、其の變化はむしろ短歌の方にあつて、俳句は已に夙く取材上全く自由にされてあつた。短歌が用語上開放され、取材上自由にされたことは、必ずしもすべてを俳句に倣つたとは言はれないが、其の革新がいづれも俳句より遙かに後れて表れたのであつて、此の點は俳句が短歌に先んじた一大炯眼と言はなくてはならない。

五

次に描寫と鑑賞とに就いてである。短歌と俳句と若し同樣な描寫を取つてゐたならば、詩形の大小に比例して俳句は到底短歌の敵ではない。そこで短歌が文章上の要素から見ても首尾缺くる所なく、語法上から云つても理路を踏んだ、いはば平板描法とでも云ふもので行る餘裕のあるの